

1319

「御文庫廿二番箱四卷中」「義久公御譜中此本在帖佐田形對馬トアリ」
一年頭之事、

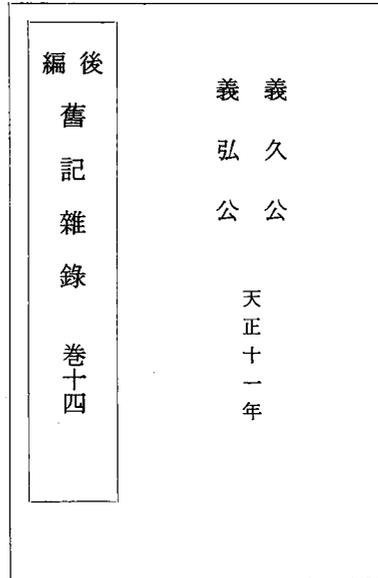
1318

「樺山規久譜中」
天正十一年癸未、肥後國日比良城被陷之時、討敵蒙疵、
雖然不深也、「月日追考スヘシ」

1317

「義弘公御譜中」
天正十一年癸未正月、肥筑政道粗成之之暇、自八代城揚
歸鞍鞭者也、

(表紙)



一次馬ノ事、

一至暮冬、北目手切之御働肝心之由候、乍去忠平・忠宗
足輕等少々差越見せ申候之處、不審之儀多々候之由之
事、

一至宗運者、一和之儀雖申談候、自紹員者菟角無承旨候、
紹員御事者、先年鹿兒嶋爲見物御下向之砌、旅宿へ雖
尋申候、未明御歸宅之由候間、中途追付馬等進之候、
其以後者互書音等申事候、然處今度無菟角之儀候事、
薩摩各中殊外不審被申候条、一通等取替申度候之由之
事、

一至龍造寺者、前々者無申談儀、此六七ヶ年申合候ツ、
今度就弓箭、從龍造寺如入魂者、對相良家爲嶋津家和
談之儀、頻調達雖被申候、至彼家者度々神文等雖取替
候、無其首尾候之条、斟酌申切候、宇土・隈本へ從薩
广番手差籠候事茂從龍造寺助言故候、其上彼家之事者
累年豊州へ隔心之躰候つれ共、終無差行候、然処於日
州表豊州衆討果候、依其競肥筑兩國所勤候、此時者嶋
津家之芳志にこそ可被存候處、如何躰之儀候之欵、天
草五人之衆へ押入、質人を被取候之事不審深重候、彼
衆之事者此内對薩摩可爲幕下之由、直被申上候、無其

紛候、殊更限本之質迄茂押取候事、對薩广隔心之根元候事、

一有馬方・田尻方之事、此内聊も至薩摩菟角被申儀無之候、從薩广茂彼家計略等之儀無之候、然處進退被及難儀候之欵、忠平・家久迄憑入之由被申候、至鹿兒嶋從兩所注進之砌、太守其餘各中茂彼方角之事、海陸相隔在所候之条、加勢等之儀難成事之由、雖被申越候、御兄弟共若氣之故、高來へ兵船等被差越候、彼表之事茂大方勝利之躰候、不可有其紛候、又田尻へ加勢等、是又難成事、各雖致覚悟候、右之趣同前候、此上彼兩所縱雖没落候、爲薩摩非瑕瑾候、又非弱氣候、此内在陳之衆僅五十日三十日之支度候て罷立候之間、先く致歸陳候、必閏正月之始之比者、又く諸軍相催可罷立候、其刻萬端宗運可申談候之由候之事、

一家久以媒介、此表一和罷成候、薩摩諸軍被申事候、宗運之御事者、至肥前直孫を被差渡候上者、對薩摩眞実有間敷候之条、對阿蘇家長くと弓箭を被取候て可然之由、皆く雖申候、對神領弓箭無望之由、太守も被思食立候、忠棟も存候故、當時之姿一着候、然上者向後萬端不殘心腹、互可申承候事、可爲大慶之由候事、

右之条く從薩摩

(宗運)
甲斐民部入道殿へ

最前被仰通条數

田方千滿殿

〔此御書、天正十年比カ〕「義久公御譜中ニ天正十一年欵ト朱カキ」

1320

〔御文庫廿一番箱四卷中〕「義久公御譜中案文有之トアリ」

条く

一山川湊之儀、先規御祈所歷然之条、不違其筋諸公役可有丁寧事、

一唐土・南蠻船着岸之時者、則於鹿兒嶋被遂相談可然事、

一至寺社家并地下人、或遺恨等、或雖有咎、堅被達公儀、明鏡之沙汰肝要之事、

但忽可被打果程之爲罪人者、不可及懸合欵、

〔御譜ノ朱カキ〕

〔天正十一年〕

〔朱カキ〕

〔顯姓殿山川地頭定之節、從老中被遺候案文也〕

1321

〔正文在顯姓右京〕「義弘公御譜中ニ在リ」

〔牛王〕

天爵起請文之事

1323

「本田氏文書」

上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神部類眷屬、別而九

于時天正十一年潤正月吉日

島津兵庫頭忠平

1322

『加久藤二之宮御寄進』

一大般若一部并十六善神王本尊

奉寄進二宮五十六善神

大般若經一部

連々御取置之段、以神文被顯之候、祝着之至難盡筆紙候、
扱者對久虎爲拙子不可存疎略候、
若此旨於相違者、
上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神部類眷屬、別而九
州鎮守彦三所權現 霧嶋六所權現、殊者眞幸院擁護白鳥
六所權現 飯野鎮守一宮大明神 天滿大自在天神、各神
罰冥罰可蒙身上者也、仍起請如件、

天正十一年癸未

二月十日

額娃(久虎)左馬助殿

御返報

兵庫頭

忠平(花押)

1324

「御文庫三番箱宝鑑中」「義久公御譜中正文在伊地知彌吉郎トアリ」

州鎮守彦三所權現 霧嶋六所權現、殊者眞幸院擁護白鳥(鳥)
六所權現 飯野鎮守一宮大明神 天滿大自在天神、各神
罰冥罰可蒙身上者也、仍起請如件、

天正十一年癸未

二月十日

兵庫頭

忠平(花押)

本田刑部少輔殿

猶々書狀之躰、早内輪之申事俄出來、既弓箭取向候
爲躰故、路次不自由之儀候間、如此候、次領知方之
事、伊集院右衛門大夫かたまで申遣候、弥此砌無相
違之樣頼存計候、

内々申度折節、從醍醐山此沙門衆下國之条、可及書信欵
之由候而相尋候間、令馳筆候、抑去年六月二日、於京都
信長公不慮之刻、拙者事隨分手前成氣走候處、連々對我等
信長馳走入魂崇敬之儀を令遍執(遍)、倭人惡人共恣ニ申掠、
剩理不盡之風聞候ニ付、不及了簡、先右之山上ニ令逼塞、
無誤趣申分候之處、一々被聞届、預懇札、一段可有助成之
由、信長之息(備考)三七郎被申、既至美濃國可下向之旨候ツ、
先案堵之樣ニ存候砌、無程内輪之相論令出來、羽柴筑前(秀吉)

守京都令進止候處、彼佞人共又企讒訴、惡様ニ申成、虚名虚説、沙汰之限、口惜次第無是非候、併久不知行候領知并新知、悉如形被申付、一ヶ國も二ヶ國も可宛給之由、信長常々約諾を羨、寄事於左右、跡職ニ懸目、自然又我等威光も至在之者、佞人共之手持如何与存候哉、都鄙へ愚身逆心之通を申觸爲躰、餘無念ニ候故、貴國を頼申及下向、自其かたらひ申、可申達与存候つれ共、令思案候ニ、遠國之儀ニ候へハ、弥可申分子細無之ニ付、如此なと、徒者共申成、猶以うつもれ候へん事治定、又ハ於其方も、世上無正躰不分理非事をハ無分別、上下不審も可在之時ハ、歎ケ敷事たるへきと存候て、連々申通候ニ付、遠江國へ令發足、徳川三河守家康を憑申分候処、尤無余儀之由被聞分、則京都へ被申上、是非共無疎意趣可申達旨、一段頼母數様躰共候、家康信州・甲州・駿州・三州・遠州五ヶ國被任存分候ニ付、東八ヶ國之者共之儀ハ皆々隨申候、京都之事不及申、近國之諸侍共、家康吳見次第之由申、付置使者躰候間、我等上洛之事も、定可相濟候、縱至其儀も、天下之姿破滅之時節与相見候条、善悪貴方を憑入、行々可令下國心中候、拙者氣遣之刻、此持明院・安養坊彼寺中ニ相拘、無比類忠節共候、兩人口狀

ニ具申含候、被召出、直ニ御尋所仰候、成忠公神妙之趣、於被加御詞者、可爲本望候、次ニ堀池父子御懇切之由申上候、是又令祝着候、猶期後音候、恐々謹言、

〔御辭中ニ天正十一年下朱カキ〕

二月廿日

〔前心〕
〔花押〕

修理大夫殿

〔上包〕
修理大夫殿

龍山

1325

〔北郷一雲譜中〕

天正十年六月、右府信長公爲明智日向守光秀被弑、

前久公落飾改判形、翌年二月、賜御書於一雲、有正文、

左記之、

1326

猶々去年錯乱之刻、則令法躰、判形如此改候、何様

爰元如本意成行、以後者隱遁与云、至其方可及下國

候間、万事可頼入候、

好便之条令啓候、抑去年夏以來者、下々成下無是非次第候、内々申下度折節、從醍醐安養房・持明院令下國候由候条、具様子可申候、直ニ被相尋、自然馳走肝要候、此沙門衆去年已來對拙者忠節共候、委曲雖可申候、可有口

狀候条、不能詳候也、狀如件、

二月廿日

(前々)
(花押)

北郷時久左衛門入道とのへ

1327 「義久公御譜中」

天正十一年癸未三月五日、義久使白濱次郎左衛門尉令執事等曰、有南蠻之異僧、來麿島得宅地請居住者、我已容其言、許一宅居于此也、熟按之、當家曾不容夫宗於國中、就中亡父伯圍齋制禁殊以嚴矣、速可之於追放、同八日、再謂曰、令南蠻馱舌之人得居國中、何不違佛神冥慮乎、勿敢猶豫焉、

天正十一年三月十一日、於八代家老及老輩等有爲評議、其條目曰、

秋月殿被申事、八代練替之事、田尻殿へ兵船之事、大矢野殿進退之事、御出勢遲延之事、

兵庫頭忠平聞件條趣曰、秋月氏所謂旨趣者、與龍造寺氏和諧之事也、自田尻至肥後無障爲領地、則和平可也、八代練替者不倍眞幸田數者、不能移居焉、令赴兵船於田尻、不可不急也、出軍衆於他方者待來秋、而後可宜、改易於大矢野氏者、定於彼地警衛主、而後出其令者可乎、

天正十一年三月廿日、相良四郎太郎忠房爲述禮詞、來于麿島、今日義久遂對面矣、太刀・弓・征矢・馬鞍置等持參也、又持參樽酒自酌之時、忠房之弟出頭、及深水三河守・犬童氏亦進席末、各有進獻昇盃酒也、

天正十一年三月廿三日、兵庫頭忠平有遣鎌田刑部左衛門尉・吉田美作守達諸將之事曰、八代警衛我已固辭、而會得免之佳期矣、今日以後守將誰人乎、欲城門蟬輪郡鄉村里速附屬其人也、

天正十一年三月廿六日、相良四郎太郎忠房爲己代、未露臆念之無變違、以裁起請文獻焉、今日招忠房兄弟、進饗開醺、且復昇寶刀矣、弟長壽丸亦昇丸貫脇指也、其後裁返報之神文、所以昇忠房也、

1328 「義弘公御譜中」

天正十一年三月十一日、太守使鎌田刑部左衛門尉數條之間可否、其中有去眞幸院可移居肥後州八代之令、忠平報曰、八代之地褊小也、不倍眞幸田地者不得移居、固以辭之也、

天正十一年三月廿三日、肥後州八代地自今已後可爲守護領、然則城門蟬輪可附與誰人乎、俾一价達國老也、

「正文在出水來宗像長左衛門」「義弘公御譜中ニ在リ」

態捧慶書候、仍於此表御在國中度々得貴意候、外聞実儀

殊重候、就中奉對 御家、爲阿蘇家從前々無緩疎之旨、

御老中江申入准一致候、一入本望候、爲右之御祝儀令啓

上候条、腋刀一腰奉行、金賣付、令進獻候、表御礼計候、恐惶

謹言、

「天正十一年カ」

三月廿四日

（甲斐）

宗運（花押）

武庫公

參人、御中

「在別紙」

追而鞍橋一口蔭絵、乘具、令進獻候、表御祝儀計候々々、

「御文庫廿二番箱四卷中」「御譜中正文有之トアリ」

相良殿へ

今度以 神載御覚悟之条々露顯、殊更永々可被勵忠懃之

趣、寔令感憚訖、剩戰死之跡相續之上者、聊無緩疎、向

後可致連綿者也、若有違犯者、

「義久公御譜中朱カキ」

「天正十一年三月」

「全卷中」

就元服之儀、今度使節御慰懃之至候、即任懇望候、向後

弥甚深之儀、尤可爲本悅候、仍馬一疋進之候、寔表祝義計候、恐々、

四月十日

城拾郎太郎殿

「義久公御譜中、天正十一年秋ト朱カキ、案文有之トアリ」

天正十一年九月、肥後佐敷在陳、

新納越後守忠包

天正十一年未十月七日、堅志田破布（忠包）の時軍功、

新納右衛門佐久饒入道遊甫

天正十一年十二月、八代在陳、

丹生民部少輔

天正十一年未夏の比より有馬方へ番兵を被遣、

川上左京亮

天正十二年申二月下旬より高木へ被差渡、同三月廿四日、

隆信方と合戰軍勞ノ輩、

大將

中將太輔家久

息又四郎豊久「十三才」

又四郎茂久「十七才、手負」

圖書頭久長

川上上野守「忠克」

平田美濃守「光宗也」

平田左近將監「藏宗也」

平田九郎左衛門尉「光宗弟ナ、藏宗弟九郎勝宗コトカ、」

左近子「十九オニ当ル」

平田新四郎太郎左衛門増宗「△」同新七郎久兵衛宗親幼字カ、カ新三郎トアリ然レハ十四オニ当ル

○平田新左衛門宗張

【○】平田狩野介宗應関ヶ原戦死也

【○】新納彌太右衛門「忠増」

【○】新納駿河守「三月廿四日戦死」

【○】川上左京亮「忠堅」鷹取城戦死

川上助八郎

山田越前守「有信」

鎌田出雲守「政近」

上原右衛門尉尚張

飯島又左衛門

市來玄蕃左衛門

【○】大寺大炊介釋越戦死

奈良原安藝守「初狩野介」

川田駿河守義朗吐氣の役者也

竹内備前介全

飯肥住人

長谷場兵部少輔「宗純」全

曾木權介守一軒

黒木七兵衛守一軒ヲ討ツ

「肝付彈正忠兼寛」

西原長助

全二男

同新七郎久兵衛宗親幼字カ、然レハ十四オニ当ル

平田孫六宗位後宗備

新納武藏守「忠元」

新納治部少輔

川上參河守「忠智入道脇杖」

川上四郎兵衛「忠元」

川上駿河守

山田新介有信ナルヘシ

上原長門守「尚近」

上原彦五郎分捕萬名アリ

二階堂帶刀

飯肥住人

稻留新介長泰、後相良ト号ス

高崎大炊介

奈良原源八郎

飯肥住人

宮原越中守分捕萬名、若鹿城攻戦死也

長谷場兵部少輔「宗純」全

曾木權介守一軒

宮原左近將監景晴

濱田民部左衛門、分捕

天正十二年九月廿六日、小代城之腰ニ白間野方陳破却肥後ノ内也

之節分捕手負衆、

宮崎衆 和田刑部左衛門

分捕 中村内藏助

丸田左近將

山下兼助

指宿大炊權助

宮崎衆分捕 村岡彌助

弓削治部左衛門

谷山仲左衛門

永峯雅樂助

安樂三助

新納右衛門佐

勝世氣

天正十三年九月三日、合志ニ下城サスヘキタメ被差遣、

同五日、合志下城也、

稻留新助

新納右衛門佐

志布志衆 久留伴五左衛門

永山兵部少輔

唐仁原藤七兵衛尉

海老原外記

永山平内左衛門

瀨戸山藤内左衛門

上井伊勢守侍者 加治木治部左衛門

鳴海舍人助

仁田脇伊賀掬

山内彦四郎

1333

「義久公譜中」

一天正十一年三月廿六日、相良四郎太郎忠房獻起請文、

〔全〕

一同年五月廿日、有馬氏之書簡到于鹿兒島、其書曰、去六日、深江・安徳兩城主改先非、請屬旗下、許諾將旗下兵於入其地也、

〔全〕

一同年六月十三日、新納刑部太輔忠堯・川上左京亮忠堅進深江城挑戰、

〔全〕

一同年八月下旬、令平諸將曰、中務少輔家久及上井伊勢守將渡有馬、

〔全〕

一同年九月十七日、撰忍入敵城之有聲譽者三十人、密遣彼等向堅志田、

〔全〕

一同年九月廿日、合志氏使一僧請和諧、

〔全〕

一同年九月廿七日、龍造寺與秋月者屬于薩摩旗下云々、

〔樺山紹劔自記〕

一天正十一年癸未春夏ニ至て、うちのこか・合子・津守・木山・三船・隈之庄、各々境々を小仕形に仕責候而、心安く成行也、然處ニ相良義陽吉日三船江勢遣して打負、自身打死す、是爲何子細そとて、薩州より八代江番手を差籠らる御談合候而、相良ハ求摩へ残されぬ、武庫様八代江御座候、其時分我々吉利殿江番替候而、八代ニ而 武庫様江御喜申上罷歸候、其後太郎三郎規久彼隈元江罷居候刻、ひららと申城仕落申候而、すり手共負候而、太刀下ニ而敵共打せ申候事、目出度由也、

〔伊地知權左衛門家藏〕

態令啓候、仍兼日被貴家尊意下候之条、早速雖可致言上候、于今遲滞心外令存候、殊萬方被屬御案中候、千秋万歳候、隨而御太刀一腰・馬一疋代進入候、表御祝言計候、彼是爲可申、貞方右衛門佐差渡候、萬端可預御取合候、恐々謹言、

1342

(二月十二日)

伊知地伯者守殿
(マゴ)(重秀)

御宿所

(字心)
純玄(花押)

「上井寛兼日記」

天正十一年五月廿四日、如常出仕申候、直ニ早々敷參上申候由蒙仰候、町田出羽守殿・伊地知伯者守殿ニ而、鎌雲・山新・拙者三人江被仰聞候、武庫様八代へ御移被成、御名代ニ御坐候而、國家之儀等御裁判之由被仰出候、數度御斟酌候へ共、堅被仰候ニ付而御領掌候、扱へ老中衆其外御使衆、又ハ地頭衆之中ニも御用次第彼方へ被指移候而より、諸篇之曖等可事成と被思召候、此等之儀如何可有之哉、各へ御尋之由也、然者先々申上候、條々被仰聞候、具ニ承候早、御談合衆猶々可被參之由候間、余ハ次第々々ニ御談合たるへく候、先々去春參上之刻、委被仰聞候キ、如其武庫様御領掌候哉、目出奉存候由申上候也、五島宇久和州より使者貞方右衛門佐進上也、我々へも書狀并太刀・織物一預候、書面遙御無音所存之外候、頃方方屬御案中之由共候也、

〔本文書へ上井寛兼日記ニ該當セズ〕

1343

「藤野家文書中」

〔高野〕天野社(舞卷)
かうや山あまのゝやしろのふかくの事、まへくのこと
く、れい人ありやうに申つけ候へのよし、りんしをなさ
れ候へハ、とかくの御返事さへ申入候へぬ、あまりなる
事にて候まゝ、もんせきよりも、かたく申つけられ候て、
まいらせられ候へのよし、申せとて候、このよし御ひろ
う候へく候、かしく、

御ちこの御中

御ひろう

「一乘院」

〔まじり〕
「らんりさまより 仁和寺へ参候御奉書」

〔端裏書〕

「女房奉書 天正十一
四八」

1344 「正文在帖佐次左衛門」

到其堺長々滞在、籠城之窮屈無申事候、切々可有通用候之処、海陸共不輒之故押移候、聊非心疎候、今度之軍勞何様於向後忘脚不可在之候也、仍狀如件、

〔朱カキ〕
「天正十一年 卯月十六日 忠平(花押)」

帖佐彦左衛門尉殿

兵庫頭

〔上包〕
帖佐彦左衛門尉殿

忠平

〔天正十一年四月廿日、筑後國田尻城ニ而相届拝領〕

1345

〔御文庫廿二番箱四卷中〕〔義久公御譜中案文有之トアリ〕

〔義カキ〕
〔天正十一年癸未〕

〔上書有之〕
〔遊行上人御在國之時老名數中より案文〕

日州都於郡之光臺寺・光照寺兩道場頻依御懇望、不被及
吳儀、一節陋邦江御滯在中被致寄附候、於御上國已後者、
從爰元可申付候、其謂前代未聞候之条、如斯候、併應御
返章可得其心候、恐惶敬白、

〔御譜中朱カキ天正十一年〕
卯月廿五日

(木田)
親貞
(伊集院)
忠棟

遊行上人

近習御中

1346

〔義久公御譜中〕

〔正文在村田太右衛門〕

以尊慮村田右衛門入道殿出頭之儀目出候、然者則雖可有
御扶持候、少分之儀還而可爲如何候欵之間、先々無其儀

候、何様闕所出來次第、廿町計可被宛行之由、被思召候、

内々爲御存知候、自然之御次可有御披露候也、恐惶敬白、

〔朱カキ〕
〔天正十一年〕卯月廿七日

重貞(花押)

進上 衣鉢侍者禪師

1347

〔正文在飯野白鳥〕

肥州表防戰最中之刻、各入魂候之段、尤頼數子細候、向
後者從當邦茂不可有疎遠候、殊太刀一腰・鎧甲到來、殊
重之儀候、仍馬一疋月毛、印進之候、寔嘉瑞計候、猶年寄
可申候、恐々謹言、

〔天正十一年〕
卯月廿八日

義久(花押)

甲斐民部入道殿

〔上包〕

甲斐民部入道殿

義久

〔義久公御譜中ニ在リ〕

1348

今度到中國被移 御座、對毛利 御歸洛儀、被仰聞處、
則被及御請候、然者始武田・北條・上杉、其外東西之軍
士令一統、既御進發火急候、就其可被抽忠功通、太守江
被成御内書候、幸先年其方參洛之儀候条、此節弥御馳走

〔義久公御譜中〕

肝要旨被仰出候、尤雖可被成御内書候、唯今無其儀段、委曲任口上候、隨而蓮華坊事、聖護院殿御家來候、無聊余仁候間、被差下之候、猶得其意可申由 上意候、恐々謹言、

〔天正十二年カ、天正五年乙卯月十七日〕

昭秀判

昭光判

城入殿

眞木島玄番頭

一色駿河守

昭光

〔上包〕
城入殿

1349

兩肥之弓箭爲靜謐、此度不圖致出馬、龍造寺隆信始歷々數千人討果、滿足之至候、仍就此等之儀、先日者賀頌珍重候之處、將又一輪并虫藥到來、歡悅候、猶諸吉期面談省略候、恐々謹言、

〔天正十二年〕

卯月十九日
〔イニ十三年トアリ〕

安國禪寺老和尚

義久(花押)

1351

〔義久公御譜中〕

田尻氏潛馳一价、贈簡書於執事等曰、去四月廿六日、向隆信之陣、既及合戰遂得勝利、殆乎屠殺梁川之士卒五十餘員、是亦與薩摩之守兵致粉骨故也、其書五月廿日所到着薩摩也、

天正十一年五月廿日、有馬氏之書簡到于鹿兒嶋、其書曰、去六日、深江・安徳兩城主改先非、請屬旗下、許諾將旗下兵於入其地也、

有馬氏丁入守兵於安徳之時、深江變前約、以不得屈旗下云云、由是安徳之守兵窮困之至也、因此之告、義久來月二日欲向夫地爲進發、先遣新納刑部大輔忠堯・川上左京亮忠堅、領騎步赴其地、各已渡于高來郡安徳、則城主及有馬氏之一族等迎來海濱、而遂對面賀渡楫矣、同郡深江・島原屬隆信、深城陸警衛實堅矣、是以敵城難拔、而我軍只鎮守安徳一城耳、聞此之告、六月二日之進發彌以必定、揃兵器催士卒之際、忽有告來曰、我師旅之在于高來者度々有勝利、無敢敗績、由此言止義久之進發、田賦每十五町定勇士一人、欲渡有馬增軍勢者也、

天正十一年六月十三日、忠堯・忠堅進深江城挑戰之際、

「御文庫廿二番箱四卷中」「義久公御譜中案文在加治木
衆長谷場傳左衛門トアリ」

候、

忠堅被傷、意氣揚々自得歸、與忠堯相對云、見我哉、見我哉、戰而有傷、實男子之本意也、忠堯聞之憤曰、此可笑之言也、我豈下於汝乎、遂奮向敵軍、自匄新納刑部大輔忠堯、而亂戰死之、因是我軍垂翅、而退入安德也、

一天正十一未五月、是より以前龍造寺隆信有馬領之嶋原・深江を乗取候ニ付、有馬鎮貴此御方江御加勢之願被申上候処、此月六日、深江・安德之兩城主も御味方仕度申上越、其時分忠元ニ者病氣ニ而、忠堯并川上左京亮忠堅ニ被仰付、人衆召列有馬江罷渡、安德城江致在番候處、深江城者謀叛ニ而、却而此御方之隙を窺候間、六月十三日、忠堯等押寄相働、終戦死仕候、時三十歳、貫明様被聞召上、則懸命之地として大口青木村之内江寺地拜領被仰付、菩提所として、泉徳寺与申寺を建立仕置、今以老段四畦廿八歩之御免地ニ御座候、同十月七日、忠元并諸軍衆堅志田町ニ打入、破却爲仕由御座候、

「忠元勲功記」

一天正十一未五月、是より以前龍造寺隆信有馬領之嶋原

・深江を乗取候ニ付、有馬鎮貴此御方江御加勢之願被

申上候処、此月六日、深江・安德之兩城主も御味方仕

度申上越、其時分忠元ニ者病氣ニ而、忠堯并川上左京

亮忠堅ニ被仰付、人衆召列有馬江罷渡、安德城江致在

番候處、深江城者謀叛ニ而、却而此御方之隙を窺候間、

六月十三日、忠堯等押寄相働、終戦死仕候、時三十歳、

貫明様被聞召上、則懸命之地として大口青木村之内江

寺地拜領被仰付、菩提所として、泉徳寺与申寺を建立

仕置、今以老段四畦廿八歩之御免地ニ御座候、同十月

七日、忠元并諸軍衆堅志田町ニ打入、破却爲仕由御座

候、

「上書在之」
「天正十一年癸未七月十一日永興寺御使僧之時」

「合志殿へ 御書之案文」

去春以來當邦可爲幕下之由、尤肝要候、仍爲右之祝儀、太刀一腰・馬一疋鹿毛進之候、向後連綿之儀不可有悞變候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

「御譜ニ朱カキ」
「天正十一年」七月十一日 義久

合志殿

「全卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

「上カキ在之」
「天正十一年癸未七月十一日永興寺御使僧之時」

「甲斐宗運へ 御書之案文」

去春以來當邦可爲幕下之由、尤肝要候、仍爲此等之祝言、太刀一腰・馬疋^{川原毛}三葉柄^印進之候、向後連綿之儀不可有悞變候、餘者年寄共可申候、恐々謹言、

「御譜ニ朱カキ」
「天正十一年」七月十一日 義久

甲斐民部入道殿

「御文庫二番箱義久公二軸中」

（本文書ハ二五九号文書ト同文ニシキ省略ス）

「義久公御譜中」

天正十一年八月下旬、令乎諸將曰、中務少輔家久及上井伊勢守將渡有馬、八代之宰平田美濃守亦率肥後州中所領之軍衆、宜渡有馬致籌策也、稱八代警衛之代、伊集院右衛門大夫忠棟今日廿四日所以進發也、各先往八代、而後計時宜可渡有馬云云、

「御文庫廿二番箱四卷中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

爲 上使進藤筑後守殿、去春以來到當國滞在候、然者此度歸洛之儀候、海陸通道之事、偏御懇切所庶幾候、猶委悉可被遂口達候之哉、恐々、

「御譜」天正十一年ト朱カキ

九月

大友殿

「上使進藤殿滞在、天正十一年ノコト也」

「義久公御譜中」

天正十一年九月十七日、撰忍入敵城之有聲譽者三十人、密遣彼等向堅志田、是亦去年以來松浦筑前守以所可忍入之類得要所故如斯、諸卒待月之出東山、而後進發、或向豐福口、或向寶滿越、然而敵方已知此謀、而不得忍入、

數日巧謀爲空虛、惜矣乎、懼忍之銳士明且難退、諸將率師旅進小熊邊地、放火村舎、由是忍之數輩無恙得退去、丁此之時、遁去村舎者斬首八人也、

「友イ」

天正十一年九月廿日、隈本城主城入道一要遣一价於八代、又隈本守將北郷彈正忠忠虎同差一价曰、健軍地頭忽然爲質來于隈本曰、請勿破卻我領土、我將等聞此言曰、向三船逐一戰、則可許容、不然不能焉、又合志氏亦使一僧請和諧、我將曰、是亦與阿蘇家忽爲氷炭、顯其驗、則窺量眞僞、可報成否也、

天正十一年九月廿七日、秋月氏欲令使僧通達我將等之在八代者、隈本城主城氏某留其僧於隈本、聞其旨趣、使同姓主計助傳八代、實與龍造寺氏和平之媒也、其條目曰、和平之事、肥後傍余之事、有馬表之事、且謂與大友氏俱欲降旗下、而先是日州敗北之憤未止、以難窺量其臆念矣、龍造寺與秋月者屬于薩摩旗下、立島津殿於鎮西守護、各可仰從也、龍造寺當日所領之地無少變遷、則肥後傍余等可隨所望、又有馬表警衛士卒亦速被引退、欲發向豐後州退治大友氏之廻籌策、其故爲小利費兵器、不願士卒戰死、何益之有乎、我將等曰、此言眞乎僞乎未知、雖然告報不得私也、使上原長門守尚近差麿島告義久也、

天正十一年季秋下旬、自麿島稱加勢、向肥之前後州進發軍衆之中、有四元主稅助者、有使渠在肥後州傳諸將之事、十月朔日、到于八代、達伊集院右衛門大夫・平田美濃守・上井伊勢守等曰、向阿蘇領欲企一戰之故、前日既聞上村肥前守之所傳達、義久未嘗及許諾、然而上村曰、非夜月之時者、不能遂此企得勝利、不知已發向乎否、由是言、雖有思慮不得通達也、思慮者何、曰、當家代々禱爾上下神祇、思合冥慮、今也爲神敵向阿蘇領、彎弓放矢如何得神之助乎、雖然甲斐民部入道宗運之陰謀逐日露顯、然則迄後日不可不及一戰、先令渠露違變、而後討其逆黨、則豈可不得勝利乎、且復請有馬進發圖於神靈、神靈許焉、背神告措有馬、向阿蘇領非予之所素願、若已顯其道、雖欲止之亦不能、唯以宗運之逆意及此籌策、忽以懼爲神敵、假使雖爲祈願何有應護乎哉、雖然於三船發向之謀者、可在八代諸將之任評議也、因茲今日於八代、擬評議於島津右馬頭征久旅館、連座之士島津圖書頭忠長・伊集院下野守久治・新納武藏守忠元・宮原筑前守及使役稅所新介・山田新介等也、又合志氏遣一价、甲斐宗運持贈合志之書來、其文曰、去春以降阿蘇家・宗運等既與薩摩爲和平之約者堅矣、何故島津氏忽將伐於我、所以周章也、未知有讒

佞之族、而今然乎否、庶幾再爲和睦之媒、欲屬旗下云云、我老臣等在八代者聞之曰、宗運之所言若不僞者、俾實子一人爲質、速到于此地、不然輕不能許容矣、

上井伊勢守宮崎之士及己之臣共廿餘人、與指南俱差堅志田城邊、將窺見之、各昨日到于其地窺臨之際、敵之步卒發出欲屠殺我之兵、廿餘人運謀略斬得五人、獲敵首者中村內藏助・松本又八左衛門尉・丸田左近將曹・加治木治部左衛門尉、自豐福之指南也、今日二日、歸八代來、令新納右衛門佐捨其首於關之麓也、

1359

〔禪山兵部大輔忠助譜中〕

天正十一年癸未迄于春夏、內空閑・合子・津守・木山・三船・隈之莊、各及于封疆、追退於敵軍、漸已憊于心、爰相良義陽發師旅攻三船、于時義陽敗北而遂戰死、故使薩州之騎步爲警固於八代、相良之家僅殘于求麻畢、而後兵庫頭忠平主渡御于八代、此時以吉利某爲忠助之替、故候八代仲慶賀、爲歸國者也、

1360

〔御文庫三番箱玉鑑中〕

猶々万端被加御憐愍、時々御馳走憑存候、世上逼塞、

隱遁之覚悟候、悉ニ種々似合ニ申子細共雖在之、身

上去年已來如此成行候事も、諸人遍執故と存候間、

弥深斟酌之存分不淺候、次ニ徳川、今度對拙者馳走

無疎意事、忠節無比類候、然者一段鷹敷寄候間、貴

方へ申越、一廉之若鷹可遣候由申候キ、於 御上候

者、可爲大慶候、家康分國馬所候、如何様候も可在

之候、早馬又者隨御好可申調候、後便ニ可承候、内

々被仰通可然候、馬奥方一向各別之様候、堺邊へ於

被仰合候者、則可相届候、拙者於自分も、一疋進之

度候、海上不及調法候間、堺迄可被仰付候、旁伊因

入道可申越候、急便之条、令省略候、

好便之條令啓候、仍醍醐衆去春比候哉、令下國之由申候

間、以書狀申候キ、愚身事、虛名之様子先書ニ如申、從

徳川左京大夫家康被申達、無吳儀去八月下旬及發足、九

月上旬上洛申候、然者羽柴筑前守賄等申付躰候、雖然、

萬事不如意之爲躰候、此節内々約詰候殿料、日州之内領

知方、肥後國相良契約之領分、次ニハ彼十町之未進分、

急度於被差上之者、別而助成可爲厚恩候、偏憑入候、猶

伊勢因幡入道可申下候、恐々謹言、

十月五日

〔前久公〕
〔花押〕

修理大夫殿(義久)

修理大夫殿(封紙ウハ書)

龍山

1361 「義久公御譜中」

天正十一年十月六日、欲犯堅志田、諸將雖急首途、今日

大雨如灑、然而未時過半進發、而豐福・小野・柴山・小

川・高津賀寄一宿於件諸所、所殘之士卒亦悉其夜中進發

也、破口之將帥平田美濃守光宗、領求麻・八代・豐福・

世喜・高津賀・高田・比奈古・田浦・久多良木・佐敷・

湯浦・津奈木・羽月・曾木・平泉・帖佐・日州高城之騎

步發向、其翌七日、破卻堅志田之村市、屠殺敵十人矣、

中取之將上井伊勢守、領大口・一山・菱刈之本城・眞幸

・栗野・横川・加治木・福島・飢肥・曾井・清武・宮崎

・藏岡・飯田・細江・田野・木脇・富吉・野尻・紙屋之

騎步進向、島津右馬頭征久、同姓圖書頭忠長、伊集院右

衛門大夫忠棟引卒清水・曾於郡・踊・吉田・鹿兒島・伊

集院・日置・永吉・伊作・田布施・阿多・加世田・永峯

・下別符・川邊・知覽・顯娃・喜入・鹿屋・串良・高山

・始良・蓬原・大崎・穆佐之軍衆、而屯後陣矣、上井伊

勢守遣所從之步卒於蓮生寺之上、窺見陣營之地之際、不計屠殺敵四人來、其中二人栗野、一人飯野、一人宮崎之士獲首也、使新納右衛門佐唱勝吐氣、而後歸陣、然而途中小野已下彼此村舍一宿、翌日歸着八代也、

同月八日、自宇都催師旅、至隈莊爲一戰、俾野村備中守爲見證隨其軍、今日歸八代來曰、午前無村里之破卻一字、徒爲日中、備中之臣等曰、今日發軍無一術有歸陣是何事也、宇都之士聞此言曰、可進軍卒於敵城近邊、備中聞之曰、今日時移近夕陽、必止之者可也、然而不可、嘉悅飛彈守引師旅、進向隈莊、敵兵出城門競戰、漸宇都之軍敗、而筑麻左近・岩佐已下戰死者殆乎四十餘輩也、

上原長門守自八代來鹿兒島、又往其地、故報諸將曰、龍造寺請和平者、應秋月種實之媒術可乎、其故田尻氏迫窮困、而遠隔海路無由欲救、是以如斯、雖然許否在八代之將等、宜依評議、同十月九日、長門到于八代達之、諸將亦隨此言云云、

天正十一年十月九日、宇都氏遣使僧於八代曰、於隈莊宇都之軍敗、戰死之士等委細口達也、

天正十一年十月廿七日、堅志田口爲築一陣、未時上井伊勢守・伊集院右衛門大夫率於軍衆、所以進發也、所殘之

騎步、明旦廿八、島津圖書頭忠長悉領之進發也、相攸花山定陣營地、鑿山設柵、軍神勸請新納右衛門佐、歛初山田新介經之營之、庶民攻之、不日土木之功成矣、今夜諸口警衛無敢以怠矣、

1362 「圖書頭忠長譜中」

天正十一年癸未、在肥後八代、九月廿五日、集諸地頭於忠長之旅宿、爲發軍之評議、雖然軍旅未至、是以明後日之勦所以延引也、

天正十一年癸未、在肥後八代、而勞于軍務之際、十月廿四日、家老伊集院右衛門大夫忠棟・上井伊勢守覺兼、使喜入式部大輔・伊地知雅樂助告曰、去廿二日、雅樂助雖傳來 太守之命、撰於吉日良辰、至于今日、嚴命曰、忠長爲國老、宜爲國家安泰之政焉、忠長報曰、貴命謹以承知、俟後日憑兩老、可辭退之達卑語、而上達曰、不肖之臣何得關國家之政乎、固辭及再三、而嚴命敢不止、故不得已、而赴其任者也、

1363 「右馬征久譜中」

天正十一年癸未冬、征久・忠長以下諸將俱帥肥後、數日

勞軍務、

1364 「北郷忠虎譜中」

同十一年癸未十月九日、忠虎奉 太守公之命、在番於肥後竹宮口、時與城一要相議、帥師放火村里、得勝利、

1365 天正十一年癸未

六月十三日、新納刑部大輔忠堯忠元の子也、肥前深江城にて戰死、年三十拾歳、白濱志摩守重仲肥前深江戰死とあり、年月なし、歿考、

八月廿日、山内加賀守義藏北郷氏家臣にて三俣院高城小山河原にて戰死す、

十月八日、筑麻左近新納忠堯等肥後の堅志田にて市街を破るの時、隈庄口に戰死、此時戰死するもの三四十人、多胡宗七左近か次にあり、此に歿考、岩佐某・敷根宗左衛門尉以上三人隈庄戰死と頼次あり、此時歿、歿考、南郷左近將監忠信肥後本江にて戰死とあり、此に歿考、羽島新三郎友平肥後隈城にて戰死とあり、此に歿考、

二十五日、鮫島次郎三郎宗備肥後八代にて戰死、年二十一、宗昌の子也、

年月不詳、湯田左衛門重頼肥後に於て戰死、阿多兵部同上注に源四郎子なり、

「島津世録記」

一天正十年壬午冬、龍造寺山城守隆信欲討田尻某、田尻

請援兵於薩摩、義久主聞之、催其兵先渡高來、陷于々岩之城、然而隆信堅陣不退、故我軍渡于肥後比良城、

遂陷其城、是時隆信兵食多、又小代之地附之、其勢難決雌雄、薩摩之軍國遠兵少、糧絶器盡不可久支、是以姑歸陣待其時、且又肥前高來郡有馬修理大夫者、爲隆

信所逼含恨思報、至翌年天正十一癸未夏、有馬請援兵于薩摩、太守聞之、不得已使新納刑部太輔忠堯・川

上左京亮忠堅領兵、渡肥之前州安徳、此時安徳城主有馬某之族派等迎出對面矣、同國深江・嶋原之地皆屬於龍造寺、堅固難拔、故我軍只鎮守安徳、而六月十三日、

忠堯・忠堅往侵深江之城、忠堅相戰被傷、意氣揚々自得歸、與忠堯相對云、見我哉、戰而得疵、實男子之本意也、忠堯聞之憤曰、此可笑之言也、我豈下於汝乎、

遂奮向敵軍、稱新納刑部太輔忠堯、而亂戰死之、故我軍垂超引歸安徳也、太守義久主聞此戰不利、翌年

甲申春、遣其舍弟中務太輔家久、及其子又三郎忠豊後久

從弟島津又四郎彰久・嶋津圖書頭忠長・川上上野介信久・同姓三河守忠智・同左京亮忠堅・平田美濃守光宗

・同姓左近將監・同姓狩野介・同姓孫六・新納武藏守

忠元・同姓治部少輔・山田越前守有信・鎌田出雲守政近・河田駿河守義朗・高崎大炊助・上原長門守尚近・奈良原安藝守・二階堂帶刀長重行・鮫島又左衛門尉、其外上津良・栖本・大矢野・志岐等同來于茲、都合一千五百餘騎赴肥之前州島原、着船於有江、與有馬之軍相合、則漸及三千餘騎也、自此直過深江、急入安徳、一夜之中陣幕已成矣、未久衝進島原促備陣柵、遣使敵城云、與我和睦降參於有馬某、隆信聞之不諾、而自以爲薩摩軍不足憂、笑我之少恃己之多、乃以數萬之兵出、而三月廿四日、與我兵相戰、其衆寡強弱天地懸絕矣、大將 家久素知兵法、申令軍中曰、寧死於肥前州之地、莫苟生以到薩摩、今衆若背命可爲嶋津家之恥辱、我子又七郎雖爲十四歲之童、而不決勝負、無再見鄉國矣、男子而流名於弓箭之地、乃死後垂芳譽於不朽也、故決戰死於此地云云、諸軍皆曰、敢不違令、遂同心定志以死爲限令戰也、自辰至午或進或退、勢同蚌鷁、此時運策從濱邊突出橫攻彼、酒瀨川奉膳兵衛尉・前田志摩守・四本主稅助魁諸兵督戰也、出雲守政近・帶刀長重行指揮之、上原彦五郎・宮原越中守・長谷場兵部少輔・酒內備前守有功、新納駿河守・久永九郎左衛門尉・酒

瀨川奉膳兵衛尉・四本主稅介・上原勘解由兵衛尉・蓑田左衛門尉戰死也、圖書頭忠長臣戰死者、稱爲左京亮、森讚岐守、稱爲小內記、長濱右衛門兵衛尉也及未之初、隆信力窮敗北焉、是時川上左京亮忠堅欲得隆信頭、直馳過隆信旗下之際、隆信不辨自他來高聲叱云、隆信在此向何敗走乎、忠堅聞之始知隆信之所居、而自以爲可得之首、遂直馳進之、則隆信束手無策踞坐不動矣、忠堅乃以長鎗刺伏于地、拔劍欲誅之際、步卒築瀨兵右衛門尉・萬膳仲兵衛尉・出石五郎兵衛尉奔來斬隆信首也、曾木權介討殺守一軒者、家久子又七郎忠豐亦斬強敵一人、其外彰久・忠長・信久・光宗・忠元・有信・政近・義朗等乘勝大戰、呼聲動天地、彼此難分之際、忽有一人來于家久之旗下、以刀刺貫其從者頭、高舉云、見之哉、見之哉、今日之高名者吾也、遂進家久之右、而急刺焉、家久卽向左躍下斬得其首、諸軍見之、感惜謂有豫讓智伯之忠臣也之忠者焉、今聞其名曰、隆信旗下有名之士、而稱江理口正右衛門尉者也、都得敵首者三千餘員云云、或記云、新納武藏守卒大日兵、討取敵三十六人、此時新納亦太右衛門尉忠增得敵首者最初也、白坂駿河守戰功甲于諸云云、隆信所領之城陷者、是時 義久守山・三重・大野・比良・神代・伊福六箇所也乃持隆信首來示 義久主前、然後送之高瀨焉、有馬修

理大夫之本領乃半還與之、日上城自薩摩相換守之、三重・島原之地以忠長爲宰焉、

天正拾一年未正月日記

一元日、武庫様へ參候、忠棟・經平同心申候也、三人同

前二御三献御寄合被成、我々太刀一腰・千疋進入申候、

其後金吾公・中書公御指出被成、其後豊州・薩州御指

出被成、各一座にて種々御看參候て御酒宴也、諸所地

頭衆中なと被成御見參御酒也、此日懸而歳久公御宿へ

右三人同心にて御礼申候、中書公も御座候、御三献如

常、其後湯漬參候て御酒宴也、我々中紙十帖ッ、進入

申候、又中書公へ御礼ニ參候、御留守にて候、是も中

紙進覽候、豊州へ御礼申候、しかと御座候て三献寄合

也、是へも中紙持せ候、此晚薩州へ三人同前ニ御礼申

候、三献過候て種々御看にて御酒宴也、幸若与十郎舞

とも申候、是へも中紙持せ候、深更ニ成候て罷歸候也、

此日諸所地頭衆中礼儀承也、

一二日、忠棟・經平同心にて、圖書頭殿へ御礼申候、御

留守にて候、中紙十帖ッ持せ候、其後本田弥六殿へ

礼申候、留守にて候、それより拙宿へ忠棟・經平御出

にて候、三献參會候也、御兩所より中紙預候、それよ

り本田刑部少輔殿・鎌田刑部左衛門尉殿へ礼申候、留

守にて候、中紙各へもたせ候、村田殿へ忠棟同心にて

御礼申候、三献也、是へも中紙持せ候、伊集院下野守

殿へ三人同前ニ礼申候、三献過候てめし寄合也、是へ

も中紙持せ候、此日薩州・豊州・圖書頭殿など拙宿へ

御礼被成、不有合候、圖書頭殿御酒被下候、薩州中紙

預候、豊州眞羽預候也、

一三日、猿渡越中守殿御酒持せられ礼儀也、三献參會候、

比志嶋宮内少輔殿年内より指合候て、遅礼儀之由承候

て、中紙持せられ礼儀也、三献參あひ候、此日鹿兒嶋

へ年頭御祝言ノ爲、佐多宮内少輔殿寄合中前より頼候

て進上可申之意趣、忠棟於御宿ニ申候、大源坊・佐宮

兩使にて候、佳札相添候、条數、年頭御礼之事、肥後

表御行之事、合志阿蘇働之事、諸勢歸陳之事、隈本御

番之事、忠平御申之事付御歸鞍之事、寄合中替之事、

征久御立時分之事、當春中御出勢之事、此等之条々也、

明日早朝可打立之由也、此日忠棟公へ武庫様御礼被成、

御三献如常、其後御めし參候也、客居忠平様・家久・

拙者・上長州・伊野州・本刑也、主居金吾公・村田殿

・忠棟也、種々御着等參候て、夜深まで御酒宴也、忠平御内衆三郎右衛門尉なと申候て唄申候者へ、忠棟着物なと被遣候也、

一四日、義虎拙宿へ御出候、由者、武庫様今日義虎へ御礼被成、參候て御会尺御憑之由也、三献參あひ候、虎より粥被調御持せ也、并御酒も持せ也、本刑・比宮なと寄合申候処ニ、中書公御礼と候て御出也、然間義虎・拙者同前二門まで罷出申請候、御三献之次、只今之粥家久へも上候、其後五ニ御酌なとにて種々御着參、御酒宴也、中書より中紙被下候、此日隈本へ伊野州・上長州被指上候、意趣、忠棟御宿にて同前ニ申候、条數、合志之実否可被聞取事、國中御行付出勢時分之事、諸軍衆歸陳之事、隈本御番手之事、山北暫格護井方角計策之事、此等之儀也、聽而打立被成候也、比宮へ礼儀申候、留守也、中紙持せ候、愚弟次郎左衛門尉殿へ^(上井秀敏)礼儀申候、御酒持せ候也、しかと被居候て、種々着にて會尺也、宮崎衆中各へも御酒也、此晚於忠棟風呂呂ニ入候也、夜入候て罷歸候、兵庫頭殿より、明日各へ御寄合たるへく候、我々も可參之由承候也、

一五日、忠棟にて、田尻殿へ被遣候柏原左近將監・瀧聞^(有内)

越後守へ意趣申候也、并般等之儀委細被仰付候、矢野出雲守も田尻へ被通候間、乏少なから喉輪一進し候也、此晚於武庫様御寄合也、御座客居薩州・圖書頭殿・中書公・村田殿・拙者・比宮也、主居忠平様・川上^(久門)上州・金吾公・忠棟・本刑・鎌刑也、深更まで御酒宴也、幸若与十郎舞申候、折紙被下候也、

一六日、比志嶋宮内少輔・有馬右衛門尉兩人有馬へ被指遣候、意趣申候、并書狀忠棟・拙者判申候、忠棟宿にて赤星殿寄合也、我々も其座ニ有合也、此日中書公御宿ニ忠平御礼也、御三献過候へハ御めし參候、御座客居武庫様・忠長・忠棟・經平・本刑・宮原筑前守、主居左衛門督殿・中書公・拙者・鎌刑・猿渡越中守也、^(殿)終日御酒宴也、忠平・歳久折着にて御酒御持せ也、二献めニ參候、又寄合中三人食籠着にて御酒持せ候、是も度々ニ參候也、此座中田尻へ被遣候柏原・瀧聞兩人船本へ被下候へ共、舟未相揃由被申候て被參候、然間然々船之儀申調、何として明朝出船肝要之由也、

一七日、中書公より高崎越前守にて、夕爲御歸帆、船元へ御下被成候、尤御暇乞候する旨、忠平御会尺ニ御酌候て、無其儀之由也、忠棟より使にて、此度續衆之

事、遲速次第歸陳候て可然候する狀、備者伊集院助七郎殿從最前續にて候間、歸宅之由候、如何之由也、早々歸被成候て可然之通申候也、金吾公爲御祝礼入御候、中紙被下候、御三献如常、其外着等參候て御酒也、鎌刑被居合候間、御座ニ而御会尺被申候也、宮原筑州父子礼儀也、御酒持せられ候、三献參あひ候、福永藤十郎・同名備後守礼儀也、御酒もたせられ候、今晚忠棟より捻を以、今日之祝言承候也、

一八日、於忠棟宮原筑・猿越・拙者へめし振舞也、其後經平・本刑など寄合候て、諸所番盛など仕候也、此晚忠平公圖書頭殿へ御礼被成、御三献過候て御めし參候、御座躰客居武庫公・忠棟・本刑・宮筑、主居圖書頭殿・拙者・猿越・忠平公御内衆伊東右衛門佐也、忠平より折着にて御酒持せ被成、伊東右衛門佐御酌被仕候、數度御酒參、御酒宴也、其後奥座にて御茶湯也、(忠棟)麟臺御茶たて被成、其後御着參候て又御酒宴也、

一九日、伊地知平三郎殿・平田孫六殿礼儀也、三献參會候、井尻伊賀守御酒持せ候て礼儀也、此日金吾御宿へ忠平公入御候間、參候て御會尺之由候間參候、聽而御めし參候、御座躰主居忠平公・金吾公・拙者也、客居

川上上野守殿・忠棟・村田殿・本刑也、御酒數度參候て御膳下候へハ御茶湯也、川上州御立被成候、各御茶被下候也、御茶過候て種々御雜話共候、其後御粥參候て、又御酒など參候而各御立也、

二十日、於忠棟宿談合也、鎌刑・巢山寺兩使三舟・隈庄へ被遣、条數、年頭祝礼之事、和平実否可被聞取事、對御當方龍造寺隔心不審之事、神載之事、此度境目手切無一途事、此外種々出合被仰遣也、此日義虎へ可參之由候間、我々參也、座躰客居忠棟・拙者・本刑、主居義虎・經平・幸若与十郎也、御酒數度參候也、已後(鎌田政年)寬栖齋御酒持せ到來也、其御酒參候て各立被成也、夫より直ニ經平・拙者同心にて、肝付彈正忠殿宿へ礼申候也、此晚養田平馬允所へ、忠棟・經平・拙者めし被振舞候、各御酒持せ候也、夜入まで会尺にて候、此晚武庫様拙宿へ御礼也、私不可在合候、御太刀・千疋被下候、

一十一日、諸勢從限本當庄へ歸陳也、北郷殿・新納(忠元)・鎌田寬栖、其外各拙宿へ御礼候、銘々ニ御酒預候、三献參會候、伊野州・上長州合子へ被差越、夕歸之由候て、於忠棟ニ意趣承候、無別儀御奉公、可抽忠貞之

由也、諸勢此度先々歸陳之由、目出由也、追而御出勢

之刻、御行彼表可然之由也、此日拙者ハ爰元之様子条々、鹿兒嶋へ御申候へてハにて候間、可參上之由相定

候而、於忠棟各談合也、出合之通条書申候、此朝忠平

公御歸鞍也、此晚從有馬山田新介歸帆候、彼表宜儀共

多々有由候へ共、諸勢打歸之上無是非由也、夜深迄於

忠棟御談合也、夫過候て拙者ハ徳測まで罷下候、此日

本刑・税所新介を以、義虎公へ限本御番之儀相定候、

然者是非以直ニ彼方へ御登肝要之由、頻申候也、雖然

先々歸宅被成御用意被成、近日中御登可有之由也、

一十二日、徳測より出船申候、和泉米之津へ着岸候、驥

而梁瀬兵部左衛門尉當津役人にて候由候て、御酒持せ

被來候、別當処ニ宿仕候、爰元へ越着候、尤自身參を

以當春之御祝言、御簾中様又者又太郎殿へ雖申入候、

鹿兒嶋へ御急用にて急候俣無其儀之由、市來賀州へ佳

札を以申達候、夜中返書到來也、義虎公此夜中從八代

歸棹被成候、拙宿へ御座候すれ共、夜中にて候間無是

非候、明朝御館へ必々可參之由、使者にて承候、又太

郎殿よりも御使者にて、是非以明日御宿所へ可參之由

也、御簾中よりも御同前ニ承候也、是も同難成之御返

事申候也、

一十三日、米津にて手火矢驥ニ出候、青鷺一射候、それ

より驥而出船候処、又太郎殿入御候て、假屋にて御会

尺被成、めし御振舞也、其座客居拙者、次御同名衆、

主居又太郎殿、御次市來加賀守也、種々看參候て御酒

宴也、やかて出船仕候、船元迄又太郎殿御座候て暇乞

被成、それより葦嶋ニ塩懸仕候、假屋ニ憩候、めし振

舞也、夫より阿久根ニ着船候、別當処ニ宿仕候、松下

狩野介着船目出由申候て來候也、今朝又太郎殿より瀬

崎野之駒預候、

一十四日、阿久根より出船候、未刻計市來湊へ着候、別

當上原讚岐守処にて種々会尺共申候、夫より湯治のた

め、湯の村と言処に留候、塚田父子來候て、頻ニ在所

へ宿申候へと申候へ共、湯治の爲とて無其儀候、塚田

湯屋へ御酒持せ候て会尺也、此夜市來衆中長野助十郎

・長谷場方・万徳坊御酒持せ被來候、參會候て夜深迄

酒宴にて候、

一十五日、已刻計湯之村を打立、如鹿兒嶋參上申候也、

申刻計かこしま假屋へ越着候、平田濃州・本田野州へ

使節を以、只今參上申候、御取成頼存候由御案内申候

也、平田新四郎殿御酒持せ御出候、三献參會候也、此
 晚平田新四郎殿へ御酒持せ參候、三献如常、夫過候て
 種々看參候て御酒也、夜深候て罷歸候、

一十六日、早朝本田信州礼儀候、三献參會候、其後殿中
 へ指出候、御虫氣無然々候て、出仕衆無上覽由候間、

平田殿へ八代より之意趣共大方申候て罷歸候、川上三
 川守殿・瀧聞宗運・岩永可丹同心にて礼儀也、三献參

會候、三州より弓一帳被持せ候、可丹薰二貝預候、此

日本田野州へ礼儀申候、御酒もたせ候也、明日 大守
 様御成なされ候とて取乱にて候間、八代よりの意趣、

題目計大方申候て罷歸候、女中も指出候て、持せ之御
 酒寄合也、其後福昌寺へ參候、御留守也、其後白濱殿(重)

父子へ御酒持せ礼儀申候、三原右京亮殿へも礼申候、
 阿多掃部助殿へも同前、此日鹿兒嶋衆中數人、御酒持

せ拙宿へ礼儀也、珠長公へも礼申候、留守也、
 一十七日、不断光院拙宿へ御礼候、三献參會候、馳而出

仕申候、今日も御虫氣然々なく候て、本田親貞へ御光
 儀も被指延候、御祈禱之御談合共也、此日中書公昨日

御着之由候間、御假屋へ參候、白濱周防守・有川長門(伊勢貞末)
 守など被在合候て、殊之外御酒宴也、其後不断光院へ

御礼ニ參候、御酒・茶進入申候、三献御寄合也、長谷
 場殿へ御酒持せ候て礼儀申候、護广所へ正月者例年談
 儀所長日前にて候間、御座候、然者彼へ參候、祈禱ニ

御出候て御留守也、御同宿衆被在合候て会尺也、平田
 殿前守同心仕候、拙者御酒持せ候也、此晚平田美濃守(余位)

殿并平田新四郎殿二人拙宿へ御出候へと申候て、めし
 參會候、新四郎殿御酒御持せ被成、濃州も同前、白濱

次郎左衛門尉殿女中呼申候、是も食籠着にて御酒持せ
 られ候、此座中平田豊前守・本田信州御酒持せられ候

て到來候、同座に候て殊外酒宴也、夜深まで閑談共候
 て、各歸宅被成候、

一十八日、出仕如常、先中書公御指出被成、如常御三献
 參候、中書公御太刀目録進上被成、并折着にて御酒御

進上也、其後拙者懸御目候、旅より直ニ抵候申候とて、
 上下計にて烏帽子へ着不候、御太刀・百足進上候、持

參也、馳而御三献被下候、御盃頂戴仕候後、例年御吉
 書之時被下候とて百足被下候、奏者吉田作州にて候、

やかに歸宿申候、八木越後守御酒持せ被來候間、常住
 之食寄合候、即長谷場織部佑是も御酒持せられ候、各

參會候也、愛宕山長床坊より使僧・書狀預候、禱尔之

儀弥精誠被成由也、帶・扇給候、使僧勝尊坊小刀預候、大源坊案内者也、此日野州へ御成候、御供仕候、先御三献參候、亭主御座ニ被參候、御盃頂戴候て後、太刀・百疋持參也、其後御座如早晚、上座主居ノ方也、御次（善久）桃山玄佐・常栄・拙者・亭主也、客居家久公・賀雲（那雲院）・平田美濃守殿・堀池宗叱也、御酒三返參候へハ、宗叱唄申候、堀池弥次郎・進藤方小次郎など申候彼同心衆罷出候て、御酒宴申候也、數返之已後御湯參候て、其間ニ折肴又ハ臺物などにて御酒參候、其後御點心參候、御座同前、小次郎など大鞆仕候、其外若衆中鞆・大鞆・笛如常、終日御酒宴也、御雜話等難盡筆紙、深更ニ成候て御歸殿被成、各御門まで御供申候也、一十九日、如常出仕申候而、白濱次郎左衛門尉殿を以申上候、御養生時分祇候申候、暫堪忍申候て承合候するを、餘召烈候者共長旅にて候間、御暇申度由申上候、長旅辛勞共申候条、早々御暇被下由也、如何様來月始之比御談合可有候間、其節又々參上之由也、御假屋へ參候、御酒進入申候、御三献御寄合也、鮫島備後守被取成候、其後平田殿へ暇乞ニ參候、同平田九郎左衛門尉殿へ御酒持せ候て礼申候、三献寄合候也、此日伊集

院孫太郎殿へ御礼申候、旧冬祝儀被成、是又敷祢殿御料にて候間、親類中ニ候間、彼是奥・表へ御酒持せ候て參候、女中も指出なされ三献也、其座過歸宿申候、纏而孫太郎殿御酒持せ御出候、其後出船仕候、舟本まで若衆中あまた御酒など持せ被送候、漸向嶋拙者領分白濱へ着船候、此夜中又彼所出船申候て、敷祢別當所へ夜中ニ着候、從敷祢殿も使者也、明日可參之由返事申候、

一廿日、朝十八官と申者処にて會尺也、夫過候て敷祢入道殿へ參候、御酒持せ候、彼方にてめし振舞被成、種々會尺也、其後敷祢三郎五郎殿へ參候、旧冬祝儀共候、奥・表へ御酒持せ候也、三献如常にて候、女中も見參也、其後敷祢殿母儀へ御酒もたせ候て礼儀申候、是にても三献如恒、それより直ニ打立候て、庄内高のむれへ一宿候、桑幡殿百性処にて候、彼代官越合候間、種々會尺也、

一廿一日、高ノ牟礼より早且打立、今度從義虎給候瀬崎野之栗毛早道にて候間、一日ニ宮崎へ着候、一廿二日、早朝より衆中・寺家衆など銘々ニ御酒持せ被來候、人ニより三献又ハ押物などにて御酒參會候也、

一廿三日、是も各已下等まで、或者御酒、或者肴等持來候、一々見參仕歸し候、此夜月待候、讀經など終候てより聽衆など候俟、太平記二三卷讀候、

一廿四日、海江田より諸人來候、寺家來など同前、倉岡地頭吉利山城守殿より、傍輩中にて年甫之祝言承候也、此日桃山殿(忠勳)へ前田勘解由左衛門尉にて、年始之儀又者肥州八城之御番、來月二日彼方へ可被着之由、かこしま寄合中同前之由申候也、吉利總州(忠徳)よりも年頭之儀使者にて承候、此日竹篠山へ礼儀申候、各へ御酒持せ候、

其後金剛寺風呂焼かせ候て入候、住持者かこしまへ被參候て留守にて候、長野談路守・野村大炊兵衛尉・同(井兼成)名右衛門尉同道申候、此日より服藥ニ打立候、一廿五日、満願寺より時振舞也、終日罷居候、拙者も御酒もたせ候也、此日も地下衆又ハ諸所より礼儀衆多候也、

一廿六日、城内之衆中へ礼儀申候、銘々ニ御酒もたせ候也、各三献寄合なされ候、其外種々会尺共也、一廿七日、麓之衆中へ礼儀申候、岩戸へ伊勢之田中主水左衛門尉へ礼申候、めし振舞終日之會尺也、拙者も御酒もたせ候也、

酒もたせ候也、

一廿八日、先日鹿兒嶋へ祇候之時分、御虫氣無然々候つる間、于今心遣千万候条、於拙宿醫王善逝之法十二座・同呪十二万返竹篠衆申請執行候、人衆十三人也、早朝より西時計結願被成候、此日奈古八幡へ吉日にて候間、社參申候、大宮司泉鏡坊にて会尺也、桃山殿より御同名衆にて、先度之返礼承候、金剛寺礼儀ニ登也、三献參會候也、寺田壹岐守を以、吉利殿・本城之地頭川上備州(忠久)へ年始之礼申候也、

一廿九日、昨日之御札・配帙、泉長坊を以鹿兒嶋へ、白濱次郎左衛門尉殿まで進上申候也、此日堀四郎左衛門尉殿を以、都於郡・穂北へ年頭之礼、又ハ無足衆路次之調計を自力にて、逗留中兵糧へ上より御校量被成、肥州表二百日番可被勸之由申候也、此日敷祢越中守・野村大炊兵衛尉など被來候、茶湯にて終日閑談申候也、

一卅日、福永藤六殿年頭礼ニ被來候、御酒持せ也、三献參會申候、米良彈正忠被來候、尾八重衆也、本庄衆中御酒もたせ被來候、堀四郎左衛門尉被歸候て、都於郡・穂北之返事被申候、何も得其心由也、此日風呂呂造作打立候也、

閏正月

一日、看經・讀經等如常、私之三獻過候て、彼衆中各被來候ニ見參申候、何へも御酒寄合候也、衆中へ申出候条々、定而當春何方へも御出勢たるへく候欵、左様候時、堅固ニ御公役閉目之事、皆同弓手火矢之外持具足不可然之事、所々番普請入魂肝要之事、此外条々口能申候、各尤之儀候、委承候、向後御公役等稱可閉目之由也、本田治部少輔殿御酒持せられ候、即參會候、綾之地頭新納縫殿(父時)助殿養性氣に候とて、子息越にて候、御酒持せられ候、衆中二三人同心也、是も銘々御酒預候、各三獻參會候也、此晚本田治部少輔殿・田中主水左衛門尉殿・敷祢越中守殿・鎌田源左衛門尉殿へめし振舞候、夜深まで茶などにて閑談也、

二日、佐土原へ中書公御歸宅之御祝言、并奥へ年頭之御祝言、敷祢越中守殿を以申候、八代光嚴寺御酒持せ被來也、

三日、於毘沙門寶前、法花讀誦申候、大乘坊・野村大炊兵衛尉など語に被來候間、將基などにて茶湯にて物語共候也、昨日佐土原へ申候返事、敷越歸候て承候、此日木花寺被來候間、庭ニ樹なと植させ、石なとつかハせ申候也、

四日、從都於郡鎌田雲州(致志)自身御座候すれ共、虫氣然々なく候之条、先々同名衆にて年始之礼承由也、拙者も養性氣ニ候て不出合候、人して返事申候、御酒振舞候也、此日木花寺へ被歸候、此日雨中徒然居候処、堀四郎左衛門尉・勝目但馬丞被來候間、御酒參會候て雜談共申候、庭前ニ木なとあまた栽させ候て見申候、

五日、伊勢之田中主水佐來候間、御酒にて物語共申候、又樹なと種々作候て慰候、此晚鎌田源左衛門尉殿二人・上井(兼成)右衛門尉殿二人へ食寄合候也、

六日、鎌源同道にて海江田へ越候、先木花寺へ參候て支度仕候、彼寺にてめし振舞也、種々着にて御酒數返參候、本庄萬福寺於其座御酒預候、其後諏方へ社參仕候、それより伊勢へ參宮申候、彼大宮司処にて會尺仕候也、其座過候て、圓福寺へ年頭之礼申候、御酒もたせ候也、三獻寄合れ候也、彼座にて薄暮ニ成行へ、驧(上井兼成)而紫波州崎へ參候、泰安御館にて御会尺也、深更まで酒宴也、

七日、中城へ參候、三獻御寄合也、晚氣持參之御酒等者御寄合可有之由也、此日折筆迫之狩仕候也、猪二取候、狩場へ恭安齋より御使也、趣者、從曾井高野圖書

助を以承候、かこ嶋へ就私用之儀、使被遣候、其歸便
 ニ忠棟より書狀來候、被持せ之由也、忠棟書狀・白濱
(重忠)
 次郎左衛門尉殿書狀兩通來候、即披見候、忠棟よりハ、
 來十一二日之間より御談合たるへく候、兩院諸地頭同
 心にて、早々參上可申之由也、將亦太守様御虫氣于今
 然々無御平噓候、然者御祈禱等談合有度由也、白次よ
 りハ、御虫氣無然々候、就夫鷹・鶴御受用肝要之由、
 諸醫被申候、定而拙者所持候らん、進上可然之由也、
 此晚中城にてめし御振舞也、種々肴にて終夜之酒宴也、
 此夜ハ中城へ一宿申候、

一八日、御崎之觀世音へ參候、祈念過候へハ寺主被出合、
 可參之由候間參候、めし振舞、種々會尺也、恭安齋・
 鎌源同心申候也、此日如宮崎罷歸候、天氣惡暮候間、
 わち川原齋藤讚岐拯処へ留候、種々會尺也、鎌源同心
 也、

一九日、朝食讚岐拯振舞候、色々會尺也、夫過候て沙汰
 寺へ御礼申候、三献寄合也、拙者も御酒もたせ候也、
 それより又住吉大宮司大乘坊へ礼申候、先三献也、其
 後茶湯にて候、天目・壺など見せられ候而、菟角雜談
 候処ニ、又めし振舞也、種々肴にて終日酒宴也、到薄

暮城へ歸着候也、此日諸所へ使にて、鹿兒嶋へ參上有
 へき由申渡候、

一十日、米良談路守・俣江加賀守、其外山内衆四五人、
 年頭礼とて被來候、御酒・猪・鹿などもたせられ候、
 各へ御酒寄合也、此日大乘坊昨日之礼として御酒持せ
 被來候、終日茶湯にて、碁・將碁など候、種々閑談也、
 此日野村舟綱齋被來候也、

一十一日、沙汰寺一昨日參候礼とて、酒肴持せ被來候、
 衆中四五人被在合候て、終日御酒也、御茶湯などにて
 雑話也、

一十二日、藥師如來へ讀經等申候、此日鎌田源左衛門尉
 殿頼候て、鹿兒嶋へ參せ候、趣者、就御談合儀諸地頭
 可被參之由、即兩院へ申渡候、拙者參上可申候処、痔
 病無然々候、養生申、五日跡より祇候可申候、先々御
 用等候ハ、源左衛門尉へ可被仰聞由申候也、此外四
 五ヶ条御用之儀等申上候也、此日ハ樹なとさせ候て、
 在所へ然と罷居候也、

一十三日、曾井より岩下名字之衆中比志嶋殿(兼善)へ仕違られ、
 舊冬已來本坊頼存被居候間、彼人被召直候て可目出之
 由、鎌田筑後守殿にて申候也、此朝かこ嶋古後殿被越

候間、めし振舞候、柏原伊賀守殿同前、鎌筑廳而被歸候、岩下方之事、拙者異見申候条、可被召直之由也、

自然已後へいつかたへも召移られへき由也、此日金剛寺より風呂興行候、可參之由候間其分に候、先點心にて候、其時持參之御酒御まいり候也、それより風呂ニ

入候、過候て又客殿にて会尺也、めし振舞なされ候、夜深候て罷歸候、鎌田筑後守殿・勝目但馬守殿同心申候、此日善哉坊之弟子大貳公被來候、御酒もたせ也、

一十四日、從高城山田新介殿(有息)、指宿清六左衛門尉殿にて承候、先日使者遣候礼儀也、近日中鹿兒嶋へ可被參之由也、此日関右京亮殿へ礼申候、御酒もたせ候也、めし振舞にて候、終日酒宴也、

一十五日、看經・讀經等如常、衆中各被來候、參會申候、普請等之儀談合申候也、

一十六日、永吉上谷之百姓來候、見參申候、并南之蘭之百姓も來候、本坊より、昨日曾井へ岩下方被召烈候、

比志嶋殿無異儀見參候由承候也、此日池田志广拯呼候間、帆村へ下候、種々会尺也、其夜へ彼処へ留候、誹諧又ハ茶湯など也、衆中もあまた同心申候也、

一十七日、瀬戸山大藏左衛門尉会尺仕候、終日酒宴也、

子ニ名付候とて、祝言ニ脇刀拙者へくれ候、此晚罷歸候也、

一十八日、看經・讀經等如常、觀世音へ堂參候、從財部光音寺被來候、茶・木綿二預候、此日從福嶋衆中一兩人御酒持せ被來候、各參会仕候也、從藏岡楳原方を以

承候、山城守殿かこしまより被仰越候、大守様御虫(吉利久金)氣未然之由、若く我く不存や候らんとて註進也、此日鎌田源左衛門尉從鹿兒嶋去十六日之日付書狀到來候、是も大守様御虫氣未御快氣候、乗物などにも

參上申候て可然之由、御寄合中承由也、此日ハ風呂建させ候とて、終日普請させ候也、此晚かこしまより泉長坊被歸候、御虫氣之分同前、

一十九日、財部比喜之大宮司町田一公房被來候、御酒持せられ候、參會申候也、大守様御虫氣御祈禱之儀、本坊満願寺へ長野談路守・関右京亮にて談合させ候也、

いづれも御祈念可被仕之由也、拙者も二月彼岸、法花嶽へ參籠之立願申候也、

一廿日、寺社家共ニ各々ニ御祈禱入魂可被申之由也、此日穗北之衆中一兩人御酒持せ被來候也、寄合候て給候、

一廿一日、柏田と城との間の道作せ候、新路にて候間、

罷下見候て作せ候、其刻佐土原より、弓削名字之人御酒持せ來候也、金剛寺御祈禱として大般若轉讀被成候由候て、札持せなされ候、

一廿二日、爲御祈禱於滿願寺、衆中校量を以大般若也、

竹篠於本坊百講座也、苾生野於八幡宮、社家衆千度之稜也、於奈古八幡宮も千度之稜也、此等之御配帙堀四郎左衛門尉を以、鹿兒嶋へ進上仕候也、并拙者不參之儀、養性最中候条、難成之由申述候也、此日本坊酒肴被持せ御出也、衆中なと參合、終日御酒也、

一廿三日、西俣七郎左衛門尉當年無沙汰申候とて、御酒持せ被來候、頃かこしまへ祗候申、去廿日彼方打立被越候由也、然者、大守様御虫氣之様子相尋候、頃御平噓之由也、かこ嶋へハ當時爲御談合、諸所地頭被着揃候と見得候由物語也、此日ハ晚氣月待にて候間、終日法花讀誦仕候也、此夜茶湯・誹諧・雜談などにて月を待取候也、

一廿四日、讀經・念佛迄候、此晚平田孫六殿御酒持せ來入候、めし振舞、会尺申候也、此日御虫氣御平噓之由、鎌源左かこしまより書狀にて被申越候、

一廿五日、天神へ讀經等仕候、此日吉利下總守殿入御候、

夕食參會候、御酒御持せ也、愚息へ始而見參被成候とて、鳥目百疋持せられ候也、深更まで酒宴にて候、此日法花嶽住持御酒持せ入御候、拙者參籠企、目出由也、

一廿六日、吉利殿内城へ頻ニ御登候へと申候つれとも、

紫波洲崎へ急被成とて、小宿より直ニ打立被成也、從嵐田蓮堯坊御酒持せ被來候、

一廿七日、柏田と城之間之道作之普請させ候也、此関右京亮にて、中書公へ久御無沙汰申候通申入候、并佐土原へ目醫者當時逗留之由承及候、此方御遣可有之由申候也、

一廿八日、御崎寺講讀ニ御座候、我々看經・讀經如常、

此日筑後田尻殿へ去正月被遣候柏原左近將監被罷歸候也、彼籠城之躰、又直ニ鹿兒嶋へ被參候、彼方御談合之様子、寄合中より承段共、細く物語也、田尻殿より書狀・段子一端預候、彼籠城之躰敵陳九着候由也、雖

然無人數、其上無堅様子にて候間、籠城少も不痛由也、然間御加勢之事者い、かにも御賢慮を以、初秋之時分可然之由田尻殿より被申候、先く津口ニ警固舟多艘罷居候間、是を急く兵船を以、可被追破御才覺肝要之由也、

此晚馬嶋宗壽軒と申候目醫者、從佐土原被來候、めし
振舞、見參申候、牛黃圓・眞珠散預候、座客居宗壽、
次長野談路守、主居拙者・柏原將監也、

一廿九日、宗壽茶湯者之由候条、道具等見せ申候、此朝
めし振舞候、敷祢越中守・鎌田源左衛門尉座にて候、

此日終日茶湯也、此晚忠棟より書狀到來候、御虫氣御
平噓候由也、頃拙者祗候之事ハ指延候て可然之承候也、
(由脱カ)

二月

一朔日、衆中各被來候、如常見參申候、此日も宗壽へ茶
湯させ候て慰候、并道具等見せ候也、種々曲灰共なら
し候て見せられ候、夕食參會之中ニ、紫波洲崎より蛇
持來候間、即着ニ出候、宗壽賞翫候て雜談之様ニ被申
懸候、かひも有浦へ住よし伊勢嶋をたのめてきたる海
士のこの春、と被申候、然者難黙止候て拙者忽返し、
たのめつゝきますかひやあらさらむ春の海邊ニちか
き住家を、と申候、それより種々戲言にて、御酒數返
參候也、

一二日、鎌田源左衛門尉殿館にて、宗壽・拙者へ朝食振
舞也、其後茶湯又ハ道具等見せられ候也、此日恭安齋、
拙者氣分頃然々なき由被聞せ候て、見廻の爲入御候也、

夕食之時宗壽見參候而御酒也、

一三日、毘沙門看經如恒、(上并黨)恭安へ朝食參會候、柏原左近
將監殿・宗壽座ニ被出候、種々肴共參候て御酒數度也、

恭安此日歸鞍也、明日法花嶽へ拙者籠候する、同心候
するとて、宗壽も此日佐土原のことく歸候也、此日か
こしまへ參せ候堀四郎左衛門尉殿歸候也、御虫氣御平
噓之由也、宮崎衆中寺社家中御祈禱被仕、御札・配帙
進上候御札也、同田尻殿爲御見續之兵船、近日中被指
登候する御談合相定候、然者兵船并上乘衆・手火矢衆
之儀、兩院之諸所へ可申渡由也、此等之儀承候て已後、
私之風呂ニ入候也、

一四日、彼岸入候、看經等如恒、午刻計法花嶽へ參候、
路次すから駕にて候つる間、法花讀經仕候、參籠之志
候て同心之衆中、鎌源左衛門尉・関右京亮・野村大炊
兵衛尉・弓削甲斐守・江田源七兵衛尉・上井右衛門尉
同道仕候也、酉刻計法花嶽へ參着候、先堂參仕候、百
疋參錢持せ候也、福昌寺も御參籠被成候、於宝前懸御
目候也、(善久)桃山玄佐も御參籠也、此日鎌田筑前守殿鹿兒
嶋へ參上被申候を、寄合中使として此方へ被遣候也、
趣者、爲 御名代此方へ參籠大儀之由承候也、并田尻

殿へ之兵船之儀等、無油断可申調之由也、此日諸外城へ兵船又へ上乘之儀申渡候也、鎌筑御酒預候也、

一五日、看經如恒、先堂參仕候、寺にて粥振舞也、玄佐

・拙者、其外へ僧達也、此日代賢和尚御影爲案置、塔頭造立候、願主西侯七郎左衛門尉也、然者徒移被成候(移座力)

祝言とて、玄佐・拙者、其外衆僧ニ於彼塔頭時振舞也、

代賢和尚壽影開眼頌唱被成候、安床這箇木偶人、有相

身中無相身、梵刹新興洞曹窟、瑠璃燈影續光辰、即書

せられ候て、玄佐・吾々ニ見せなされ候、玄佐聽而、法

の花開けし春の化へ幾世も人の心なる辰、如此よみな

され候、其座ニ有合候まゝ難黙止候て、拙者も、辰し

もあれ光普き法の場にしつ心有花の影かな、と申候、

此座に玄龍首座と申被有合候、然者被奉塵尊傷句候、

鳳閣龍樓一主人、雨曇濁世現金身、陞堂寶偈徹三統、

野鳥高歌花舞辰、如此共候て、又御酒參候て已後、各

退出仕候也、此日も宮崎・紫波洲崎より各へ御酒持せ

被來候、不知數候間、銘々ニ難註候也、此夜中書様(家久)よ

り御使を以、參籠申之由蒙仰候、并京酒着船候とて送

給候也、

一六日、早朝堂參候、看經等如恒、從諸方酒肴持せ來候

衆不識數候条、銘々ニ無書載候、宮崎衆中御酒持せ被來候、爰元衆僧拙宿へ呼候て、終日酒宴也、

一七日、堂參・看經如恒、西侯七郎左衛門尉塔頭祝とて

福昌寺へ御時上候、玄佐・我々も御座ニ罷居候、種々

肴共參候て御酒也、常澤と云座頭なと參候て、平家共

申候、此日吉利下總守殿御子息御酒持せられ御出候、(忠徳)

并新納縫殿助殿子息又へ平田孫六殿、いづれも御酒持せられ候也、終日之酒宴也、衆中たちも銘々ニ御

酒持せられ候也、此夜、中甫藏主を以代賢和尚へ申上

候、趣者、若年より玄艶和尚へ朝夕遂參扣、道号等頂

戴申置候、能仕合御參籠之次ニ遂再參、道号申請度之

由申候也、

一八日、堂參・看經等如恒、夜前代賢へ申上候御返事承

候、當者道号望ニ存候哉、玄艶之事、御門徒中大老之

儀御存知之前候、然間不及再參道号可被下之由承候也、

然間拙者多年辛勞共申候通、委申上候、殊勝之由承候

也、此朝食參會候、其座代賢和尚・玄佐・法花嶽寺當

住圖書記・玄龍首座・中甫藏主・宗壽・常澤・拙者・

鎌源左衛門尉也、此座中京酒なと到來候て、種々御雜

談にて數篇參候也、此晚長野下總守御酒持せ被來候、

長持寺其外諸所より寺家衆中御酒持せ被來候也、此日代賢和尚御手渡ニ、庵主号書付物被下候、拜領申候也、一九日、堂參・看經等如常、吉利殿内衆御酒持せ被來候、終日之酒宴也、此外諸方よりも音信多々也、

一十日、堂參・看經如常、玄佐より竹下珠翠を以承候、此參籠中和歌百首つらねなされ候、然者宝前に奉納候之處、代賢和尚御覽候て、被賦尊偈、同玄龍首座被贖尊韻、兩首見せなされ、拙者も一首可申之由承候、若輩不似合由再三申候へ共、頻ニ可申之由也、福昌寺被遊候趣、桃山安藝入道玄佐居士、爲于賢(兼心)太守當病平愈而時正七日參籠、以百首和歌奉納仏前、山僧賜之奉祈念、次以一偈祝齋者耶、照鑑、拙魯拜、百首和歌絶妙詞、金書銀字轉清奇、醫王善逝哀憐受、願意圓成在此時、玄龍首座之詩、謹奉汚福昌大禪仏尊詩之嚴韻尾、呈玄佐居士之坐右下云、玄龍拜、金藤準擬詠歌詞、禱尔文々也太奇、松樹春回千歲綠、瑠璃殿上雨晴時、拙者も餘之事ニ、欽奉賡、玄佐老公詠百首歌、被猷醫王善逝宝前、福昌主盟翁一覽之而感謝之餘、賦尊偈被祝齋君臣之徳、予在傍拜見之、任難黙止、和尚之高韻末云尔、相應兩翁和漢詞、文々連玉句皆奇、或云花鳥

或風月、滿月青山亦得時、如此申候、又玄佐へ歌一首進入候、君を祈ることの葉種も百千鳥囀る春の幾世ならまし、此等珠翠を以、玄佐へ進之候、戀而詩・歌共仏前ニ被籠置、寔々かたはらいたき事共也、此日鹿兒嶋へ野村丹後守にて、今日通參籠之御願成就申候由申上候也、此日紙屋地頭稻富新介殿御酒持せ被來候也、本庄地頭よりも當病之由候て、使者御酒持せ被來候也、一十一日、早朝法花嶽より下向仕候、宗壽參籠中召置候て、此朝佐土原のことく歸し候、此日入野へ御礼ニ參し候、吉利殿へ御留守にて候、御子息殊之外御会尺也、未刻計彼方罷立候、本庄万福寺中途ニ被出候、御茶共給候、伊勢之田中主水佐本庄まで迎ニ來候而、柏田河原ニ芝居構られ候て、殊之外会尺也、それ過候て城ニ歸着候、祝言等如恒、一十二日、法花嶽より下向申候とて、衆中・寺家衆など被來候、一十三日、是も同前、普請終日させ候て見申候、此日都於郡總昌院御酒持せ御座候、參会申候也、肝付雅樂助殿是も御酒持せ被來候也、藏倉(長)地頭御酒持せ禮儀被成、衆中も同心也、

一十四日、福昌寺御礼とて御光儀候、御宿滿願寺へ申付候也、鑾而内城へ申請候、先御礼茶也、其後御めし參候、御座主居代賢様・玄龍首座・拙者・柏原左近將監、客居御同宿衆三人、次本田治部少輔・鎌田源左衛門尉也、御時過候て、奥座にて内へ懸御目候、押着にて御酒也、其後茶湯之座にて點心參候て、御酒數篇參候、御茶勿輪候、此座中、田中主水佐御酒持來候間參候、明日涅槃會法花獄にてなされ候するとて御急被成、御歸興也、鎌田源左衛門尉中途にて追酒共申候也、此日も終日茶湯などにて雑談共申候也、此晚報恩寺我々へ振舞也、

一十五日、看經等如常、衆中各礼儀候、見參申候、田尻へ之兵船・上乘等之儀、談合共申候也、反錢・反米之事觸させ候也、此晚鎌田源左衛門尉殿へ我々寄合也、其座過候て、愛宕山秀存坊御座候間、參會申候、先めし振舞候、其後點心參候て、御茶などにて立被成、御礼守送給候、并帶二筋・扇子一本預候、是へいつれも秀存坊より也、

一十六日、秀存坊より當國各へ礼儀被成へく候、然者曳付一通憑由候俣、認候て遣候、此日佐土原へ參候する

由承候間、送等申付候、拙者見參申候すれ共、今朝隙入事候とて使者進之候、食も宿元報恩寺へ持せ候也、使僧へ鳥目百疋進之候、此朝柏原左近將監殿我々へ振舞也、終日酒宴にて候、御茶湯なども候て雑話共也、此晚田村吉右衛門尉頃麓へ拙者罷下候へ、御酒可振舞存候つれ共、當時養性時分無其儀候とて、種々看・御酒持參申候也、

一十七日、拙宿風呂焼せ候、終日慰候、此晚風呂ニ被入候衆へめし振舞候、酒宴也、

一十八日、觀音へ讀經等如常、此日狩のため加江田へ越候、此夜ハ常瑠瑠寺(マ)へ留候、見物ノ爲娘召烈候、鎌源同心申候、爰かしこより酒肴など預候、此朝野村丹後守鹿兒嶋より歸候也、

一十九日、こゝの比良へ着候、鹿藏様子共見候、此日も恭安様・中城、其外家景中之者共、御酒なとくれ候、

一廿日、狩させ候、宮崎衆中各被立候、清武よりも衆中五六人被立候、都合狩人七百餘にて候、猪・鹿九まろひ候、拙者も一射候、諸所より酒肴等到來候、鹿倉一狩候て、御酒にて日を暮し候、此夜もこゝのひらへ留候、

一廿一日、加江田内山ノ鹿倉にて、犬山仕候、猪・鹿二

取候、此晚紫波洲崎へ參候、恭安様殊之外御会尺也、

衆中も四五人同心申候也、拙者も御酒共持せ申候也、

一廿二日、此朝も恭安様御会尺也、此日宮崎のことく歸

宅仕候、

一廿三日、歸宅申候とて衆中各被來候、此度狩之しゝな

と進し候也、此日從紫波州崎加治木伊与介・兒玉隠岐

丞來候、夜前之雨風に、折宇迫湊ニ寄船一艘有由申來

候、一艘ハ種子嶋舟、一艘ハ赤江舟之由申來候、荷物

等一種も無之由申候、然者地下舟早々出し候て菟角仕

たる者共候之由申候間、不審之者を搦候て、能々糺明

候て可然之通申付候也、

一廿四日、地藏へ讀經等如常、此日善哉坊去年長曾我部

殿(元親)又ハ中國へ御座候 公方様・毛利殿へ使僧ニ被指登

候、直ニかこ嶋へ被參、昨日歸宅之由候て被來候、長

曾我部殿より拙者返書到來也、上使として布施殿被指

下之由物語也、中國より秋月(種実)・龍造寺之家中色々やつ

れ候て被通之由也、此日ハ終日拙宿風呂焼せ慰候、又

夜前夢想ニ、前之肝付彈正忠殿連歌興行候とて、拙者

ニ發句可仕之由候間、不似合なから仕候と、さたかに

見候句、得る人もあひにあひぬや花の時、如此見候、

前之霜臺舊友にて、種々申承事共候つる間、如此夢な

とにも見候哉と存計候、

一廿五日、天神ニ讀經等如常、池江志广介永代買被仕候、

其坪付認遣候、御酒など被持來候間、各參會候、又野

村丹州御酒くれられ候、雨中徒然候間、衆中五六人參

會、終日雜談にて慰候、△

一廿六日、鹿兒嶋へ參上之爲打立候、田野へ着候、上之

原之長藏房へ宿仕候、此晚ねらひニ登候へ共、遅候て

鹿ニ不見合候、此夜大寺大煩助殿御酒持せ御座候、衆

中五六人同心也、是も酒肴持せられ候、深更ニ及雜談

共候て歸也、明日路邊ニ而犬山狩させられへき有増共

也、

一廿七日、天氣惡候て、山などにも不登候、加江田より

之人衆相待罷居候、それより日下雨弥降候間、滞留候、

長福寺之住持御茶共被持御出にて、雜談共候、先日法

花嶽にて福昌寺被作せ候頌など物語申候、書付可進之

由承候間、被歸せ候て已後、書付寺へ持せ候、其次ニ

狂言ニ拙者申候、霞彩濛々更不晴、逢人先問是途程、

春朝帶雨晚來急、客舍酒無樽自横、連々左礼言共申馴

人にて候間、如此戲候而徒然之慰候、此日從鹿兒嶋、去廿四日之書狀到來候、趣者、先日 上使御下向(家)ハ中書公(家)へ爲御礼、此境御通可有候、中途御宿、又ハ調儀等可申付之由也、即大寺大炊助殿へ此由申付候、

一廿八日、早朝田野之宿を打立候、山之口と嶋戸之間にて肝付彈正忠殿宮崎迄音信之爲使節被遣候ニ行逢候、

意趣承候、酒肴共種々送預候間、聽而於中途賞翫申候、然時分 上使路次通にて候、拙者ハ路邊ニ傍ニ居候(兼寛)の間、不參會候、正覚坊案内者ニ而候、拙者と被聞候

て被來候間、只今加治木より之御酒寄合候也、鹿兒嶋寄合中より書狀到來候、其趣者、上使御通之儀也、又田尻殿へ兵船之儀也、柏原左近將監又々申付、此度兵船ニ乗可申之由也、委披見候て、正覚坊へ彼書狀持せ候て、宮崎へ被仰理候へと申候也、上使之事ハ拙者留守にて候間、田野より曾井へ被送候て可然之由、

堅申付候也、それより此日かうのむれへ着候、彼処ニ留候、

一廿九日、早朝打立候て、敷祢へ着候、休世齋へ被召寄、殊之外御会尺也、拙者も京酒持せ候間、珍酒とて殊之外賞翫也、(敷祢領元)三郎五郎殿も同前ニ參會候、座過候へハ町

へ下候て、順風見合候て、夜入時分白濱まで渡海候、敷祢町へ居候内ニ、十八官など申者、御酒共申來候て、種々會尺共仕候也、

參月

一朔日、讀經・念仏等如常、於白濱いさり共させ候て見申候、慰候、此日かこしまへ着船候、聽而明朝可罷出之由、鎌田刑部左衛門尉殿まで申入候、此晚平田新四郎殿へ參候、(平田光宗)濃州も新四郎殿も、八代御番ニ立せられ候て御留守也、

二日、殿中へ罷出候、未御虫氣然々なく候て、御指出無之候、京樽一荷・鴈一進上申候、納戸衆を以上候、此日書狀以、(鎌弘)忠平様御遲參候、如何候、(種史)秋月より被申子細ニ付而、御談合共候、早々御參上可有之由也、連判申候、(伊集院)此日忠棟・(村田)經平・(本田)親貞へ御礼申候也、忠棟にてハ釜見せさせられ候、

一三日、節日にて候間、出仕衆如恒例、(鎌久)太守様御虫氣無然々候条、出仕衆無 上覽候、然間寄合中計御對面処にて餅・御酒給候、御出座之時のことし、其後寄合中前にて、仕候衆如早晚餅拜領候、此日互ニ各へ礼儀共申候也、鎌刑へ礼ニ參し候処、暫罷居候へと候て会

尺也、宗雪・道正屋宗与など座ニ候、終日酒宴也、茶

湯之具なと我々へ見せさせられ候、又吉田美作守殿へ

礼儀申候、是も釜、堀池可然之由申候とて見せなされ

候、并茶湯之座造作なと見せさせられ候、此晚平田殿

ニ而めし振舞也、其夜ハ新四郎殿御かたへ留候、

一四日、出仕如常、上様御指出被成候間、懸 御目候、

此日忠棟拙宿へ入御候へと申候而めし參會候、座躰客

居忠棟・本田刑部少輔・鎌刑、主居河上左近將監殿・

經平・拙者(比志島内少輔)也、御酒數篇參候て、御湯

參候て御茶也、其間ニ諸所へ之文なと認させられ候、

其後點心にて御酒等參候て、各被歸せ、此晚進藤筑後(長也)

守殿御旅宿へ參候、食籠肴にて京樽一荷持參候、躰而

其御酒御寄合也、肴共手つから度く給候、拙者も御

酌申、又ハ肴なと進之候て、種々御閑談にて御酒宴也、

左候て御暇申候時分、當近衛殿様より御書、拙者へ拜

領させられ候、いかさま拙宿へ御持來可有之由也、然

間左候ハ、此方にて頂戴可仕之由申候、類ニ拙宿へ御

持來可有之由候つれ共、兩度申候間、さてハと候て御

意趣被仰、御書御渡被成候、并五明三本拜領候、左候

て罷歸候也、此日も若衆中被來候、雜談共にて御酒參

會候也、

一五日、如常出仕申候、御指出無之候、白濱次郎左衛門

尉殿を以被仰出候、當所へ南蠻僧假屋を被遣候て召置

候、伯圍様(實心)已來彼宗御いましめ之儀候間、談合を以、

當所へ被召置候へぬ様にとの上意也、各尤之由也、出

仕歸ニ、御代官有川長門守、本田野州・拙者被呼候間、

彼方へ參し候、めし振舞也、主居野州・三原下総守・

亭主也、客居拙者・新納右衛門佐・野村刑部少輔・川

崎肥後守也、御酒數篇參候て御湯也、其後内方被指出

候、それより各罷歸候也、此日申刻計、忠棟より御茶

一服被下候する由候促參候、御茶湯座へ堀池宗叱案内

者被申候間、打烈候てはいり候、其衆上拙者、次宗叱、

次東雪・堀池弥次郎也、先々各風呂釜之爲躰一覽申候、

其後亭主指出被成、食參候而御酒三返也、配膳者忠棟

御子息増喜殿只一人にてめされ候、御湯參候て菓子參

候也、其後各罷立、暫遠見共申候て、手流水仕候也、

其後又座ニ各參候、宗叱御茶立候也、天目臺なと秘藏

とて被出候間、各別而見申候、褒美共也、其後種々閑

談共過候て、うす茶にて候、又宗叱被立候、炭なども

宗叱被置候、其後御汁參候て御酒也、二三返御肴共參

候て、御酒過候へハ、各罷歸候也、此夜も若衆中被來候て、深更まで雑話也、

一六日、如常出仕申候也、根占殿代祝ニ參上也、折十合

・樽十荷進上也、御太刀・馬・弓・征矢・鎧・甲・青銅千疋進上也、御三献御寄合也、田尻殿(鑑傳)へ之御返書等出候也、出仕歸ニ、本田刑部少輔殿へ寄合中被召寄候也、座躰客居忠棟・拙者・親貞・比志嶋宮内少輔也、

主居川上左近將監殿・經平・亭主也、御酒數篇過候て、

御湯參候也、其後茶湯也、其後種々肴にて御酒參候、

亭主酌にて各御立被成候、此日進藤筑後守殿拙宿へ御

出被成、五明五本預候、種々肴にて御酒數篇參候、御

閑談にて御歸也、比宮被在合、御座ニ被出、御会尺共

被申候也、此晚根占殿礼儀候、三献參會候、太刀一腰

・二百疋預候也、

一七日、如常出仕申候、肥州從八城雜説到來候、平田濃

州・町田羽州(久徳)・典厩様役人衆書狀到來也、地下歴々野

心之企有由也、此日新納右衛門佐へ、忠棟・親貞・拙

者可參之由也、三人同前ニ御酒持せ候也、座躰客居忠

棟・宗叱・比宮・堀池弥次郎・進藤又七・一王大夫、

主居親貞・拙者・三原下総守・本刑・伊地知越中守・

亭主也、御酒數篇參候て御湯也、其後又肴など參候て

御酒也、亭主酌之時、忠棟・親貞・拙者御酒給候時、

宗叱父子にて唄申候也、其後各罷歸候也、此日根占殿

寄合中請用候間、拙者も可參之段承候、尤可參候へと

も、當時養性最中に候間、今日より服藥仕候、然者禁

物等多く候間、座敷之爲躰憚多かるへく候条、可被指

置之由再三申候也、此晚平田殿女中・新四郎殿女中同

心にて、拙宿へ御出也、食籠肴にて御酒預候、夕めし

參會申候、此日田尻殿返事申候、塩硝三斤進之候也、

一八日、出仕如常、兵庫頭(義弘)今日御參上之由必定候間、

御打迎佐多宮内少輔(忠地)へ被仰付候、此日川上左近將監殿

へ被召寄せ候、座躰客居忠棟・拙者・親貞・比宮也、

主居經平・本田紀州(重徳)・亭主・本刑也、御酒數篇參候て、

各罷歸候也、此日南蠻僧當所へ假屋役所給候て居候、

世間之物沙汰惡候、殊更今度就御虫氣、ケ様之宗之者

當所へ罷居候て、諸神御内證ニ不合由告なと候とて、

先々有馬なとのことく罷立候へと、一兩日懸曳共被成、

被立候也、此日鎌刑・村田雅樂助終日被來候て、閑談

共也、

一九日、如常出仕申候、恒例之御誕生講也、安養院被成

候也、此日堀池宗叱宿へ礼申候、吉田作州同心申候也、
父子共ニ門まで出合候也、作州にて、先刻於忠棟御座
楚忽ニ參會候、其上手まへなと存分見申候事、狼藉之
由申述候、段子一端持せ候也、宗叱者出合、躡而茶湯
座へ行、わかり候処まで案内者候て、それより吉田殿
御案者候へと云候て、内へ入候也、作州案内者にて、
くより戸をそとならされ候へへ、弥次郎内より明候、
其時拙者さきにくより戸を入候、そこに足もなき木履
三足候つる間、一足はき候て、やかて四帖半之座へは
いり候、作州も其分に候、宗叱さし出、礼儀申候て、
炭置候て、又内へ引こミ候、其時風呂呂釜など之躡見申
候、それより宗叱盃を持て出候て、座ニ置候、やかて
看出し候、盃一二返廻候へへ、又宗叱炭を置候、其時
我々立候て手洗候て、靜ニ遠見申候、炭置終候と見
え候時、又座ニはいり候、其時如常道具等取出し、宗
叱茶立候、時宜仕候て、拙者たへ候、其次作州のミ被
成候、それより宗叱たへ納候て、とり納め候、其後か
へり候也、此日不断光院へ參候、

二十日、出仕如常、近日中坊津一乘院御參被成、於大興
寺光明眞言之護廣可被燒之由定候、左様之調儀等諸役

人へ被仰付候、此日本刑より、上使布施殿拙宿へ御礼
候する由被仰候段承候、然間先々拙者御礼申候へてハ
と存候て、本刑同心にて布施殿御宿へ參候、食籠着に
て樽一荷持せ候、躡而其御酒御寄合也、御酒數席參候
也、拙者罷歸候へへ、躡而上使拙宿へ御礼也、扇子十
本預候、門まで出合候て、内へ頻ニ御入可有之由申候
へ共、只今拙者持參ニ沈醉被成候条、無御了簡之由候
間、不及是非候、此日阿多掃部助(金屋)・新納右衛門兵衛尉
・絮阿・珎阿被來候て閑談也、洗食振舞候て、御酒數
返也、種々戲言共也、此日不断光院、此外あまた御同
心にて入御候て、終日御物語也、此晚兵庫頭殿御着也、
御宿へ參候、御めし時分と見え候間、御用ハ候へぬ候、
御内衆へ申置罷歸候、其後武庫より御使にて巳前參候、
御指出被成候すると候つる処ニ、急々罷歸候間無御見
參候、御所存之外之由被仰述也、此夜肝付彈正忠殿(兼寛)礼
被成候、御酒預候也、

二十一日、出仕如常、兵庫頭殿御指出候也、折着にて御
酒御持參也、御虫氣無然々候間、豊州御參候を御同座
にて御三献可然之由候て、兵庫頭殿、次朝久御參候也、
太刀目録御進上也、忠棟・拙者兩人にて取成申候、御

三献配膳者町田五郎太郎・阿多掃部助也、武庫様御持參御酌御申候也、(忠輝) 鑾而 太守様武庫へ御酌被成、并豊州へも御酌候、それより武庫御酌候て、忠棟・拙者御酒被下候、豊州御持參も參候、御酌御申也、それより祇候衆十人許御酒被下られ候也、(初) 此日御談合始也、鎌刑御使にて条數定候、一秋月被申事、一八城御繰替之事、一田尻殿へ兵船之事、一大矢野殿進退之事、(備考) 一出勢遅延之事也、此等之条々武庫へ使にて先々御尋被成、秋月被申事者、龍造寺と(後書) 此方御和平之儀也、然者田尻殿御當家へ被申入候間、彼領知通肥後より御持續被成候様ニ候ハ、御和平可被成之由也、八城御繰替者、眞幸之公田一倍御給なく候ハ、一圓ニ罷成間敷之由御申也、田尻へ兵船之事、自他國之覺にて候条、何としても此度事成候様ニ御才覚肝要之由也、御出勢來秋ニ指延候事、尤ニ被思候、來秋と候ても、一行候ハてハ御無用之由也、大矢野進退之事、御繰替共候ハ、彼方へ移候する仁なと然々定られ、其日後被仰出候て可然之由也、

一十二日、出仕如常、上使近日中坊津一見ニ御越之由候間、左様之御宿等山下筑後守へ被仰付候、此朝白濱次

郎左衛門尉殿を以、拙者刀雲生并鑄一稜有之由被關召候間、可懸 御目之由候条、即指合候條、備 上覽候、鑄ハ上野弥左衛門尉と云細工仕候、(光宗) 此日平田殿風呂燒せらるゝ由候間、參候て入候、夕めし振舞也、

一十三日、出仕如常、此朝於 奥之御座忠平へ御寄合也、御座主居、武庫客居、其御次拙者參候也、當時 大守様御養生氣に候間、(初) 輕くと候候て、御膳三めまで參候、三返め御湯と候処、古市舍人助御所領被下候祝とて、御酒進上申候条、又御盃參候、それより五返參候て御湯也、種々御閑談共也、御料様忠平へ御指出御見參被成、其時忠平之御持參參候、御酌ハ本田弥五郎を忠平御頼被成候也、女房衆達もいづれも御酒被給候也、此日豊州拙宿へ御礼被成、めこ肴にて樽預候、

一十四日、如常出仕申候、此日若衆中到來候て、終日閑談共也、

一十五日、出仕如常、忠平様・豊州、其外各御出仕也、御指出御見參也、此日忠平様豊州御宿へ御礼申候也、吉田作州にて茶湯也、水こほし・花いけなと宗叱褒美

申候とて、我々へ見せなさる、此日忠棟・親貞・拙者へ、鎌刑・吉作にて承儀候間、本野州館にて各承候也、

此条隱密にて候間、後日御慶之已後可書置候也、此晚右之条兩使にて忠平様へ被得御意候也、

一十六日、出仕如常、從御家門様進藤殿下向候、又從

中國 上使候、彼是就左様之儀、諸所之一反ニ廿文宛之反錢被仰渡候也、此日諏方座主にて談合也、忠棟・

親貞・伊集院野州・上原長州・昨日之御使鎌刑・吉作

・拙者也、後日巨細可註候也、談合過候て、座主指出

なされ、御めしにて御酒振舞也、それより各罷歸候也、

此刻從八城平田殿書狀到來候、先日雜説共申候、當時

ハ無何事之由也、田尻へ之兵船未揃之由也、

一十七日、出仕如常、諸所へ堀池大夫進入、近日中可有

之候、棧敷等之儀、書狀にて被仰渡也、此日忠平様御

宿ニ寄合中被召寄候、其座躰主居武庫様、御次拙者・

伊集院野州・伊地知越中守、客居忠棟・親貞・堀池宗

叱也、御酒數篇參候、堀池弥次郎・進藤又七など罷出

候て唄共申候、終日乱舞也、正隈伊右衛門尉小鞍打候、

大鞍ハ宗叱同心申候小四郎と云者打候也、大つゝミハ

有川雅樂助次男被仕候、祢答院賀雲齋御酒之時分被參

候、御雜談共也、乱酒ニ成候て、弥次郎立候て五条・

夕顔舞候也、種々取乱候ての御酒宴也、左候て各罷歸

候也、此朝龍盛院寺領闕所共候、然者此前 與岳様御
夢相共拙者へ蒙候間、其首尾にて候間、拙者頼之由當
住被申候条、寄合中へ鎌刑にて申候、各尤にて候間、
談合可被成之由也、

覚兼(花押)

一天十一癸未參十七日、此間蜜々御談合共候趣、村田右

衛門尉殿へ被仰出候、於本田野州館、忠棟・親貞・拙

者同心ニ意趣申候、乍勿論任 上意申出候、御使吉田

美作守・伊地知雅樂助、村田雅樂助を經平同名衆にて

候間、雙子・母子などへ委被仰分候へとて、相副被成

候也、様子ハ旧冬霜月三日夜、野村民部少輔処ニ忍入、

彼人殺害候、御糺明共候間、阿多源太・平野新左衛門

尉兩人顯候而、同十二月六日、生害させられへきニ相

定候処ニ、彼兩人慮外に落失候、從夫諸所方々へ即刻

被仰渡候へ共、隠落候間、行方不知候て無御了簡、其

分にて候、然ニ有馬へ番衆渡海之時分に候つる間、伊

地知備後守舟ニ乘候て、彼表へ阿源・平新被罷渡候、

比志嶋宮内少輔・同弟彦八郎、是も爲使有馬へ被指渡

候処ニ、彼宿へ阿源・平新押入候て被申事ニ、野民生

害之儀ハ去年八月より談合候、村田右衛門尉殿・大野

左近將監殿・比志嶋彦八郎・三五坊、彼衆於村田殿館談合申、既ニ若宮にてきんちやう共仕、所にて驍候へ共、仕合なく候て無其儀候、それより又村田殿にて談合申候様へ、さてハかく／＼に一兩人宛にて成共、仕合法第殺害可仕ニ相定候条、霜月三日夜、如此遂宿意候、然處ニ大野將監殿・彦八郎殿打返しなされ披露候事、無曲候由堅被申候、彦八郎返答にハ、我ハ打返し候て披露申事無之候、大野殿不紛御申なされ候由、漸返事被申候、是を聞候者伊備後守・市來衆中兩人にて候由、伊備白狀被申候、此上阿源・平新より、阿多

(忠臣)掃部助殿へ書狀來候、それに右之人衆同心にて候由、具ニ書載候、菟角無余儀候間、村右被失面目之由被仰出候、惣而ハ腹をも御切せなされ候すれ共、科人之如此被申出まて候条、無其儀候由也、大野將・三五坊同前、彦八郎是又科人ニ逢被申之条、尚く深く敷被仰出候、宮内少輔事、是又當時御使衆之内にて候て、被討漏候科人へ逢候て遁候、其上はなむけなとまで被仕、種く懇にて候つるなる、曲事千万之由被仰出候也、則皆く當所を退出候也、村右ハそと寄合中まで可被申成子細候とて、役所ニしかと被居成候、村右へ使へ、吉

作州・伊地知雅樂助、比宮其外之衆へハ、(鎌田政景)棟刑・税所(彌和)新介也、

一十八日、出仕如常、村右よりハ、菟角何と様にも科人衆ハ被申候へ、我ハ努く無存知由也、併被仰出処者證跡にて被仰候、是を押候する程之事を御申候て、たゞニ然と御入候てハ、必竟村右之御爲ニ罷成間敷由、寄合中返事申候也、此日相良(忠孝)四郎太郎殿拙宿へ礼儀候、馬・太刀預候、御酒參會候也、并深水三川守供申候、彼方より太刀・漆千筒預候、

一十九日、(歳久)金吾公御指出也、折着にて御酒御進上也、忠棟取成候也、此日金吾御宿へ參候也、

一廿日、相良殿指出被成候、古鉢御三献也、式之御引出物也、御太刀新納右衛門佐、弓・征矢三原下総守、鎧

岩切三川守、御馬佐多宮内少輔、此衆請取候也、御三(善徳)献之後、御引出物懸、御目候、御馬も、上覽候、鞍置

也、持參之御酒御酌被申候、舍弟も召出、御酒被給候也、深水三川守・犬童名字之者、是も於、御前御酒被下候也、深水方太刀一・刀一・漆五千筒進上申候、犬童も刀一進上申候也、此日伊地知雅樂助へ寄合中請用也、終日御酒宴也、

一廿一日、出仕如常、伊地知備後守、阿源・平新我舟に

乗せ、有馬へ渡海候、殊ニ彼兩人落失候時分、光宗(平田)・

親貞書狀を以、彼衆菱刈表罷通候ハ、生害堅させら

れ候て可然之由、御頼被成候キ、然ニ其刻ハ助候て、

于今我身上大事と被存、結句白狀被申候、言語道断曲

事之由被仰出候、此等之旨、談合衆兵庫頭殿・金吾様

を始、各へ御尋被成候、尤之上意之由也、併生害ニ及

候する事ハ如何可有候哉、先々書狀を以、就彼一ヶ条

之儀、各へ被失面目候、彼衆曾不存由被申候間、伊備

へ問對之儀共可有之候、其節此方へ可被參之由申候て、

書狀伊備へ遣候、忠棟・拙者判仕候、此日珠長(益城)へ御酒

持せ礼儀申候、暫閑談也、兩夜之記面白物にて候間、

一覽申候へと候て、借預候也、それより福昌寺へ參候、

是へも御酒持參申候、御酌共申候、種々御雜話共也、

常栄被在合候、いつ方にて欵沈醉と見得候て、此度村

右など御噺之儀、如此ハ有ましき事にて候由被申候間、

拙者指合候て、曲事被申候、不輕儀候間、左様ニ被存

候ハ、狂言之様にハ承間敷候、後日委可承之由申候

条、それより申候ハぬまでにて候、拙者も不承ニ校量

申候へと候俛、代賢之御前にてこそ候つれ、彼是酩酊

と見得候俛、申捨候也、此晚相良殿旅宿へ、忠棟・親

貞・拙者同心ニ礼儀申候也、三献寄合被成候已後、四

郎太郎殿酌被成候、提ハ舍弟長壽殿也、深水三川守座

ニ出候て、会尺申候也、

一廿二日、出仕如常、一乘院此日より御祈禱開闢とて御

參也、太守様御見參也、いつも御酒御寄合被成候へ

共、御虫氣散々候間、御礼茶計也、一乘院御酒御進上

也、我々出仕歸ニ金吾様よりめされ候て、直ニ參候、

座躰主居金吾様・本野州・吉作州・伊野州・鎌刑・白

濱(重忠)次郎左衛門尉也、客居忠棟・拙者・上長州・税所新

介・本刑也、御酒數篇參候て已後、御湯參候て、其後

御雜談共也、其内ニ忠棟御茶湯仕懸なされ候て、各御

茶被下候已後、又冷麵參候て、御酒にて各御暇申候也、

此日福昌寺拙宿へ御礼とて入御候、塔頭衆深固院を始、

一兩人御伴被成、各御茶預候、御酒三返參會候、御閑

談也、此晚有馬殿(晴徳)より書狀到來候、境目當時無何事候、

於弥御入魂奉頼之外無他之由也、此日より川田駿河守

も御多賀ニ參籠にて、鞭執行也、

一廿三日、早旦より看經・讀經共申候、出仕如常、從有

馬使僧到來也、并有馬右衛門尉久々彼方へ御番被閉目

被歸候、彼方當時無何事由候、龍造寺可相絡之通雜說候間、手火矢衆百帳(總)程御合力頼存之由也、此朝武庫様より、鎌刑・吉作にて御申也、八城從爰者直々御格護

ニ相定候、蟬鑑誰人へ御渡候する哉、又浮所領等去年已來御格護候、是又爰よりへ、此方より御格護肝要之由也、此日町田羽州(久徳)從八城歸宅候、平田殿(光宗)より、彼境之様子共条書を以、委被仰越候也、此夜御月待候間、申刻より垢離取候て、讀經別而申候也、此亥刻計、

太守様御虫笑止之由忠棟より注進候間、即御内へ參候、直ニ奥へ參候、忠棟・親貞・拙者同心申候也、暫祇候仕候、卒度御寢入被成候間、丑刻計罷歸候也、

一廿四日、出仕如常、市來作州(家守)へ川左將・稅新を以、寄合中同前ニ申候、日州糸原名、當時野尻ニ付候、然者岡倉諸篇役所等不自由候間、是ハ藏岡へ被付、其返地

ニ井藏八町名野尻へ付被成由也、何と様にも御意次第之通作州返事也、此日明日御連歌之一順・再篇、於護广所金吾様を始各連衆指揃被遊候也、此晚平田殿風呂燒せ候て入候、

一廿五日、御月次御連歌也、御座躰主居左衛門督殿・珠長・拙者・伊集院野州、客居上川上殿(久徳)・釣江(未也)・常栄・

喜入大煩助(久徳)・稅所新、執筆瀧聞九郎右衛門尉、御座敷ハ南戸之間也、御会調伊集院・大村・百次・穂北也、地頭へ被罷出、御酒共被申候也、

一廿六日、出仕如常、從相良殿、四郎太郎代ニ罷成神判未進上候間、進上被成由也、町田羽州使也、從福昌寺村右頼被成候とて、吉作・伊雅を以御申也、村右直林寺へ當時頼居被成候、然者彼慮外之儀、曾以しらせられぬ由也、先日此方に而村右申被成候ニ、少も相替儀無之候、然間猶々御申之儀候ハ、一途御申肝要候、

是ハ村右未此方へ御座候時、御申之同条にて候間、御返事も同前たるへ候由、福昌寺へ返答被成、此日於御對面処、相良殿御寄合也、太守様へ御養性時分候条、兵庫頭殿御代ニ御頼被成、主居武庫公・豐州(備)・本野州、客居左衛門督殿・四郎太郎殿・橋院軒・宗叱也、御點心之時、太守様御指出被成御寄合也、相良殿へ

金具作之御腰物被下候、舍弟長壽殿へ丸貫御脇刀拜領被申候、宗叱御酒宴共申候也、深水三川守度へ召出之、御酒被下候也、此日野村刑部少輔(文綱)処へ御酒持せ札申候、種々會尺共也、其後南林寺へ參候、住持御留守也、同宿衆殊之外之種々會尺也、拙者も御酒持せ候、

一廿七日、出仕如常、此日珠長にて閑談共申候、それより談儀処へ參候、御酒持せ候、御留守にて候つる俛、聽而罷歸候也、此晚珠長・可丹拙宿(若水)へ被來候間、御酒參會候て閑談也、

一廿八日、出仕如常、一乘院御祈禱御成就候とて、御札配帙御持參也、御虫氣然々無之候間、御見參被成候へぬ由、拙者罷出能々御礼申せ之由候間、罷出其分申候て歸申候也、此朝金峯山・霧嶋山御供當米然々不聞候由被聞召及候、高原・田布施之地頭召寄、稠札明可申之由也、一乘院御執行候御祈禱者、光明眞言之護廣也、脇壇にて十一面供・太威徳法温座也、

此日一乘院拙宿へ御礼被成、大興寺御伴也、御茶・中紙預候也、御酒參會申候也、此日本田刑部(正親)少輔去年湯之浦ニ御所領十町余拜領候、其御祝言被申上、我々へも二百疋持せ祝言也、此晚從義虎預御狀候、趣者、當時此方へ滞在仕由被聞及之間、御音信被成之由也、猪肢あまた持せ預候也、

一廿九日、出仕如常、白濱次郎左衛門尉殿を以御暇申候、未八城御格護之儀等、一途無落着候、是今少御談合申候て可罷歸之 上意也、此朝不動之法一万座可被執行

之御談合也、御流・三寶院被出合、五千座宛被行せ候て可然欵之由候つれ共、談儀処も一乘院もめされにくかるへき由候間、談儀処之御校量迄にて可然之由相定也、此日義虎御返報申入候也、又北郷殿(磯久)へ當時肥州限本御番薩州御息被成候、此替ニ北郷彈正忠殿御立肝要(義忠)之由、書狀を以被仰渡候也、此日肝付三郎殿より此方へ逗留申由被聞及せ候とて、檢見崎常陸介(兼季)を以音信也、鹿荒卷預候、

一晦日、出仕如常、種子嶋より年始之使者被參候、牧左京亮と申候、進物等如恒例、使者へ御見參候、御前にてくハハ三献也、拙者御前ニ候て取成申候、此朝八城御格護之事、誰人地頭なとたるへく候哉、各談合に一向不定候、必竟 上意次第之由、町出羽守殿・税新にて御申也、御前も御養性時分と申、御案更ニ不届候間、能々各談合被仕、あまた様子聞召合、可被仰定之由也、此日相良殿へ始而出頭被成候、爰元御仕合能候、目出候、祝言計ニ太刀・百疋、使にて進之候、深水三川守へも同前、聽而使者にて又々礼承候也、此日相良殿宿へ、爲 御代兵庫頭殿御礼被成候、此朝出仕歸さニ、町羽・鎌刑・吉作・税新同心申、拙宿にてめし振

舞候也、此日御殿申、向嶋白濱まで渡海候、出船之刻、拙者市來野川原毛 上覽可有之由、大山肥(兼志)前守にて蒙仰候条、肥を以頼候て懸 御目候也、此日肝付彈正忠殿使者預候、酒肴持せ也、歸帆之刻加治木へ可罷越之由也、△

「全」

▽ 四月

一 一日、看經・讀經等如常、愛宕山長床坊使僧近日(國脱)上之由候間、かこしまにてハ繁多之条難成候て、白濱より返書認仕候、沈五河進之候、并三輪山先達より使僧、是も近日中上國之由候間、返書認遣候、銀子二河進入候、此日如加治木罷渡候也、申刻計加治へ着船候、舟元へ使者彈正忠殿より預候、并乗物被持せ候、それより別當処へ暫憩候間ニ、肝付藏人殿使ニ來候、同心にて城へ罷登候、藏人殿へ宿申候、肝付備前守殿案内者ニとて被來候間、打烈彈正忠殿館へ罷登候、樽一荷并肴持せ候也、躡而めし振舞也、座躰客居拙者、次肝付備前守・肝付藏人、主居彈正忠殿、次拙者倅者蓮香弥介、次日高新左衛門尉也、種々肴共參候て御酒也、持

せ之時酌申候、彈も酌被成候也、倅者共いづれも召出御酒也、此晚中城山ノ手肝付小五郎殿(兼志)・同名半五郎殿各へ礼申候、いづれへも御酒・中紙持せ候也、銘々種々之会尺也、今夜藏人殿へ留候、こゝかしこより御酒共預候、彈正忠殿も御酒もたせられ、拙宿へ礼被成候、二日、朝めし肝付藏人殿振舞也、彈正忠殿へ腹中氣出合候て御出無之候、種々会尺也、座過候て罷立候、此日宮内へ罷渡候、船元まで肝付藏人殿其外あまた被來候、未刻計濱市へ着候、桑幡殿假屋へ暫憩候、それより迎共來候間、桑幡殿へ參し候、躡而三献參候也、弓一帳預候、拙者も奥・面へ御酒もたせ候、并中紙進之候、それより夕めし振舞也、桑幡殿一人・政所殿一人、其外親類衆までの座にて候、種々会尺也、此晚平家なと語せられ会尺也、今夜桑幡殿へ留候、一三日、大圓坊朝めし振舞也、桑幡殿父子三人同心申候、御酒もたせ候也、此日政所殿へ礼申候、御酒もたせ候也、此晚敷祢町まて着候、十八官処へ宿申候、休世(敷祢領覽)・敷祢殿より使預候也、一四日、十八官朝めし振舞候也、其後敷祢入道殿被下せ被召烈候間、城へ罷登候、夕食振舞なざる、三郎五郎(領覽)

殿も座三候、種々会尺共也、立花一覽有度由候間、一瓶さし候、寔物おかしき事共也、おり湯なとさせられ、色々会尺也、此夜休世齋へ一宿申候、

一五日、敷祢三郎五郎殿朝食振舞也、それより休世齋も

宮崎へ越之由候間、同道ニ打立候、北郷殿(時久)へ御礼可申

存候て、都城へ未刻計越着候、本之原本別當古郷隆昌

処へ宿仕候、休世齋ハ嶋戸まで通にて候、土持周防介

殿まで、一雲(北郷時久・忠虎)御父子へ御礼可申入ため參候由、案内申

候也、聽而永井等永と云使にて參候、日出被思之由、

從一雲承候、暫やすらひ申候へ、一雲ハ養性氣に候間、

彈正忠殿(北郷忠虎)いつかたへか語ニ出させられ候間、被歸せ次

第可參之由、注進可被成之由也、聽而案内者預候間、

打烈一雲之館へ參候、彈正忠殿庭迄指出なされ、こな

たへと承候間、打烈座敷へ參候、一雲見參有へく候へ

共、養性氣之条無是非之由、長井等永にて被仰分候、

其後彈正忠殿へ太刀一腰・百疋進入候を、小杉丹後守

披露候、一雲へハ太刀一腰・段子二端進入候也、座躰

客居拙者、次根占越中守、主居彈正忠殿、已上三人也、

御めし參候て、其後種々肴にて御酒五篇參候、五反め

彈正忠殿酌なされ候、聽而拙者又酌申候也、拙者悴者

兩度被召出、御酒被下候也、將亦隆昌処へ着宿候へハ、先押肴にて御酒也、其後粥振舞候て、又種々肴出し候て御酒也、拙者悴者なとまで悉振舞候也、此晚打立候之砌、彈正忠殿拙宿へ礼なざる、御酒三返參會候、一

雲より太刀一・百疋預候、霜臺よりも同前、それより

嶋戸まで罷着候、△

一六日、早朝嶋戸を打立候而、未刻計田野へ越着候、長

藏坊へ宿申候、聽而大寺殿より使者預候、明日御狩之

事申候間、其校量候、拙者當所へ越着之由、即刻諸所

へ被仰渡之由也、此夜使者を以大寺殿へ、餘々無沙汰

ニ罷過候、尤可參候へ共、天氣惡候間、不用いたすの

よし申述候也、休世齋も同宿候、

一七日、早朝御狩ニ罷登候、曾井・清武・穆佐・細江・

田野・宮崎・海江田之衆也、曾井より比志嶋彦太郎殿

人數召烈登被成、二鹿藏狩せ候也、天氣然々なく候て、

散々之狩也、漸猪・鹿ノちいさき七ツ取候、比志嶋殿

・大寺殿などへ破籠之御酒參會候、各狩人へも拙者御

酒振舞候、大寺殿今夜頻ニ可參由承候へ共、拙者ハ養

性氣、又ハ敷祢休世齋同道申候条酌候、さてハ用意

之程見せなされ候するとて、鎌田源左衛門尉・柏原左

有

近將監、此外宮崎衆中あまた田野之こくとく同心也、拙者ハ清武之内くつかけと申村ニ留候、

一八日、早且打立、未刻計宮崎へ着候、先休世齋へ三献參會候、其後湯漬參會候也、歸宅申候とて、衆中各被來候、御酒など持せらるゝ衆も有也、風呂焼せ、休世齋入申候也、

一九日、看經等如常、此日も衆中達各被來候、終日雜話にて御茶など也、

二十日、看經・讀經等如常、滿願寺御座候也、

二十一日、如常、西方院御出也、來十八九日之間風呂焼せられ候する、休世齋同心にて可參之由、案内承候也、

此日從藏岡山城守殿次男にて、かこしまより罷歸由承候、并糸原名拙者分別ニ藏岡ニ付候、祝着之由承也、

此日佐土原へ和田江左衛門尉殿を以、從鹿兒嶋罷歸由申入候、其外遙久御無沙汰申之段申候、田野御符ニ取候猪一丸進入候、中書公御留守にて候、御兒様御指出之由也、

二十二日、藥師如來ニ別而看經共申候、休世齋・敷越・鎌源などへ御礼候、案内者申候、鎌源御茶湯にて、殊之外御会尺被申候、此日從中書公弓削太郎左衛門尉を

以、一昨日之御礼承候、并福昌寺雲堂造宮之葺板御當被成候趣御尋也、此日釈門院高野山より下向候とて被來候、鞆一かけ預候、鎌源処にて見參仕候、佐土原御使者も同前、

二十三日、看經・念仏等如常、

二十四日、鉄放田中主水左衛門尉へはらせ候、打立候、

二十五日、結夏にて候間、別而看經・讀經等仕候、衆中

各被指出候、見參申候也、此日彦山門坊使書預候、并

山上建立之刻候之条、奉加之由承候也、西俣七郎左衛

門尉遙久無沙汰申候とて、上樽一持せ來候、御酒各へ參會候也、

二十六日、念仏等如常、門坊返書仕候、奉加ニ鳥目百足入候、

二十七日、諸篇如常、野村大炊兵衛尉茶湯道具求候由候候、彼宿所へ語ニ越候、終日雜話にて茶也、

二十八日、觀世音へ祈念如常、讀經等同、此日敷祢越中

守殿へ休世齋茶湯会尺也、衆中五六人座ニ候、終日種々着にて御酒也、雜話共候也、此日從木脇竹十束預候、

二十九日、念仏等如常、吉日にて候間、毘沙門假堂作ニ打立候、并茶湯之座可構普請等させ候也、此日從佐土

原御使者高崎越前守被越候、趣者、久御無沙汰之段、次七山左近將監去年已來別而辛勞共申候間、彼山續ニ相應之処一ヶ所遣られ候て可然之由也、尤令存候間、

先々一ヶ処落着させられ候て可目出候段、御返事申候、

越州御酒持せられ候間、參會申候、從福嶋指宿丹波守被越候、是も御酒持せられ候条、即參會候、

一廿日、看經等如常、天川殿子ニ名付候へと被申候条、名付候、御酒・鹿皮・紙など引物ニ得候、御酒即たへ

候、此日も堂作番匠四五人にて仕候、見候、休世齋參合、終日雜談共にて御酒・茶など也、

一廿一日、念仏等如恒、茶湯座作候する覚悟之処ニ、樹なとさせ候、堂作番匠無油断候、

一廿二日、讀經等如常、茶湯之座之普請させ候て見申候、此日本庄地頭御酒持せ到來候、即罷出參會申候、頃有

馬御番より歸宅候とて被來候間、彼堺目之物語共也、上野弥左衛門尉爲細工來候、荷葉ニ蟹之繪拙者ニくれ候、終日左様之物共、又刀なとあまた見候て慰候、

一廿三日、今夜月待之間、讀經等別而仕候、此日も毘沙門堂地之普請共させ候て見申候、又昌光寺登にて候間、周易之占共させ申候、就其種々閑談也、此夜御崎寺無

沙汰候とて被來候、楊梅肴にて御酒持せ也、月待候間、其座にて賞翫申候、休世齋など參會候、從佐土原織屋來候て、舞など一二番申候、それより變而月待取候俟、祈念等仕候て回向申候也、

一廿四日、地藏へ看經如常、御崎寺早晚も廿八日例講被成候へ共、雨茂候間、乍次講讀候する由承候間、校量次第之由申候て、講讀させ申候也、此日和田刑部左衛門尉殿・山本備前守、曾井へ比志嶋殿へ使ニ進之候、

趣者、去二月、曾井之市へ木花寺小者立候処、茶子なと賣候屋ニ、彼者有むきに行候キ、然者彼女亭主錢三十之内外にても候欵失候、彼者來候つる間、定而取候らんと市場にて申候とて、曾井之衆搦られ、加江田へ被渡候、尤必定之盗人にて候へ、無異儀請取申候て、其辱申候すれとも、盗人と承候證拠分明ならず候ま、落着次第請取候する由申候て、加江田役人共、曾井之ことく遣候、其後再三懸引申候へ共、不事果候、殊ニ拙者鹿へ參候て留守之条如此候、頃曾井より使者を以餘々不事果候間、今分に候へ、彼盗人いつかたへも追放候する由承候、從爰者拙者直ニ申候て欵可然候すらんと、加治木伊与介來候て申候俟、右之兩人比志嶋

殿へ進之候也、石塚へ越候間、彼方にて意趣申候由也、
(比志島義基)
 式部少輔殿面談之由也、一途之返事無之候、追而委可承之通也、

一廿五日、看經等如常、圓福寺久無沙汰候とて越被成候、然者休世齋又衆中五六人彼是參合、圓福寺御会尺申候、終日御酒・御茶などにて、四方山之物語共也、

一廿六日、念仏等如常、圓福寺へ、先日法花嶽參籠之刻、從代賢和尚被下候庵主号之證跡共見せ申候、從夫茶湯会尺申候也、休世齋同前也、此日先日かこ嶋へ使ニ上

申候泉鏡坊歸也、御上様御氣分御快氣之由也、御使者(忠度)阿多掃部助殿之由也、并上野弥左衛門尉へ御細工させ

られへく候、來月十日かこ嶋へ參候様ニ可申之由、掃部助殿より承候也、次寄合中より、先日我々祇候之刻出合候御祈禱一万座、來月中旬之比可始候、然者日州兩院より三十壇之用意可申付之由也、即盛候て、次第(伊勢貞徳)に諸所へ申渡候、此日從中書公遙久御無沙汰候とて、有川左近將監御遣被成候、拙者へ養性氣に候間、

鎌田源左衛門尉頼候て会尺申させ候、并御返事も忝之由申候也、此日比志嶋殿より使者也、北村武藏介・今一人兩使也、先日盗人之儀也、何と様にも盗人かけ候

者、又盗人此方へ召寄、委左右方承合、噉申候て可然之由承候、和田刑部左衛門尉・山本備前丞先日之首尾にて候間、意趣聞せ候、拙者申候処者、尤如承候、別

処と曾井との口事にて候へ、當処へ召寄、左右方承合、噉可申候へ共、愚領との儀候間、彼儀へ難成候、曾井よりハ盗人と被仰懸候間、其一途可承候、此方よりハ不證拠ヲ承通申候する、其上にて問對などにても候する哉、それハ何と様にも御談合可仕之由返事申候也、
 一廿七日、念仏等如常、此日北郷殿父子より使節預候、
村田名字ノ人也

其趣者、先日我等御礼ニ參し候其返礼也、次ニ先日龜澤名字之人、赤坂にて山賊仕候て、此方へ逃來候、然を成敗させ候へと頼被成候間、爰元にて生害させ候、其礼也、此日金剛寺入御候間、種々肴にて御酒參會候、其座休世齋・伊勢之田中主水佑也、此日竹案衆徒拙者養性氣候条、藥師法十二座十方返修行被成由候て、配帙預候、此日も諸所へ御祈禱之儀共申渡候、返事到來也、

一廿八日、看經・讀經等別而勤候、弓場之在処、衆中五六人申付、見せ申候也、美々津假屋樽持せ、無沙汰申候由申候て來候、毘沙門堂作番匠衆、其外諸細工等多

居候に、御酒振舞候也、

一廿九日、念珠等如常、かこしまへ御祈禱の様子又ハ御氣分之様共可承ため、沙汰寺使僧として進上申候也、

此日も御祈念就調儀、諸所へ遣候使歸也、何も御祈禱

目出候由也、総昌院より使僧預候、趣者、糸原名、藏

岡へ頃御付被成候欵、就夫総昌院領彼名ニ候処、倉岡

醫王院へ爰より付被成由承候、是者先年御懸曳共候て

総へ付候處、又々如此承候、如何之由尋られ候、拙者

曾不存之通申候、并書狀相添、倉岡へ申理候也、

五月

一朔日、早且風呂焼せ入候、従夫別而看經仕候、同法花

讀誦申候、穆佐より使者也、御祈禱之儀ニ付而、百廿

町之御公役之由承候、當分者百町之公役こそなされ候

へ、いかゞ之通承候也、野村大炊兵衛尉へ意趣聞せ候、

拙者返事にハ、御公役之事、鹿兒嶋より之日記之候申

渡候、御存分候ハ、彼方へ御申肝要候由申候也、此

日も堂作之番匠、又ハ金銀之細工・刀之輪細工・塗師

など見候て慰候、又ハ盤之上・茶湯などにて暮候、

二日、諸篇如常、

一三日、毘沙門堂造畢候間、奉案置候、木花寺申請候、

酉刻良辰之由候て、勲行等被成、堂遷被成候、従夫本

尊之法廿一座頼存之由申候条、一夜ニ修行也、檀・机

・供物等如常、仏布施百疋也、此日吉利山城守殿御座

候也、

一四日、此午刻毘沙門法廿一座成就候て、御札等頂戴申

候、

一五日、祝礼如例式、衆中各被來候、拙者ハ一兩日癩乱

出合散々候間、(兼兼也)大徳丸指出、各へ粽・御酒申、歸し候

也、此日休世齋天氣能候とて歸被成候也、

一六日、諸篇如常、毘沙門堂ニ茶湯仕懸、衆中なとあま

た寄合、終日慰候也、南藏坊上洛暇乞とて被來候、木

綿一進之候、

一七日、何も如常、伊勢之田中主水佑近日上國之由候条、

風呂焼せ会尺申候、其衆、本田治部少輔・猿渡大頼助

・敷祢越中守・柏原左近將監・鎌田源左衛門尉・長野

談路守・関右京亮・野村大煩兵衛尉・上井右衛門尉也、

終日風呂過候へハ、めし振舞、種々看にて御酒參會候

也、

一八日、如常、弓場普請各衆中へさせ申候也、善哉坊弟

子入峯之爲上洛候とて、暇乞ニ被來候、御酒持せ也、

參會候、乍徑(龜)鹿皮二枚進之候、又中途まで送船等之儀、拙者分別可申之由申候也、

一九日、諸篇如恒、財部地頭鎌田筑州礼儀として御座候、京樽一荷・折肴預候也、泰平寺其外衆中十人計同心也、拙者ハ養生時分候条申分、本治・敷越頼候て、相伴にてめし振舞候、御酒之時、拙者指出、筑・泰より預候御酒賞翫申候、此日穗北より大迫兵八左衛門尉・黒田万介氣分見にと申候て、御酒もたせ來候、財部衆中同前ニ御酒振舞申候也、

二十日、如常、朝普請ニ、坪弓場誘させ候也、谷山志广介田尻兵船上乗之爲、二月末より八代表へ差越候、先々彼兵船此節者不事成候とて、平田濃州御かへし被成候間、夕歸宿申候由申候て指出候、有馬表へ當所之三人之衆も續候、安德輒御手ニ入候由申候、唐仁原藤七兵衛尉嶋原口にて手負候間、拙者か舟より罷歸由也、横山玄蕃助も彼人ニ相添候、志广介計陸路を參たる由申候、肥州口無何事之由候也、此日拙者手之衆共、坪弓場にて弓之事仕候、見申慰候、

一十一日、如恒、弓場普請先日之闕衆にてさせ申候、此日從佐土原坂本半介を以、拙者氣分無余之由被關召、

無油断祈禱又ハ醫寮(瘵)など可仕之由被仰候也、此日も手衆弓之事共申候、見申候て慰候、

二十二日、藥師へ別而讀經共申候、弓場普請之爲躰見候するとて、乗物にて麓へくたり候、從夫直ニ鎌田源左衛門尉殿へ、久無沙汰申候まゝ罷候、めし振舞也、此日者拙者前より手衆共に弓之事仕候、終日御酒にて候、此日縣より壁塗杉山新左衛門尉と申者來候間、抜合共ぬらせ候て見申候也、

一十三日、看經等如常、殿所より宗琢・隼人佑來候、各上樽持參候、殿所へ此間居候法花坊主經典と申若者、手跡器量にて候間、契約仕見參申候、此日より茶湯座造作企候、諸細工共させ候て見申候、加治木但馬掙・谷山志广介・宗賢・蓮香讚岐守など寄合候て、此日ハ弓之事仕也、

一十四日、如常、御炊才八殿返書認候、經典ニ書せ候也、銀子二両進之候、田中主水佑明日打立由候て、暇乞ニ被來候、御酒寄合候、此日從殿所神介來候間、終日晝暮候て慰候、此晩才八殿返書并田主へ羚皮二枚遣候、蓮香弥介へ持せ候て遣候、

一十五日、如常、衆中各出仕也、拙者ハ虫氣散々候之間

申述、見參不申候、此日終日勞候、此晚從佐土原四官と申醫者召寄候也、

一十六日、如常、四官へ脉取せ候、即藥共服し候、終日養性共申候、此日海藏坊久無沙汰候とて雜掌也、酒飯なと被持せ候也、

一十七日、如恒、此朝も脉取せ、服藥共申候、

一十八日、如常、弓場普請させ候、見申ニ漸乗物にて罷下候、觀世音へ讀經等別而申候、此日二堞拙者氣分御覽候するとて、しわす崎より御越候也、此日馬嶋宗壽軒久無沙汰候、其上養性時分之由被聞付候、殊此節上國之企候、暇乞とて被來候、酉刻計參會申候、爰元座敷造作最中取乱候間、於毘沙門御堂茶湯會尺申候、鎌源・柏將相伴也、先めし振舞候て、其後茶湯也、拙者茶立候、已上仕立等褒美共被成候也、

一十九日、如恒、宗壽軒如佐土原歸也、拙者氣分然々なく候間、暇乞之見參不申候、土持殿なとへ送候曳付之書狀認遣候也、又近日上國之由候間、乍徑微鹿皮五枚進之候也、此日も服藥、又ハ終日造作等させ候て見申候、

一廿日、如常、平田(宗慶)新左衛門尉殿久無沙汰候、其上氣分

見ニとて御座候、上樽一持せ也、拙者ハ氣分然々なく候間、見參不仕候、柏將頼候てめし振舞候、相伴させ候、其後犬徳丸指出候也、此日忠棟當時南郷ニ逗留候、

預書狀候也、田尻殿(盛徳)よりノ書狀被持せ候、去廿六日龍

陳ニ對し軍候て、梁川衆鎗下ニ五十程討取候由也、爰

元より之御番衆も皆々分捕高名被仕、粉骨之由也、又

有馬殿(瑞徳)よりの書狀、是又持せ預候、是も去六日、深江

・安徳兩処改先非、御奉公之由申候間、此方之番衆・

地下衆兩処へ指籠之由也、又遊行調之儀承候也、

一廿一日、如恒、遊行上人來月始福嶋へ着被成候、然者

調之儀、清武・田野・穆佐・藏岡彼方へ相副、調可被

成之由忠棟より承候条、彼所々へ申渡候也、此日忠棟

へ勝目但馬丞を以、堺目御勝利之祝言、又ハ別条御用

共多々候間申入候、此日茶的射始させ申候、そと下候

て見候也、

一廿二日、如恒、吉利殿(志達)より、拙者氣分如何候哉とて使

者預候、并女中より對之屋使ニ給候也、食籠着ニ上樽

預候也、此次ニ総州(忠徳)此間稽故之爲めされ候連歌共被書

拔せ、御見せ被成候、無御隔心候、御懇望之条、愚存

共細々書付進覽候也、此日肝付彈正忠殿・敷祢(頼元)三郎五

一 田賦每拾五町定勇士老人

〔供參考〕

郎殿よりも、氣分事問ニ使節預候也、各見參申候也、
 此日忠棟より書狀を以承候、趣者、有馬表深江・安德
 御奉公可申之由候間、先々安德へ軍衆指籠被成候、然
 處深江之事、頃相違仕、一圓ニ御奉公申ましきに相定
 候、然者安德之當番衆及難儀候条、（義入）太守様も來月二
 日可爲御進發之由候間、日州兩院衆續之儀可申渡之由
 候条、即刻寄々次第へに申渡候也、
 一 廿三日、月待にて候間、別而讀經共申候、此日桑幡左
 馬頭殿父子、拙者氣分笑止之由被聞及候とて、越にて
 候、廳而參會仕候也、肴・酒なと持せられ候也、八幡
 大官司、是も御酒持せ來候也、此夜如恒月待申候也、
 一 廿四日、如恒、地藏看經等別而仕候、比志嶋式部（孫志）少輔
 殿より、氣分其後無沙汰候とて、使者預候也、桑幡左
 介也、是も御酒持せ候也、此日當時造作時分と被聞せ
 候とて、從都於郡番匠一人被遣候也、曾井よりも一人
 預候、是者當時續前にて造作等さし可留候間、追而御
 合力頼存候由申候て歸候也、△

1371

〔御文庫廿二番箱四卷中〕「義久公御譜中案文有之トアリ」
 〔天正十一年十一月十八日醍醐御使僧宝寿坊法印への御證文也〕
〔御譜中未カキ〕

爲上醍醐寺御使僧、適雖有下着、領國之兵革依念劇、相
 似疎遠背本懷畢、併至向後者必可勵微志者也、仍狀如件、

1370

〔國分宮内澤氏文書〕

正宮 三社再興茶番之事

六番 朝見 朝春 十二番 俊房 助実

〔右外之人數前条名前之通故略ス〕

天正十一年 未十月十三日 永堅(花押)

右天正十一年五月六日、肥前國高來郡深江・安德之兩
 城屬于 義久公御幕下之旨、有馬氏より到來候付、自
 此方安德ニ被入守兵之時、深江依變前約、安德之守兵
 及困窮ニ候旨申來候付、 義久公同六月二日彼地ニ御
 發向之御催ニて、先達而新納刑部太夫忠堯・川上左京
 亮忠堅江人衆少々相添被差越候処、味方得利之由捷書
 到來候ニ付、 義久公被止御出陳、田賦每十五町定勇
 士老人、援兵を有馬江被相渡候時之盛ニ而、
 〔御譜中ニ有之〕

天正拾一年十一月黃鐘十八日

義久

宝壽坊法印

1372

「義久公御譜中」

相良四郎太郎忠房聞義久之不例、畏爲重病之餘、已所以連歌一萬句興行之爲立願也、於茲乎、將遂成就、令深水三河守請上井伊勢守之在八代運籌策遣櫻題作發句、實天正十一年十一月十八日也、

同月廿日、隈本守將北郷彈正忠忠虎遣价使於八代曰、此之間運計策、將教内空閑下野守屬薩摩旗下、下野守諾曰、發軍之時得其佳期、宜遂其事也、我將聞此言報曰、再差人於途中堅相談眞僞、而後可言成否矣、

1373

「上井伊勢守覺兼日記」

天正十一癸未五月ヨリ十一月卅日ニ至ル

一廿五日、看經等如恒、桑幡殿へ食寄合候、頓而未刻計、紫波洲崎へ越候するとして、打立被成候、雖然酩酊候て、路次歩行難成候而、柏田別當処へ憩被成候て、其夜者彼等か宿へ留也、頻ニ又城へ登之由再三申候へ共、沈醉にて左様之返事さへ然々無之跡也、此日茂諸所へ續

之儀等申濟候、醫者三官來候也、

一廿六日、拙者氣分惡候通 上聞候て、三官養性之爲とて御越なさる、忝御事共也、然者此朝脉診候、先日於鹿兒島養性之時分ニ無相替事候、併三焦之脉少替候、菟角脾胃之惱之由申候也、先々此朝より三日之服藥給候、嚙而朝食拙者相伴にて三官へ寄合候、

一廿七日、諸篇如恒、平田狩野介鹿兒島へ頃被參候、然を拙者又中書公(家久)へ爲御使蒙仰候、趣者、先刻有馬境及難儀之由候間、來月二日可爲 御進發相定候処、此節者彼表も勝利耳之由候間、此度御發足へ指延候、然者境目へ從所々十五町ニ人跡一人宛被仰付、有馬へ御渡

海之御談合相定候、如其日州兩院可申付之由也、拙者當時養性最中候条、諸方へ申渡事銘々難成候へ、佐土原よりも寄々被仰渡候て可然之 上意也、則諸所へ申濟候、佐土原よりも被仰濟候而肝要之由、使者にて申候、彼方も其御校量候由也、狩野介殿・柏原將(有閑)へ頼候て会尺申候、拙者見參へ不仕候、此日嶽米良殿(重徳)被來候、かこ嶋へ御無沙汰申候間、祇候之覚悟候、然處此方にて續之儀被聞付候、如何之由也、先々かこ嶋へ御不參候共、續之事肝要之由申候也、此日三官終日養

性之儀等承候也、

一廿八日、看經等如恒、御崎寺越候て、講讀常之ことく被成候、富田大官司養性最中無沙汰申候とて、上樽一持參申候、野村安房介よりも無沙汰候とて使遣候、御酒持せ候也、此日清武より使也、遊行御調之儀、又續之儀、兩方難成候由侘也、いづれもかこしまより御盛にて被仰候条、拙者養性最中と申、鹿へ被伺候て可然之由、柏將にて返事申候、去廿二日より、於鹿兒嶋万座之御祈禱候、就調儀、山本備前拯・鎌田刑部左衛門尉殿迄指進之候、是も三官同日歸候、又上野弥左衛門尉へ御細工之儀被仰付候間、彼者備前へ同前ニ御側衆迄參せ候、然者彼者も御細工之儀委承、備前同心ニ罷歸候、今日吉日之間、御細工させはしめ候、御腰物御秘藏之千代鶴也、御鏝之儀被仰付候也、此日ハ諸細工等見候て暮し候、

一廿九日、如恒、掃地・普請各へさせ候、此朝三官拙者脉取候、可然様申候、従夫一七日之藥くれ候、受用申候也、此日茶湯的也、敷根越中守の前也、乗物にて罷下見物仕候、

六月

一朔日、看經讀經等如常、衆中各出仕共候、見參仕候也、

折宇迫一圓ニ當年魚を不取候条、海人其外下ニ迷惑之由申候、然者彼処天神御立被成候、是に祈念等申候へハ必魚を取よし、下ニ申散通聞付候間、讀經共仕候て、其因和歌二首奉獻候、なへて世を救はんとしてハ魚にたになれるを神のこゝろとぞ聞、又天滿る神に任て曳やせん朝夕しほの網のうけ繩、如此詠し候て、明後日三日、御神樂可申之由祈念申候、短冊之下繪、前ハ松に歸帆の躰候、即彼処ノ景氣候、後ハ波にうけ繩にて候間、驪而それを題として連ね候、寔ニ神慮もかたはらいたくそおほしめし候はんすらんと大笑共仕候、此日杉山新左衛門尉座敷之壁塗果候て、暇申候て歸候、辛勞申候と申、百疋遣候て歸候也、

一 二日、如恒、從都於郡來候番匠柿置飛彈拯暇乞候て歸候、此日も造作共見候て暮し候、三官ニ少ニ醫方とも習候也、

一 三日、毘沙門於寶前法花讀誦仕候、聽而堂參衆へ茶湯にて会尺共申、雜話共也、此晚天氣能候て、江田ニ網舟可出之由申候間、餘ニ養性時分然と計居候条、そと慰ニ下候て可然之由三官申候間、新別符迄くたり候、

谷口和泉拯処ニ留候、(鎌田兼政)・上井右・同名神九郎同心

申候、三官も同心候、亭主種々會尺仕候、深行迄難談

共也、和泉次男ニ名所望候間、与一と付候、將又此日

從恭安齋、(上井兼兼)安樂安波介を以蒙仰候、趣者、一兩日已前

阿波介を以拙者申入候条々、具被聞せ候、尤病中と申、

彼は世間之爲躰存分共候て、加判役御侘之儀候欤、肝

要之由候也、菟角拙者校量次第之通被仰候也、

一四日、江田・新別符之漁船悉出候、我々も柏將・野村(伊原有國)

大炊助など被來候、其外衆中多々同心にて濱邊ニ打出、

渚ニ魚共曳寄せ候を見申慰候、夫より又谷口處へ歸候

て、服藥共仕候、亦亭主種々振舞候也、此日上井次郎(秀秋)

左衛門尉殿へ一ヶ条かこしまへ御侘申上候通談合之

爲、山本備前拯遣候、歸候て來候間、意趣承候、彼方

も拙者申処、病中と申、尤之儀之由被申候也、此晚江

田大宮司呼候まゝ、彼処にて種々會尺共候也、夜入候

て、各同道にて歸宅仕候也、

一五日、如恒、三官當年中之拙者藥調合申候するとして、

廿人計にて藥種茶柏にて曳せ候、夫を見申候也、此日

三官へ内山へ野村殿(文德)よはれ候として、一夜留として越候、

此晚坪弓場にて暮的共也、平田新四郎殿拙者氣分之由(増志)

聞せられ候として御越也、直ニ拙宿へ御座候へと申候へ

共、炎天故氣色悪候由候て、小宿へ御座候、加治木但

馬拯にて、御越祝着之由申候也、彼方よりも隈本主馬

首使として預候、御酒振舞候也、(平田光宗・藏宗)濃州御父子より之傳

言等委承候、

一六日、如恒、平田新四郎殿御出也、先拙者夫婦罷出、

三献參會候、其後衆中なとあまた被指出候て、雜談共

也、饗而食出來候間參會候、座之躰客居新四郎殿・敷

越・長談・隈本主馬首、主居拙者・柏將・鎌源也、新

四郎殿より樽一ヶ并肴種々預候、三返めに給候、平田

殿酌被成候也、夫より拙者も即酌申候、種々肴にて數

篇之御酒也、其後各遠亭ニ憩なされ候、此日金剛寺・

鎌田源左衛門尉殿、拙者加判役侘之儀ニ付而、兩使進

上申候也、条々存分共申上候、追而落着之刻可書載候

也、此日未之刻計風呂燒せ、新四郎殿入申候、人衆も

今朝之衆也、皆々直ニ被居候、風呂過候て點心參會、

種々肴にて終日御酒・茶など也、一碟此日御迎來候間、

新四郎殿へ御見參候てより、紫波洲崎のことく御歸輿

也、新四郎殿を以御傳言として、上意之趣、永々不例

氣笑止ニ被思召候、然者養生のため、三官被仰付被指

遣候、頃氣色等如何候哉、(義久) 大守様御氣分も旧冬已來

御藥なとあまたニ被聞召候へ共、無其効候、種々御祈禱・御立願などにて、于今御平噓候、吾々事も何たる

祈禱・立願なとをも申候て肝要之由也、寔々身ニ餘忝上意、無申計候、此夕めしも參會申候、拙宿へ此夜御留也、深行まで雑話共也、

一七日、如恒、衆中なと新四郎殿御越とて被指出候也、

本庄八幡之財林坊、新四郎殿・拙者にも御酒もたせ被來候也、此日平田殿同心申、川遊ニ下候、川之邊にて爰かしこにて御酒・茶湯なとにて慰候、此晚名手之八幡之下ニ棧敷を被構、衆中坂迎也、食過候へハ種々之肴共參候て、數返之御酒也、其後夜入候て各罷歸候也、

一八日、藥師如來へ看經・堂參等如常、新四郎殿御会尺ニ的也、弓數卅張計候、終日御酒・茶湯にて之的也、

一九日、如恒、此日例之茶的也、和田江左衛門尉の前也、平田殿も被射候、爰かしこより御酒なと參候て種々慰共也、

一十日、如恒、金剛寺・鎌源かこしまへ參せ候、定而今日者訴訟之儀共披露も哉と存候て、心易を以占候て見候、本卦地雷復卦にて候、變卦震卦、互卦重坤にて候、

可然占さうに候条、頼母敷存候、此日新四郎殿歸被成

候、三官も歸候、遠方へ來候礼儀迄ニ、脇刀一遣候、鎌倉にて候、藥之礼物等者銀子遣候也、此終日細工なと見候、

一此日、吉利殿より其後氣分如何候哉とて、使節預候、

瓜過分ニ預候也、又連歌百韻并抜句少々見候て進入申候へと候て持せられ候、抜句ハ即時ニ見候て、愚存共細々書付進之候也、百韻ハ追而可進入之由申候也、

一十一日、如常、柏田八龍にて竹筵山衆雨戀被成、終日大雨にて候、諸人大慶不可過之候、五月一日比より爰迄、一日も雨不降候也、

一十二日、如恒、藥師へ讀經等別而仕候、并竹篠藥師へ參候、從夫大門坊にて終日雜談申候、種々会尺共也、將基なと也、又釈門院、宇治茶・竹田之牛黃圓二貝持

せ候て被來、万事京邊・高野邊之事共咄にて候、西方院も御酒持せ來儀候て雑話共也、申刻計罷歸候、坪弓場にて若衆共的射候、見候也、此日より服樂仕也、

一十三日、如常、鹿兒嶋へ奥右京亮使者として進上仕候、趣者、(義久) 大中様御法事ニ頃者御取乱、推量令申候、尤(伊集院) 祇候可申候へ共、養性時分無是非候、先刻忠棟より書

状を以、鹿兒嶋當分御酒払底候、然者樽五十程爰元より調儀申候て進之候へと承候、諸所尋させ候へ共、當國も拂底候間、漸樽廿、拙者私ニ進上申候也、此晚も細工又ハ暮的なと射させ候て、見申慰候、茶湯など、將基などにて、徒ニ日を暮し候、

一十四日、如恒、此日も番匠・金細工・刀輪細工・塗物師など、種々させ候て見申候、鉄放臺就中拙者見候て、申付候也、一昨日江田ニ盗人候、即知候間、沙汰人等分別にて、押懸成敗申候すると仕候へハ落失候由、昨日申候間、寺田壹岐守・谷山仲左衛門尉・山本備前守(兼)差仕候、日記共付候て來候、村尾越後之百性轟隼人佑家景之者也、兩盗人之妻子・馬など候也、當毛上之事も、領主之格護之処者、不及是非候、盗人之格護申候分、同賣地等候へ、役処ニ可収候間、堅固ニ其糺可仕之由、轟隼人佑へ申付、歸候也、此朝、今晚相手振舞之暮の射候するとて、若衆中此方にて引合、鬪共被成候、其砌、報恩寺御酒持參候間、各參會賞翫仕候、此日、日曳之口弓場にて、終目的也、相手振舞にて候間、各思々之环肴・珍酒共にて慰也、此晚金剛寺・鎌源歸也、拙者棧敷にて御意趣承候也、永々養生氣候、

併三官御遣被成候、左様之養生故、頃者少能候哉、肝要ニ被 思食候、然者、連々加判役御侘之儀存候欤、殊更病中と申、又ハ伊勢・熊野など參詣立願成就之爲、又ハ當時御恩にて拙者身上者十分候、ケ様之儀など病中ニ存候へハ、役など被召上候てこそ、鬪申様に候て、拙者身上も安全ニ候するかとの御侘、具被 聞召候、病中之御侘にて候間、何と様にも氣法第之由可被 仰出候へ共、又御存分共被 仰聞候へてハの事にて候間、委被仰聞せ候、就病氣ニ役之侘申候、尤候、併役人にて何と様に罷成候共、是も無是非候、立願成就之儀、是又加判役にて上落之衆餘多候、然者時儀等難成者、私之事候、又加判役御侘申、天道十分之儀を闕せ申候すると分別申候欤、是者、上様之御校量にハ、今分之上にも一入御奉公ニ精を入申候て、心遣など仕候てこそ、天道にハ叶へく候、結局、役等御措なされ悠々と罷居候てハ、天道に叶ましく被 思召、殊ニ日州之事、別而御頼被成被召移候間、今分御侘之様子迄にて、役を御措なされ候する儀者、曾以御得心ニ參候ハぬよしの御返事也、爰にて、兩使前より、拙者先日申含候之条、御寄合中迄申され事に、御返事、条々尤奉

存候、併伊勢守役之御佐を申、十分を闕し候すると被
 存候処ハ、如仰一途御奉公ニ罷成校量共候ハ、不及
 是非候、當時遠方ニ罷移候間、各寄合中朝夕之御奉公
 も同前ならず候、又ハ諸篇御覽等も、得心ニ參候事も、
 又不參儀も、一言申上事無之候て、役人之名計借候て、
 世上之人よりハ賞翫共被申候、御恩澤深までにてハ、
 更ニ天道恐敷存候、爰をかゝし申度存分にて候間、此
 条今一ヶ条御申頼存由被申候、寄合中、此道理委被聞
 せ候、併直ニ御返事之上を、兩使前より伊勢存分共被
 申分候する儀者、指過も説候すらん、先々歸候て、拙
 者へ御返事之旨被申聞、追而存分共候ハ、平噓次第
 自身參上候て御佐肝要之由、御寄合中承間、其上ハ不
 及力、兩使歸之由也、鹿兒嶋にて御使者、税所新介殿・
 伊地知伯嚙守殿也、御意趣承果候て、金剛寺ニ、棧敷
 にて御酒數返參会申候也、暮候て弓場より歸候也、
 一十五日、看經・讀經等如恒、衆中各被指出候、見參申
 候、老者などハ茶など參會候也、
 一十六日、如恒、此日相手振舞之暮的也、種々酒肴にて
 慰にて候、從佐土原、來廿三日御態被成候之由也、并
 借物等被成候、

一十七日、如常、金剛寺鹿兒嶋へ辛勞被成候間、鎌源頼
 候て礼ニ進之候也、此日上野弥左衛門尉御細工いか様
 に仕候哉、持來候へと申候間、御鎧持來候、宜かりさ
 うに見得候、懸而出來候する由申候也、あまり日々炎
 天に辛勞申候間、そと慰候へと申候て、終日茶湯・御
 酒、又ハ碁にて遊候、

一十八日、觀世音へ別而讀經等申候、其後堂參申候、そ
 れより鎌源坂迎にて候、彼方にて野村大炊兵衛尉など
 良久雜談など仕候、此日佐土原へ加治木雅樂助を以申
 入候、一兩日前預御使者候、忝令存候、殊來廿三日、
 大中様爲御法事、御態なされ候哉、就其新納殿其外寄
 く地頭など、御態之御人數ニ被參之由蒙仰候、肝要候、
 早く敷此等之儀承付候ハ、此方若衆など申付、祇候
 申させ候する物をと申候、付而ハ、御曹子被遊候す
 る哉、然者、鞍之儀承候、拙者當時不所持候、併可然
 皮一丁所持候間、進入申候、於御所好者可目出候、并
 刀之事被仰候、見苦候へとも、大刀・脇刀二十柄借進
 覽候由申候也、此日新納四郎殿、久無沙汰被成候、頃
 氣分等いか候哉之由候て、入御候也、懸而申請、素
 麵參會候、座躰客居新納殿、次敷祢越中守、次御供衆

・御同名衆也、主居拙者、次鎌源也、種々着にて御酒參候也、三献め御持せ之御酒給候、やかて御酌なされ候、我等も御酌申候也、長々御雜談共にて御歸候也、

此晚鹿兒嶋へ上候奥右京亮罷歸候也、御法事時分、御酒払底候処、樽十荷進上申候、御祝着之由也、忠棟より別而御礼書狀にて承候、加治木雅樂助從佐土原歸候、御用等被仰候之処、早々敷持せ進入申候、御祝着之由也、前刻之御使者矢上彈正忠、意趣被聞候由也、一十九日、念仏等如常、例之掃地・普請等させ候也、此日、茶湯的也、弓敷五十張計候、終日慰候、弓不叶之衆者碁・將碁にて候、忠棟より之書狀、曾井へ持せ候也、

一廿日、如常、終日細工など見候、又碁・將碁にて候也、一廿一日、念仏等如恒、夕北之方より此役所へ、火玉なと世話に申候物飛來候由下々申候間、占候て見申候、本卦火山旅、變卦火地晋にて候、卯刻占候也、一定火之占見得候間、即西方院へ、違候て可給之由申候也、未刻計西方院より恠違之札預候也、

一廿二日、祈念等如常、瓜生野へ、馬之湯洗させ候て見申二罷下候、八郎左衛門尉種々會尺共申候也、其後金

剛寺へ、先日鹿兒嶋へ辛勞候礼ニ參候、風呂焼せられ候て、其後茶湯などにて種々會尺被成候、夜深候て罷歸候也、

一廿三日、佐土原於大中寺、十三廻之爲法事、御能させられ候由候間、早且打立、見物ニ罷越候、弓削太郎左衛門尉へ宿仕候、朝食被振舞候、其後茶湯にて種々會尺也、未之刻計能始候、中書公御座候処へ可罷出候へとも、養性氣未然々候間申分、私之棧敷へ罷居候、然処中書公より長野下総守御使にて、罷越たる由承候、其上食籠着にて樽一荷預候、中書見物被成候所より拙者も見物申候へかすと頻ニ被仰候すれ共、養性時分之由候間、難被仰候、併參候へかしの承事也、如此候間、私棧敷より見物申候へ、餘々緩怠之様に候条、長総へ打烈、中書公御座候処へ罷出候、食籠着にて樽一荷進入申候也、中書御座候処より見物衆、大中寺之東堂・其外諸出家衆・吉利繪州・比志嶋彦太郎殿・鎌田筑前守殿・山田新介殿、此等之衆也、各々御酒共被進せ候也、狂言之砌、銘々ニ持參候也、能數、葛城・道盛・井筒・西王母・五条・夕顔・當广寺・朝貞・自然居士・百萬・田村、此等也、中書御子息御兄弟、能

させられ候、鞍・大鞍なと被遊候也、新納四郎殿も、

鞍・大鞍うたせられ候也、吉利山城守殿・平田新左衛門尉殿なと、大夫かたなと一番せられ候、漸御能薄暮

ニ事果候、其後宿へ罷歸候て調候砌、中書公より御使

也、見物ニ罷越候、炎天と申、一入大儀之由被仰候、

明朝御城へ可參之由承候也、御使忝存候、無仰候共明

且可罷出処にて候へ共、養性時分故障之儀申分、此夜

罷歸候、本田治部少輔・柏原左近將監同道申候也、輿

之上にて讀經なと仕、新名爪にて月待取候て、歸宅仕

候也、此日より和田口直し候普請也、

一廿四日、地藏菩薩へ別而看經共仕候、此日瓜生野天神

之弓場にて振舞の也、夜入候て罷歸候、種々酒肴也、

一廿五日、天神ニ別而看經共仕候、此朝從宇治藤村堪丞、

太守様へ御茶爲進上被參候、爰元路次之条、拙者へ爲

一礼被來候、別儀五袋持來候、即見參仕、御酒寄合候

也、拙者道具共懇望之間、數種見せ候、其後持せ之茶

賞訖申候、躡而藤村堪丞茶湯仕懸候て、持來之茶被立

候、大乘坊・鎌源・拙者、座ニ付候て吞候、乍勿論無

是非候、金細工、是も同道にて下候とて來候、見參仕

候、扇子・帶一筋くれ候、此晚目曳之口弓場にて、昨

日瓜生野にての之返報也、

一廿六日、如恒、堪丞又來候、無上二袋持せ候、終日茶

湯ニ而雜談共申候、今夜拙宿へ堪丞留候而、又々茶湯

なと也、

一廿七日、如常、此朝又、堪丞へ茶湯会尺仕候也、此日

例之茶の也、勘丞路次之曳付之狀、又ハ鹿兒嶋へも寄

合中へ引付之一通認候也、泉長坊へ皆々渡候也、此日

前日大口へ新納武州へ、子息刑部大輔殿於有馬慮外ニ

戰死之由聞得候之通、笑止之儀、寺田壹岐守を以申候、

彼仁被歸候、一定之由也、此日和田口普請上候也、

一廿八日、看經等別而仕候、勘丞田野まで送候也、此日

もの也、

一廿九日、如恒、奈古おはらひ田、此二三年、我々最前

然々不承取、門廻之様ニ定候処、六ヶ敷被申儀共出來

候、就其委承候へハ、百年已來者地頭格護候処之由候

間、從爰地頭進退之儀相定候也、

一卅日、如常、奈古八幡・瓜生野八幡夏越之御祭礼也、

名代等申付社參也、穗村住吉御祭礼也、并御遷宮榎打

也、大工安藤土佐守也、種々遷宮之規式、日記を以申候へ共、此等之脇々之遷宮を、さ様にハ成まじき事候

条、堅申請候て、如形之様子也、鳥三百疋計之校量に

て、凡事成候也、此日紫波洲崎へ恭安へ、御無沙汰申

候間參候、同心衆、鎌源・敷越・柏將・長淡・関右・

弓申申斐守・堀四郎左衛門尉・野村大炊兵衛尉也、此晚

内城にて各へ御会尺也、種々酒肴也、拙者も御酒持せ
候也、

七月

一 一日、看經等別而仕候、紫波洲崎弓場にて弓之事也、

宮崎より同心衆談合を以、地下衆へ振舞の也、酒飯に
て終日之慰也、弓數六十張計也、

一 二日、如恒、昨日之的之返報也、此朝先中城にて御振

舞也、同心衆も皆々被召寄候也、從夫弓場へ各罷出候、

二立・三立仕候処、雨降來候、それより弓場近風呂候

間、燒せ候て各入候、兒玉隠岐守処にて、各校量にて

終日会尺也、衆中達も同前、

一 三日、毘沙門へ讀經等別而申候、此日海江田御伊勢之

弓場にて、加江田衆弓之事也、衆中同心にて、彼方へ

行候而、終日之的也、酒飯種々之会尺也、圓福寺・木

花寺など御酒など預候也、弓數八十張計候也、

一 四日、如恒、同前弓場にて、紫波洲崎衆弓之事仕候、

恭安も御下候也、是も酒飯にて終日之会尺也、

一 五日、如常、肝付彈正忠殿より、久無沙汰被成候とて

使也、酒肴送預候也、使へ、遠方まで辛勞申候とて、

片衣遣候也、此日鹿兒嶋へ人遣候、伊地知伯州・税所

新介殿・阿多掃部助殿、當年御頭前にて候間、鮑五十

宛持せ進之候也、藤村勘丞・三官などへも、鮑持せ音

信仕候、此日番の也、上井神次、茶湯前にて種々之儀

也、

一 六日、如恒、此朝木花寺より被召寄候、柏原將・長野

淡・野村大・堀四郎・弓削申同心申候、種々之会尺也、

點心過候へへ、宮崎之ことく同心衆者被歸候也、敷越

ハ此早旦歸候也、鎌源者昨日歸也、此晚もの仕候、寺

田談路守酒肴持來候也、

一 七日、如常、吉日にて候間、當所古城可然在処にて候

候、爰より城ニ構させ、人數を可召置存候間、登候て

委見申候、安樂阿波介所にて先三献也、其後食調儀候

て、種々会尺共也、罷歸候て、伊勢御祭礼共拜候也、

其後番的也、上井支番助茶湯前也、種々之儀共也、此

夜圓福寺へ參候、御物語等承候て、此夜留候也、此夜

清武より佐多紀伊介・有田大炊左衛門尉、爰元へ逗留

候とて被來候也、

此日ノ歌、市來野川原毛ニ乘來候まゝ、旅ながら休むけふのミ七夕にかさなん天の川原毛の駒、又誹諧ニ、かさはやもかひこそなけれ七夕に旅の衣の着替あらねハ、と、かく申候て戲候也、

一八日、早且より朝狩ニ罷出候、猪見得候つれとも、仕合惡候て、各射外候也、此歸さ、圓福寺より可參之由候て參候、御時御振舞也、夫より閑談也、從鹿兒嶋書狀到來候、頃八城表へ、寄合中一人廿日比可罷立之由

被仰出候、然者大方拙者番前之様に候条、不例氣快氣候ハ、可罷立之由也、尤御意次第可罷立之処、永々所勞故、遠路之儀、今月中ハ成間敷候、八九月御番之事者、閉目可申由返事申候也、并御会所作之材木之事、皆々慣たるへく候、然間、爰元へ可申付之由候て、切

符持せ給候、將亦拙者鹿兒嶋かり屋飛脚使之事、可被差置之由兼日申候間、當時其分候、頃御親類中又者歴々御不審被成候条、如何可有候哉之由承候也、當者左様に候哉、拙者一身ニ御用候て書狀預候事者、稀ニこそ候へ、大略日州中へ被仰付儀耳候、然を然を拙者かり屋一人にて持來候する事者成ましく候、誰人此類候

ハ、其同前たるへく候哉、併參上之刻委可申由、返事申候也、曾井・穆佐へ被遣候御狀、則もたせ候也、此晩宇治茶各へ振舞候也、其砌田秀庵・神護寺、食籠着にて御酒預候也、又渡川殿、遙久無沙汰候とて被來候、鹿皮被持せ候也、

一九日、如常、若衆共朝の仕候間、見申候、此日安樂長門守番の前にて候、種々振舞也、爰かしこより御酒なと到來候て、終日慰候、此夜祖三寺へ參候、種々會尺共候て閑談也、此夜ハ彼方へ留候、

一十日、如常、祖三寺朝食振舞也、種々會尺にて雜談共也、此日隈江右京亮の前也、種々振舞也、猿渡大煩助殿・柏原左近將監殿・関右京亮殿、拙者へ用段候て、宮崎より被越候、棧敷にて參會、終日御酒なと也、此日加治木雅樂助かこしまより罷歸候、先刻各へ看進之候返狀等持來候、忠棟より書狀預候、八城主取之儀、

平田殿相定被成候、然共、今月中ハ伊集院之御頭前にて、彼方へ隙入候、來月ハ早々越着之由候、當時彼表爲見舞、拙者可罷立之通也、又かこしま御祭礼ニ、二町來通鳥帽子上下にて祇候之由、兩院中へ可申渡之由也、又宮崎へ候御伊勢領之事、當毛見舞、西侯七郎左

衛門尉、又拙者暖之衆中一人申付候へと承候也、

一十一日、如常、上原長門守殿より、^(尚也) 飢肥衆中上野壹岐

守を以承候、此度鹿兒嶋へ御談合候、拙者養性氣に候之間、不被召寄候、然者、御談合之趣、具ニ御寄合中

より右之使を以可申之由候間、其分之通也、御談合之趣、八月入候者、必々肥州表へ御發足たるへく候、然

者日州衆之事者、^(家久) 中書公御手にて有へき由也、兵船・

無足衆等涯分進可申之旨也、二町衆通ハ自分立、一町衆者二人被組候て可被立候、弓・手火矢馳走、此外諸

条如常、御働日限、御行等者、追而可被仰渡之由也、大略御行へ肥州表之當作させられへき由也、有馬口な

と、被申候衆も有之由也、意趣委承候て、御酒寄合候て、使歸し申候、此日紫波洲城のことく衆中な同道

にて罷登候、然處、幸若弥左衛門尉父子來候、かり屋へ宿申付候、此晚拙者宿へ召寄、振舞候、御酒之刻、

一曲乍居申候、御酒數篇過候て、宇治茶など寄合、深更まで雜談共仕候也、

一十二日、藥師へ讀經等別而申候、此日御崎寺より、幸若召烈可參之儀承候間參候、朝食振舞也、其後一曲申

候、先笛之卷・鎌足太職官、此等也、舞過候て、點心

にて御酒數返參候、種々乱酒也、拙者前より太夫へ三百疋遣候、

一十三日、如常、幸若、清武のことく行へき由申候間、其分候、打立候時分、拙者麗へ罷下候て、青嶋へ召烈

候、鮑取せ候て見せ候、彼方にて食候て、あふひ各賞斷共申候、御酒數返也、其後茶湯にて閑談共候、其後

暇乞候て、幸若ハ清武のことく行、宮崎衆中も直ニ被歸候、拙者ハ直ニ海江田へ番的候間、彼方へ越候、安

樂阿波介の前にて、種々振舞候、殊之外慰申候也、一十四日、如例、從恭安様加治木伊与介を以、今日も爰

元的之儀ニ逗留申候欤、天氣悪候間、城へ罷登候て可然之由被仰候、天氣悪候ハ、可任御意之由申候也、

圓福寺より施餓鬼之御酒とて預候也、終日各御酒なと持來候とて、雜談共也、此日清武・田野へ、安田主馬

首を以、來月入候て御出勢之儀、又御祭礼御供之事申候、兩所共ニ被得其心之由也、

一十五日、看經等如恒、各御酒なと持參申候、いづれも祇候申候也、此日城へ可參打立、中途まで指出候へ共、

雨不艶降來候間、使を登せ候て留候、此夜折字迫衆踊候て皆々來候也、

一十六日、如恒、市成掃部兵衛尉殿宮崎へ被越候、此方

候て苦勞いたし、歸着候也、

へ拙者罷居候とて被來候、忠棟より傳言共承候也、此日可罷歸覚悟に候つれ共、恭安より今日へ打立申ましき由候間、加江田へ留候、然に圓福寺・木花寺・祖三寺、其外諸出家衆、拙者逗留申候間、弓之事興行之由候而、的にて候、酉刻計より大雨・大風にて候、然間、御伊勢の拜殿にて、酒飯にて終日酒宴にて候、此夜殊

一廿日、罷歸候とて、衆中各被來候也、御酒肴など持來人も有之、穂北・本庄などより風聞承候也、曾井よりも同前、此晚若衆中踊被入候、見申候て已後、御酒振舞候也、

州被來候也、

一廿一日、如恒、

一十七日、如恒、大塩滿候ニ洪水取合候間、御伊勢之前之橋浮程候、弓場にて浪打候、ケ様之水なと見候て、終日暮し候、

一廿二日、如常、此日瓜生野天神之弓場にて的仕候、柏將・敷又・長淡・野大同心仕候、此夜瓜生野へ留候、彼方之衆寄合候て、種々會尺也、此日綾より高崎名字之使也、弓場にて見參仕、御酒寄合候也、

一十八日、此朝も水之躰共見申候、井川魚共多く御伊勢之前之田ニあかり候を人々取候、寔々過分之儀候、此等を見候て慰候、未計紫波洲崎へ罷登候て、大風・洪水之儀共申上候、殊之外御會尺にて候、此晚如加江田罷歸候、暮候に雨つよく降候間、内山之庵ニ留候、種々會尺共也、

一廿三日、各朝的仕候、從夫宮之前弓場にて的可仕之由、各申候也、八郎左衛門尉処にて、先會尺也、其後弓場ニ行候而、終日的也、彼あたり之衆殊之外會尺共也、竹筵衆など見物共なされ候、的過候へ者、西方院參候て、彼御坊にて月待候へと承候間、參し候、種々會尺なり、終夜磐上などにて、月待取候てより歸宅申候、此日從都於郡兩使被來候也、

一十九日、亭主之振舞也、祖三寺相伴ニ被來候、種々會尺也、此日如宮崎市成殿同道にて罷歸候、中途川深く

一廿四日、地藏菩薩へ別而讀經共仕候、此日八木越後守殿、今月中縣へ越候て逗留候、歸之由候て被來候砌、遊行上人當時福嶋へ滞留候、然者、此月末飢肥へ被越、

それより當國へ御座候する間、案内承由候て、二之寮使僧ニ預候、聽而參會仕候、上人より段子一端・扇一本預候、使僧より小刀一・扇相添候、即會尺仕候、座躰客居使僧、次ニ伴兩人、其次當所之師阿、主居拙者、次八木越、次柏原將也、着ニ冷麵參會候、種々肴にて御酒參相候、八木越持參など酌被申候、閑談にて酒宴也、使僧宿へ柏將にて礼申候也、此晚市成殿へ茶湯にて寄合候、野村大炊兵衛尉同前、

一廿五日、如常、かこ嶋御祭礼御供ニ衆中參せ候間、暇乞共申候、又御用等之意趣共申候也、此日去十五、從海江田かこ嶋へ參せ候書狀之返書到來候、洪水故往返遅候也、去十七日、鹿兒嶋へ大風吹候、然者、殿中御亭を始、悉吹損し候、下々屋宅等者不申及之由候、御祭礼御社參も、騎馬など當年ハ難有候、然間、爰元より之御供衆入間敷之由也、依夫今朝被打立候衆中、皆々田野より被歸候也、

一廿六日、弓場、朝普請させ候、然處、大乘坊被來候て、住吉社作候、遷宮已後拙者未參候間、參候て見可申之由候、題目彼処弓場普請共候間、的可仕之由也、尤可然之由申候、此晚穗村へ罷下候、衆中十人計同心申候、

彼方衆中、又拙者悴者合而弓數五十張はかり候、大乘坊種々會尺也、今夜者彼宿へ留候、終夜會尺共也、

一廿七日、大乘坊粥振舞也、其後瀬戸山大藏兵衛尉所へ行候、種々會尺也、從夫沙汰寺之弓場にて的仕候、坊主被出合、終日會尺、種々之儀也、此夜ハ瀬戸山所へ留候、夜もすから酒宴也、此日八朔爲御祝言使節進上申候也、

一廿八日、池田志广拯會尺仕候、從夫城のことく歸候也、此日衆中名々之人勢揃候て普請也、和田口之道留候之普請也、此日吉利山城守殿鹿兒嶋へ參なされ候ニ、寄合中より御傳言候とて御座候、趣者、御出勢之儀御鬪下候条、一定來月中旬之比ハ、御進發可被成之由也、次ニ者、此度大風ニ殿中御主殿悉損候、遠殿上葺當國より可仕之由也、御酒參會候也、

一廿九日、如常、茶の也、下候而仕候、長野談路守茶湯前也、

八月

一朔日、如常、衆中各被來候、御酒など預人數も有之、皆御酒參會候、寺社家衆も礼儀被成候、箒・茶など預候、銘々ニ御酒參會候、衆中征矢竹尻田數次第進上也、

此日從柏田町踊來候、并風流共種々候也、

一二日、如恒、續衆なと書立候て、兒玉隠岐拯來候間、

加江田衆へ申付候、此晚忠棟(伊集院)・親貞(本田)よりの御狀、野尻

傳ニ到來候、趣者、來十日比佐敷表へ兵船可相揃儀定

候、然者、拙者彼表へ十日より内罷越候て可然候、様

子ハ肥後堺目當稻可被拂せ候、又ハ田尻番替たるへき

の由也、此等之儀拙者罷越候て、悉皆下知御憑之由也、

一三日、如恒、腫物氣散々候之間、看經なと不仕候、衆

中各へ番立之談合共申候也、此日茶的也、閑治部少輔

前にて候、可罷下之由候条、其分にて終日慰候、此日

拙者船作せ候、つゝ立候祝とて、加治木但馬拯紫波洲

崎へ越候也、此日金剛寺御上候、八朔礼儀とて、御酒

なと被持せ候、

一四日、如常、茶湯にて若衆達寄合、閑談共候、從夫麓

へ罷下、暮の射候て慰候也、

一五日、如常、茶湯的也、弓削甲斐介の前にて候、罷下

候て終日慰候也、

一六日、如常、御会所之材木皆同櫓たるへき由候間、三

城・高城・財部・穗北・都於郡、此五ヶ処寄々候之条

盛候也、此日八朔御祝言ニ進上申候谷山志介罷歸候、

鹿兒嶋大風以之外之由申候、然者殿中悉損候間、御主

殿葺板・針之儀、當國へも被仰付候、一町ニ板十二枚

・針十二宛也、即所々へ申渡候、此度大風ニかこしま

内ニ死人七八人も有由申候、其外かたハに成候物多々

有由申候、是程之風を覚たる者無之由也、御寄合中よ

り承候、有馬表へ中書公御渡海可有之通被仰候、然者

拙者も御憑之由也、中書公當時串木野へ御座候間、彼

方へ先々被仰候て、御領掌ならハ、追而日限此方へハ

可被仰越之由也、かこしま假屋も、屋作餘多損候とて

來候也、

一七日、如恒、(船原有越)柏將・長談・野大終日雜談共也、今日拙

者各へ振舞的射させ候する覚悟候処、天氣散々候て、

無其儀候、先々其御酒右之衆試有へき由申候て、參會

候也、左候て閑談也、此日諸所へ御主殿上葺之板切符

遣候也、

一八日、如恒、此日も天氣惡候て、的者無之候、此日佐

土原へ岩崎刑部少輔にて、中書公有馬へ御渡海之由候

欵、然者、拙者御供之由、かこしまより承候、定而其

方へも聞え候哉如何之由、有川一閑齋まで尋申候、此

晚岩刑被歸候、長野下総介八朔ニかこしまへ被參候、

從夫串木野へ被參候へ共、去四日まで、左様之儀、彼方へも御承候へぬ由也、

一九日、如常、拙者衆中への射させ申候、海江田よりも廿人計召寄候、都合弓數百張計候、酒飯にて終日慰也、

夜入候てより棧敷にて乱舞也、殊之外酒宴共也、此日四半加治木宮内少輔仕候也、

一十日、彼岸入にて候間、讀經など別而仕候也、此日閑右京亮の前にて候、罷下仕候、終日酒肴にて種々會尺也、此日泉鏡坊四半被射候也、

一十一日、讀經等前おなし、長友左衛門尉的張行之儀申候間、瓜生野へ罷下候、宮本弓場にて終日慰候也、

酒飯にて殊之外之會尺也、金剛寺・大宮可なと御酒持せられ見物候、此日之四半、又加治木宮内少輔仕候、夜のにて種々戲候処、鹿兒嶋より之御狀、入野まで來候

由候て、吉利殿より御持せなされ候、即披見申候、趣者、最前被仰候様ニ、肥後へ御出勢之儀候、日向衆同心を以可罷立候、然者、來廿日八城へ越着肝心たるへ

き由也、それより夜の者さし置候て、各歸宿仕候、

一十二日、諸所へ使書にて續之様鉢申渡候、勿論地下衆中へも申付候、此日奈古大宮司的興行之由定候つれ共、

續之儀ニ付候而指留候、然者、海江田へ拙者罷越、續之儀等可申付所存候、左候へ、そと罷下候て御酒給、直ニ紫波洲崎へ可越之由承候間、彼方へ立寄候、種々會尺共也、其座過候て、紫波洲崎へ越候、本郷より日暮候て、漸内山ニ着候也、

一十三日、内山よりしわす崎城へ參候、折宇迫假屋迎ニ來候て、地ふくの濱に一兩日前海鹿寄候とて、それを肴にて、於中途御酒持參仕候也、それより城へ參候、

恭安種々御會尺共也、此晚折宇迫鹿藏へ呼ニ登候、鹿ニ不見合候て空歸候、内城へ留候て、心靜ニ恭安御物語承候也、

一十四日、こゝの比良へ登候て、直ニ如宮崎可罷歸之由申候て打立候処、内城・中城にて祝言之御酒共種々被下候、其上圓福寺・御崎寺酒肴被持せ、各自酌にて色々被成候間、沈醉候て、塩時なところ悪候つれ、漸此

夜内山ニ留候、然處、宮崎より奥右京亮來候、趣者、善哉坊かこ嶋より被歸候、續之趣者不相替候、併田尻

表之儀など、矢野出雲介歸候ニ聞得候、龍造寺田尻殿

へ無事之儀申懸、其分候処、江之浦柁ニ人數を差籠、

又手色如最前有へき鉢ニ見得候由也、彼は御談合共候

之欵、各寄合中一兩日中打立之由へ候へとも、五日へ
可指延候する躰に見得候通承候也、僮者、明後日十六
拙者打立可申覚悟候条、明朝宮崎へ可罷歸存候へ共、
今少續相延候へ、九平へ可登之由申候て、奥右宮崎
へかへし候、十八日ニ者必く打立候する由、衆中へも
申候也、

一十五日、内山野へ登候、是も鹿ニ不見合候、此日九比
良へ登候、此晩も鹿ニ不合候、野にて思出候、野邊の
露に月分かへる袂哉、など申候、

一十六日、此朝も野ニ登候へ共、鹿ニ不合候、此日海江
田之様ニ罷歸候、路次すから、爰かしこにて酒肴など
多々來候、祖三寺へ被召寄、種々会尺也、此夜も内山
ニ留候、

一十七日、紫波洲崎へ參候、内城にて種々御会尺也、從
夫船にて野嶋へ越候、此晩も鹿ニ不合候、野嶋へ留候
也、

一十八日、天氣惡候て、呼ニ者不登候、見籠させ候て狩
仕候、鹿一取候也、此夜如宮崎之罷歸候也、鳥之鳴候
て歸着候、

一十九日、衆中より拙者へ振舞の也、終日慰候也、

一廿日、遊行上人飢肥より都於郡へ移被成候、就其儀、
安樂阿波介飢肥へ遣候、歸候条送之儀共談合仕、諸所
へ申渡候也、乘馬八十疋・夫夫駄三百可入由也、來廿
三日、上人者飢肥より常瑠璃寺まで越山之由也、

一廿一日、肥後立之由候間、打立申候、遙久鹿兒嶋へ抵
候不申候、其上、此度御出勢御談合、養生中にて候而
不承候間、彼是如鹿參上申候也、此晩田野へ留候、宿
元へ地頭より酒肴持せられ候、

一廿二日、田野より高之牟礼へ着候、

一廿三日、高之牟礼より敷祢へ午刻時分着候、(敷祢願賀)休世齋に
て種々会尺共被成候、從夫彼方へ舟懸存候て、向嶋白
濱へ着候、彼処にて月待候、此夜、月に雲風の上なる
心かな、と仕候也、

一廿四日、殿中へ祗候申候、白濱次郎(重治)左衛門尉殿を以申
上候、趣者、此度有馬へ渡海可申之由被仰付候、然者
打立申候、春已來病中忝上意共候、其後不申上候之条、
彼是爲可申上參上申候由申候也、即 御前ニ被召出候、
此度氣分笑止之様ニ被聞召及候処、早々本腹、目出被
思召由 上意也、此日忠棟八城へ打立被成、當所衆も
少々立也、 上意ニ、中書公有馬へ御渡海之由候、然

者、拙者も渡海之儀御憑之由也、境目之儀候条、不及是非渡海可申候、併彼表御行等未定候、然者私渡海申候ても、彼方にて一途御用ニ難立存候間、誰寄合中今

一人御渡候へすへ、斟酌之由申候也、吉田作州御使也、

一廿五日、出仕如常、御月次御連歌也、進藤殿も御出座也、此日打立候する覚悟ニ候つれ共、(近衛前入)御家門様御請

共申候、進藤殿御隙入候間、明日請取可有由候促、逗

留申候、此日從醍醐寺之御使僧、先日日州通被成時分、

使僧預候ニ懇切共仕候、爲其礼儀御座候也、御酒參會

候、五大力菩薩・准胆觀音尊像預候、并宇治無上十袋

・扇子金預候也、此日當処衆各御出也、酒肴など被持

せ衆も有之、

一廿六日、御請進藤殿御宿へ持參候、御請八木越州へ憑(直臣)

候て認候、沈香六十兩進上也、進藤殿へ段子一端進之

候、御請渡申候、進藤殿御請取也、進物者加治木雅樂

助へ渡させ申候、進藤殿内衆請取也、從夫押物肴にて

御酒給候、頻ニ御礼候間、御盃拙者始候、肴など給候

て、一二返廻候、其後進藤殿盃もたせられ候て、拙者

悴者可參由候、頻辭退申候つれ共、再三承候間、同名

女番助罷出候、盃さゝせられ候て、肴をも自身被下候、

忝事共也、其後殿中へ罷出候、伊地知雅樂助息元服也、

御酒二返目ニ罷出候、持參を雅樂助息御酌被參候、御

盃、打立首途とて、拙者へ被下候、頂戴申候也、其後

御暇申退出候、未之刻計出船候、其砌、長谷場筑後守(親臣)

殿御酒預候、各暇乞ニ御座候衆ニ參會候、舟本まで各

被送候也、此晚加治木へ着候、別當ニ宿申候、躰而御

酒振舞候也、肝付藏人殿、拙者着船候とて被下候、又

彈正忠殿より使者預候、早々城へ可罷登由也、尤可參

候へ共、船ニゆられ候故にて候哉、氣分無余々候間、

明朝可參通申候て返し候也、將亦今朝有馬渡海之儀、

拙者一人へ斟酌之由被達、上聞候、御返事之趣、一人

渡海申候ても、諸下知等難閉目通尤ニ被、思召、併當

時八城見舞平田殿へ被仰付候、然者彼表之人衆被召烈、(平田光宗)

濃州も渡海之由可被仰候、然者兩人談合共仕、彼表之

事、宜様ニ御憑之由共也、此上者辭退仕ニ不及候条、

乍勿論、上意次第之由申上候也、

一廿七日、早旦肝付彈正忠殿より使者預候而、早々可罷

登之由也、躰而使者ニ打烈罷登候、即食振舞也、客居

拙者、次肝付雅樂助、次拙者悴者、主居霜臺、次柏原

左近將監、次肝付藏人也、種々肴にて御酒也、三返め(有閑)

持せ候酒參候也、肝付(兼憑)小五郎殿其外一家衆なと各被罷出、御酒也、拙者召烈候者共にも、座にて御酒給候、其後罷立候也、板井手川之邊まで、彈正忠殿送ニ御座候、御酒もたせられ、川之頭にて良久酒宴也、折節其ほとりの木の上ニ、烏の果報ノと音信候間、門出目出なと互ニ戯候て、殊之外之大酒也、従夫とうの木地藏堂ニ憩候て、茶湯させ候て、暫沈醉なと醒し候、如此共候間、漸横川町別當処ニ越着候て、此夜ハ留候、別當御酒振舞候也、此晚伊集院肥前守殿、子息を以城(久志)へ可罷登之由承候、尤可參候へ共、忠棟先ニ通にて候間、何として追付可申候条、此度ハ無礼ニ可罷過之由申候、夜入候て、伊肥御酒持せられ拙宿へ御座候、閑談共也、

一廿八日、早朝打立候、柏原左近將監殿を以、伊肥へ拙者可罷登候へ共、夜前申候ことく急候間、無礼申由申述候也、柏將、大口にて破籠之御酒なと呑候処ニ追付候也、従夫柏將、(新納忠元)新武州へ進之候也、罷通候、尤參候て刑部大夫殿戦死之已後無沙汰申候段可申候を、忠棟(新納忠元)先ニ八城へ通被成候間、拙者も急候て無其儀由申候也、此日山野へ着候、夜前夢想ニ、とにかくに頼む心に任

す也行衛もしらぬ浪の梅か香、有馬へ渡海之由共候間、彼方天神なとも、きりしたん宗とやらんニ悉破滅候候、爰より此方之衆を守護ましますへき瑞相かと、頼母數存候也、此晚新納武州より書狀并酒肴持せ預候、趣者、今日城籠罷通候事、不被知せ候て無沙汰之由也、使者寄合候て、御酒給候て、馳而捨之返事仕候也、

一廿九日、柏將、新武州之返事被仰候、彼方まで使進之候、祝着之由也、殊有馬へ渡海たるへく候哉、吾々同心可有候間、各御影を以、刑部追膳有度由也、此朝未刻計打立候、此日久木野へ着候、馳而地下へ案内者頼候て、呼ニ登候而、此夜ハ山ニ留候、

一卅日、早朝呼ニ出候へ共、鹿ニ不合候てやかて歸候、此日跡衆相待候て、久木野へ留候也、此晚も呼ニ登候、鹿呼付候へ共、仕合悪候て射外候、馳而宿元へ歸候也、

九月

一一日、如常、此日も日州衆相待候て、久木野へ留候、此晚呼ニ登候て、山ニ留候、

一二日、山より歸候て、馳而打立、佐敷へ着候、亭主御酒振舞候、税所新介殿被來候間、參會候て給候、忠棟(伊集院)より書狀、税新被持來候、即披見候、趣、此方にて拙

者相待可有候へ共、先く順風次第如八城出船候、當者吾等事、今少當所へ逗留申、西目之舟廻來次第、軍衆渡海之儀見廻候て肝要之由承候也、彼書狀見候処ニ、當所地頭宮原筑州(景徳)被來候、隈城衆召烈新納越州(忠包)、高江衆召烈川上十郎(倍久)左衛門尉殿、宮里衆米良殿、松山市來小四郎殿(家親)、右之衆拙者着候とて御座候也、折節別當酒持來候間、各へ參會候也、此晚宮原紀伊守御酒持せ被來候也、

一三日、別而毘沙門へ讀經等申候、宮筑より使ニ預候、趣者、晚氣御酒振舞可有之由也、爰元へ移被成候ニ、無沙汰仕候之間、御礼ニ可參覚悟候処、結句可參之由承候、失本意候、菟角參候て可申述由返事申候也、此日税新宿にて、税所宮内左衛門尉殿・有馬右衛門尉殿・碁被打候、見候、此晚宮原筑州へ參し候、食振舞也、座客居拙者、次市來玄番左衛門尉殿、次柏原左近將監(金助)殿、主居税所新介、次亭主也、拙者御酒持せ候、酌共申候也、筑州も酌共被成、夜深迄酒宴也、

一四日、如恒、忠棟へ書狀を以、爰元へ暫罷居候て、先衆渡海之儀共可申付由候間、其分候、併今一艘も諸浦より廻船無之候、當者諸軍衆此方へ抑留候する哉、又

八城表へ指通候する哉之儀共申候也、平田濃州(光宗)へも書狀を以、入庄之祝言先く申候也、此日宮筑・税新兄弟・有馬右衛門尉、拙宿へ被來閑談共也、碁共うたせ候て見申候、宮筑御酒持せられ候、各參會候、夕食各へ振舞候也、此日も船盛共申候て、明日有馬へ少く渡海之由申定候、此日宮崎衆少く被來候也、穂北衆被來候也、

一五日、如恒、此日有馬右衛門尉出船候、類船ニ新越州父子・川上十郎左衛門尉殿・桂神祇少副殿(忠盛)・米良殿出船也、いつれも噉之衆中同心也、此夜忠棟より返書到來候、先く川内衆、又ハ日州衆二三ヶ所も渡海させ候て可然之由也、此日も宮崎衆少く被來候也、

一六日、如常、税新八城へ越申候、此度有馬へ就渡海之儀、存分共候候、忠棟・光宗へ申候也、此日福嶋地頭伊集院野州(久也)、人衆先ニ八城へ被通候間、我ハ小惱ニ付而遅參候、彼方のごとく被通由候て、拙宿尋也、御酒參會、御行等之事なと閑談申候、宮崎衆悉皆被着合候也、市來玄番左衛門尉此日出船也、宇都よりの船ニ載申候也、此日ハ宮筑州拙宿にて終日雜談也、碁・將碁なとさせ候て慰候也、

一七日、如常、此晚坂上伊賀丞來候、趣者、田尻殿(鑑通)へ使

として山をくゞり、土橋城介と兩人被差遣候、容易彼籠城ニ通候て、歸にハ舟より參候由也、彼城之躰、折

角と見得候、併二三ヶ月之中ニ兵糧など盡候する様に

ハ無之由也、何として一御行相待れ候、然共、左様ニ候ても、御安否などハ御無用之由也、何としても兵船

を指登られ候ハ、鑑種事ハ一圓ニ腹を切つめ候する、

さて子息を此方へ上置度之儀也、菟角彼兩人被見候分者、海陸共ニ御行艱難有之由也、此夜近邊ニ火事出來

候へ共、變而消候也、

一八日、藥師ニ讀經等別而仕候、宮筑酒肴持せられ閑談共也、敷祢越中守にて忠棟・光宗へ、兵船一艘も所々

より不來候通申候、中書公舟(家久)より八城へ御通之儀聞得

候間、是又申上候、此日忠棟より書狀預候、様子ハ有

馬へ被遣候兩使、昨日歸帆候、鎌筑(鎌田政心)・同雲(鎌田政近)弥彼方御行

在さうに被申候由也、田浦殿爰元逗留申候俟、自身被

來候すれ共と候て、三男被遣候、御酒預候也、

一九日、如常、靈符之祈念別而仕候、忠棟より書狀預候、

趣者、談合可有子細候、拙者早々八城へ罷越候へと承

候、當者諸軍衆之事、佐敷・湯浦へ被打入候て肝要之

由、稠可申付之由也、此日ハ宮筑へ礼儀申候、終日彼

館にて碁・將碁などにて慰候、夕食被振舞、種々会尺

共也、此日龜嶋殿(平川有季)舎弟御酒持せ被來候、彼方より兵船

二艘到來也、又かせ田舟一艘、八城へ此間忠棟荷物被

漕せ、逗留申候、爰元へ拙者へ舟點合候へと被仰付由

申候て來也、將亦日州衆今二三ヶ所渡海之由先日承候

間、今日穗北地頭渡楫之儀申定候処、又忠棟より日向

衆渡船之事、今一兩日ハ可相待由承候間、指留候、此

日津奈木より水主六人來候、一兩日之調にて參候由申

候間、曲事にて候、然々調相待候へ、此方より時分可

申候、今度ハ船三艘程廻候て可然之由申歸候也、此日

任例菊の發句仕候、たゞとなき袖もやけふの菊の花

一十日、如恒、片浦舟・小湊舟二艘來候也、此日八城へ

出船候、右之舟二艘・龜嶋舟一艘、已上三艘にて出船

候也、船中酒宴などにて種々慰候也、一番鳥時分徳測

ニ着岸候、塩からにて不滿候間、本舟者難成候て、漁

船之歸帆候ニ吾々一兩日乗移、宿元へ着候也、

一十一日、如常、各今朝舟より下候荷物等持運候也、亭

主御酒など振舞候也、柏將・野村大炊兵衛尉同船仕候

也、此日中書平川原へ御宿候間參候、めし御振舞被成、

其後御茶湯也、自身茶御立候也、柏將・野大へも御茶被下候也、其後忠棟宿へ参し候、御酒參會候て、御行談合之儀など承候也、其後光宗宿へ参し候、御酒參會也、御兩処共ニ爰元へ宿直し候て可然候、懸候て談合成かたかるへき由候、然者、麓荒瀬殿へ宿申候、此晚亭主めし振舞也、平田殿より自身御出候すれ共と候て、同名駿河守殿にて御礼也、此夜も忠棟より書狀を以、兵船之談合共也、

一十二日、如恒、平田(慶宗)左近將監殿・新四郎殿同心ニ礼ニ

御座候、御酒參會候也、養田信州其外地下衆多々礼儀共也、天草殿も礼也、此日忠棟宿にて談合也、平濃州(尚近)・上原長州・伊集院野州・拙者、此衆也、終日隱密之儀共也、然間、旨趣者已後可書記也、就此等之儀、鹿兒嶋へ上村肥前守被參せ候、終日談合也、夕めし忠棟寄合也、夜入候て、亭主養田信州切麥振舞也、酒宴共也、此日有馬より軍衆迎船來候間、穗北地頭渡海之由、佐敷へ申渡候也、

一十三日、如常、本田刑部少輔殿礼ニ御出候、此度三舟・隈庄へ使ニ越候、彼方之様子共物語也、宗運(親也)何とも不取合様躰之由也、種々下々悪口共仕、不意得振舞之

由也、此日忠棟・光宗無沙汰被成と候て、礼ニ御座候也、各御酒參會候也、平田左近將監殿へ礼ニ参し候、閑談共申候也、伊野州・上長州礼ニ御出候、御酒參會種々雑話也、高山・飢肥之衆中多々礼ニ被來候、帖佐衆も同前、一昨日就御談合之儀、飯野へ使被進候間、拙者衆中ニ誰可申付之由候、併佐敷へ衆中于今皆々指置候間、爰元ニ同心衆者漸五六人候、其内ニ者使候する衆無之之由申候也、此晚平田殿より、明朝御酒寄合有へき案内承候、御同名加賀守にて承候、

一十四日、如常、平田殿より可參之由候間參候、朝食振舞也、座躰客居天草殿、次伊野州、次本刑、次宮原縫殿助、主居拙者、次新納(久)右衛門佐、次濃州、次稅処新介也、數返過候て、一王(翁)雅樂助唄申候也、其後はやし也、平田新四郎殿大鼓、美代源四郎小鼓也、笛地下衆、備中屋弟子也、酒宴過候へハ各罷歸候、直ニ伊野州宿へ礼申候、新右・稅新同心仕候、暮・將暮にて雜談共也、忠棟より松浦筑前守來候、一ヶ条談合之儀、忠棟被聞せ候すれ共、客來繁多にて難成候、伊野州・拙者委承候て可然之通、捻にて承候間、暮・將暮指捨、委承候也、其後御酒振舞也、それ過候へハ、宮之原縫殿

助風呂燒せたる由注進候間、彼方へ行候て風呂ニ入候、
新右・税新同心申候、風呂過候へハ、亭主宮之原殿被
出合候て、種々看にて御酒也、

一十五日、看經等如常、地下・旅衆各礼儀共承候也、此
日平田殿にて談合也、其衆忠棟・光宗・伊野州・上長
州・本刑・新右・税新也、松浦筑前守案内者にて候間
參候也、此日赤星殿礼儀ニ被來候、有馬殿舍弟是も礼
儀ニ被來候、太刀・百疋預候也、東尾張入道御酒持せ
被來候、松浦筑も御酒くれられ候也、有馬殿より書狀
預候、從義虎も御狀被下候、何れも入庄辛勞之由也、

一十六日、如常、忠棟へ參候、有馬殿・義虎へ之返書申
候、一ヶ条談合之案内者三人ニ、此儀成就之刻、知行
可指遣之由之證文被書遣候、吾々三人之名乗にて候、
右筆本刑也、此日志岐鱒泉拙宿へ礼ニ被來候、中紙二
十帖預候也、道正宗与如鹿兒嶋歸由申候て、暇乞ニ來
候、此日者伊野州宿元にて碁・將碁にて遊戯候、税新
同心申候、夕食振舞也、此夜平田新四郎殿語ニ御出候、
深行まで御酒共にて閑談也、此日忠棟より承候、當庄
内田之事、去年春之時分、拙者噁申候キ、其後兵庫頭
殿へ當所御賜之条相呉候、又直ニ御覺悟候間、如元拙

者噁申候て可然之由候間、平濃州へ御案内申候、尤可
然之由候条、如其申付候也、

一十七日、如常、堅志田去年已來松浦筑前守忍立候之間、
此間談合を被遂、打立也、先忍衆三十人、酉刻計船よ
り有馬へ渡海之由申候て、打立せ候、從夫小川へ着船
候て、彼方にて松浦へ取合、打立可然之談合也、吾々
諸軍衆者、月出候て打立候也、敵方へ様子しれ候て不
事成候也、忠棟者豊福口より被打立せ候、光宗・拙者
ハ寶滿越へ指懸候、夜明候て、手火矢之音など聞得候
間、忍衆定而辛勞被申候哉と無心元事共也、相圖之火
かゝらす候間、不事成由者推量候之間、心遣無是非候、
僞者小熊野、彼あたり之村破却候へてハ、忍衆のきこ
くかるへく候すると存候候、濃州・拙者人數にて、彼
村々破却させ、放火共候也、從夫輒忍衆ものかれ候、
其衆破れ候村より退候衆を追切候て、敵八人被討取候、
宮崎衆三人高名被仕候、敷又十郎・長野談路守・勝目
但馬守此衆也、又十郎殿刀痛一ヶ刃被被候、不痛候也、
飢肥衆など高名被仕候、それより各引歸候也、拙者ハ
八城へ着候也、此等之儀十八日にて候也、

一十九日、如常、上原長州被來物語共也、最中、宮原筑

種・景次

州父子續候て被來候、同前ニ御酒寄合候也、長州者閑談共也、其中悴者日州より來候、中途にて猪射候とて

持來候間、則各へ振舞候也、將暮などにて雜談共也、

從夫長州同心申候て、忠棟宿へ參候、昨日働之様子共

物語申候也、此働前、飯野へ伊地知筑後守を以、此条

寄合中前より申候、其御返事伊筑被來被申候也、

一廿日、如恒、頃阿蘇家へ手切之由、土持彈正忠殿へ書

狀を以申渡候、并彼方へ通候する魚塩之事、堅停止之

由申候也、吉利殿・山田新介殿へも此条同前ニ申渡候

也、此日拙宿にて談合也、忠棟・光宗・伊野州・新右

・本刑・税新・宮筑・上長・拙者此衆也、此座中城一

要より使也、并北郷彈正忠殿限本當番にて候、同前ニ

使也、趣者、竹宮地頭与風隈本へ人質ニ被來、彼方無

破却様ニ頼候由被申候、如何可有かのよし也、先々然

と質人格護被成、竹宮の様子被聞合、爰より三舟へ一

途手切之躰共見え候ハ、扶助有へき由被仰候て可然

之由返事也、合志殿(親重)よりも使僧也、是も阿蘇家へ手切

之様子可被聞合爲也、終日此方にて談合之趣、堅志田

口働之様子共也、種々之儀共出合候也、夕食各へ振舞

申候也、

一廿一日、如恒、忠棟より伊野へ御礼候する、拙者同心

有度由承候、然間伴申候、暮・將暮にて終日慰也、夕

食振舞被成候、種々酒宴也、此日も宇都殿・城殿へ使

者可被遣談合共也、

一廿二日、如常、忠棟宿にて終日雜談共也、暮・將暮に

て候、此日山田新介殿着候也、從都於郡使者也、鎌田

又七郎殿立なされ候すれ共、妻方御祭礼候間、鹿兒嶋

へ被請御意、于今遅引候、さてハ此節立候する哉、い

かハ之由承候、鎌雲今程有馬御番にて候間、彼方へ調

儀等然々被送、又七郎殿事ハ、しかと被居候て可然之

由申候、衆中ハ各立候て肝要之由申候也、此晚養田信

州振舞也、

一廿三日、如恒、有馬へ鎌筑・同雲へ寄合中書狀遣候、

趣者、三舟へ手切之由、又ハ有馬殿より堺目續宜儀共

到來之由承候、此等之儀、右兩人能く被聞合、眞実ニ

宜事等候ハ、誰人躰一人渡海可有候、然者、能く被

聞合、注進可有之由申候也、此日風呂燒せ候て入候、

此晚從忠棟於臨泉院月待被成候する、拙者語ニ可參之

由承候間、其分候、暮・將暮・誹諧・茶湯などにて月

を待取候也、

一廿四日、地藏へ別而讀經等仕候、肝付彈正忠殿御酒被持、只今越着之由候て來入也、即御酒參会候也、其後

彼方へ礼ニ參し候、種々看にて御酒也、本田大炊大夫(親惣)

殿・宮原筑州・伊集院掃部助殿同座也、從夫忠棟宿にて談合也、濃州・伊野・上長・拙者・新右・本刑、此

衆也、豊福地頭其外地下衆各被罷出、堅志田口破仕役之談合也、大方相澄候て各罷歸候也、夕食忠棟各へ振

舞被成、此日中書頭殿(忠長)・比志嶋殿(義基)着被成候也、

一廿五日、如恒、天滿天神へ別而祈念共申候也、忠棟より本刑を以、今日諸地頭、圖書頭殿御宿にて、有馬表

之様子、又ハ田尻殿折角之由聞得候、彼是談合候て可

然被思さ之儀也、御下ニ我々も存候由、返事申候也、

此日上村肥前守かこしまより罷歸候、先刻御申之御返事也、有馬表渡海事者、各談合衆得心ニ不乘候欤、當

者阿蘇家へ一行之由候、何と様にも爰元へ寄合中三人(忠棟)罷居候、又ハ伊野・上長なと然々相談共候て、此衆分

別次第、宜様ニ御頼之御返事也、此日阿多掃部助殿を以上意候、爰元辛勞之段、又ハ有馬表之儀等、可然様

ニ入魂申へき由也、續衆未被指揃之通被聞召及、曲事之由也、諸地頭圖書頭殿にて談合共候、明後日御働之

事者、諸軍衆未着揃候間、先々被指延候て可然之由定候也、

一廿六日、忠棟御宿にて談合也、先々堅志田口ニ遠陳被着候而、從夫御働なと輒させられ候て肝要之由出合

候、可然様ニ可罷成処見せ有へきとて、山田新介・二階堂阿波介・敷祢越中守・上原勘解由兵衛尉、此外諸

所劫者一兩人宛被出合、明日柁ニ可成地見させられ候

するとて打立也、地下衆奥野越前守劫者にて候とて、案内者也、

一廿七日、如恒、忠棟より上原長州にて承候、秋月殿より使僧にて候、隈本へ被留へき由被仰越候間、彼方へ

城殿分別にて被留、意趣被聞せ、城主計助を被越候、

長州爰元意趣被聞候間、光宗・拙者同前ニ可承候由也、上長同心にて平田殿へ參候て承候、趣者、龍造寺和平

之儀也、条數、和平之儀、肥後傍介之儀、有馬表之儀、此三ヶ条也、當時豊州(大友義統)と爰元和平ニ候、是者日州表取

北之遺恨、向後難止候間、必竟御隔心ニ可罷成候、然者龍・秋御下知ニ參候て、大友殿御退治肝要候、左候

て、嶋津殿を九州之守護と可奉仰候、其上者、龍造寺今程格護之処も、御扶持とて可被下候条乍勿論、肥後

傍余なとも、何と様にも御意法第たるへく候条不及是非候、有馬表之事、是も御番衆先く被引取、一向ニ豊後へ御弓箭肝要候、私ニ不入御弓箭にて候、さして大利も候へぬ事、いかニ奉存之由也、具承候、眞儀にてさへ候ハ、先々目出由共申候也、従夫肝付彈正忠殿宿へ、各同道申候也、座躰客居忠棟・拙者・伊野州・養田甚丞也、主居光宗・上長・亭主・一王雅樂助也、薄暮ニ及候迄、種々会尺也、宇治茶など賞翫也、此外珍物共多々候也、此歸ニ、上長州意趣こそ聞なされ候へ、劫者と申、彼是秋月より被申通、鹿兒嶋へ被參候て可被申上之由、被仰付候也、乍斟酌、御寄合中御校量之由也、

一廿八日、一番鳥より別而看經共仕候、忠棟・伊野州へ茶湯會尺可申之由約束申候間、入御也、其刻上長、鹿へ打立之由候て被來候、意趣、各同前ニ申候也、従夫かりニ座を構候条、それへはいりなされ候、先めし也、御酒など過候て、宇治之別儀をたて候、拙者手前也、座者忠棟・野州・拙者也、うす茶ハ忠棟御手前也、其後種々看にて御酒也、各被立候、此日栴処見せられ候衆歸也、一向左様之地無之由也、此晚山新・二阿被來

候て、栴之地無之之通、細々物語共也、最中、喜入式(久)部太輔殿御出也、良久雜話也、平田(宗忠)新左衛門尉殿も被來候也、

一廿九日、如恒、忠棟宿にて將暮なるとて慰也、此日新納武州(忠元)・猿渡越中守(信光)・平田狩野介(宗也)・稻富新介(長忠)來着之由候て、礼儀ニ被來候、各御酒參會候也、

一卅日、如恒、猿渡越州より猪預候、野尻地頭只今着候之由候て被來候也、野村安房介來候、御酒被持せ候也、此日宮原殿風呂焼せ候て入候、鹿兒嶋衆同心にて入候、(藏久)金吾様より此方へ、辛勞申之由候て御使僧被下候、御養性氣にて、此度續之事、御遅引之通共被仰分候也、此晚右馬頭殿御着被成、御宿東四郎三郎処也、此日合志殿より兩使也、宗運意地共被延候也、御酒樽一荷并鶉過分ニ預候也、

拾月

一朔日、看經等如常、右馬頭殿(以心)へ參候、御酒御寄合也、其後忠棟へ御礼申候、從鹿兒嶋四本主(秀忠)稅助續ニ來候、其次を以、寄合中三人へ被仰条々候、三人同前ニ承候、趣、此度阿蘇家(維持)へ手切之儀、前刻上村を以被申上候、具被聞召候、併此仕役之事、月夜之内ニ而候へてハ可

難成候間、上村參候て跡ニも仕出候らん由申候、然者御返事御存慮共被仰候ても不入事と被思食、不詳候キ、愆而阿蘇領ニ弓を引せられ候する事ハ、神敵之様に候、雖然甲斐民部(親直)入道心底、就中頃相違之様ニ見得聞得候之欵、當者弓箭之外無之候、同者彼方ニ替せ候て、此方よりハ請太刀ニ被成度御存分ニ候、剩御圖有馬表御働可然之由候処、彼方を指捨、阿蘇へ手切、御納得無之候、此前大隅へ御打入之砌、曾於郡相支候処ニ、伊集院孤舟齋(忠明)、宮内を破却候へてハ彼方痛間敷由談合共候て、既可被打立覺悟候処、日新様被聞召付、御家之事者神慮を御憑被成迄候、然處宮内を被打破候てハ、八幡之御冥慮恐敷被思召由、頻被仰留候、是程ニ御代々御神慮迄にて御弓箭をなされ候処ニ、御圖なども不被申、楚忽ニ手切、曲事ニ被思召候、然共仕出候上者無是非候、宗連(親直)一身相違ニ付被召出候、聊阿蘇御神慮ニ對せられぬ由御立願など、談合次第被申候て肝要たるへき由也、當者何と様にも談合申され、三舟之事、手詰ニ罷成候様ニ分別可被申之儀也、爰元御談合法第一御發足可有之由也、此外条々被仰越候、然者右馬頭殿御宿へ各被揃、御談合之由也、其衆圖書頭殿・伊野州(忠長)・伊集院久造

・新納忠元(官原景徳)、使税所新介・山田新介也、合志之(親直)意趣も此兩人承られ候、其趣者、宗連合志殿へ進し候書狀持せられ候、去春已來阿蘇家・當方御和平候之処、頃与風手切候、驚入候、いかなる倭人之中手なとにて候哉、此由爰元被聞召分、又々此間ノこと御和融可目出之由也、左候ハ、宗連子之内人質ニ指上、又者北目御行など之儀も、一途入魂可仕之様ニ可申調之通也、此等之御返事も、各談合可有之由也、寄合中三人ハ忠棟宿へ終日罷居、談合之返事相待候也、此日談合不事行候也、

一二日、如恒、圖書頭殿宮之地ニ御宿候、彼方へ昨日之談合衆被相揃、終日談合也、有馬表よりも宜儀共申來候間、是も御談合之由也、有馬右衛門尉委承被來候条、談合所へ指出、具被申候て可然之由也、寄合中ハ洞泉寺へ參候て、圖書殿御宿近候間、談合之儀終日承合候也、住持茶湯敷寄にて候て、種々會尺共也、此日談合之趣、從鹿兒嶋仰之條々、乍勿論尤至極候、堅志田口御行之事、御圖次第拵取ニ、又ハ破仕役など近日可有ニ定候、合志之返事、宗連之事、春已來爰元へ一致たるへき由懇望仕候条、其分ニ相澄、既忠棟・拙者神判(伊集院)

取替候キ、然ニ此方へハ種々あいしらひ迄にて、龍造寺(隆信)へ深重申組、質人ニ孫を指置候、其上頃又重、質甲斐之出雲をさし出、手火矢など數十張合力仕候事顯然候、殊本田刑部少輔使節として被指越候処、致悪口、

種々緩怠之様子見得候間、堺目之人數与風手切候、聊別条にて爰元より愀變之儀無之候、然者宗運子之内なと質人ニ指上、又ハ北目働など一途申候ハ、此間のことく和平別儀有間敷之由也、有馬之事ハ今ちと使被

相待候て肝要之由也、此夜肝付彈正忠殿同心申候て、忠棟御宿へ參候て、終夜茶湯などにて閑談也、此朝一昨日卅日堅志田口見切の爲、衆中・拙者悴者合而廿人餘遣候、昨日朔日懸野伏仕候て、敵四五四人被討候、中村

内藏助・松本又八左衛門尉・丸田左近將曹・加治木治部左衛門尉、此衆分捕仕候、豊福よりの案内者一人討候、然者已上五人也、頸関之籠まで召寄せ、新納(久徳)右衛門佐被捨候也、

一三日、毘沙門へ別而看經仕候、此朝めし振舞候衆、新武州・本田大炊大夫殿(親孝)・阿多掃部助殿(忠徳)・伊地知勘解由(重元)

殿・山田新介殿(信光)・猿渡越中守殿(信光)・野村備中守殿(文綱)・一王(河野通智)

雅樂助、此衆也、めし過候て御酒之時分、忠棟与風御

出被成、從夫堺目行之談合也、左候て、陳城見ニ諸所より劫者被仰付、被遣候也、此晚典厩公へ忠棟へ入御也、座躰主居典厩、御次拙者・忠棟・養田信濃守、客居喜入式部太輔殿(久徳)・新右衛門・伊野州也、種々珍着・珍

酒にて御会尺也、御膳下候て、打乱酒宴也、典厩鞍なと打せらる、其刻赤星殿御酒持參也、天草殿なども指

出也、赤星殿も鞍うたれ候、菟角候て深更迄御酒宴也、一四日、如常、本田刑部少輔殿より、忠棟・光宗(平田)・拙者

可參之由候間、彼方にてめし振舞也、種々會尺共也、此晚圖書頭殿より可參之由被仰候条、祇候申候、客居

桃山殿(忠助)・忠棟・拙者・平田新左衛門尉殿(宗徳)、主居御亭主・平濃州・大寺大炊助也、種々御肴にて御酒也、御酒

過候て、四帖半之座にて御茶湯也、圖書頭殿御手前也、忠棟・光宗・拙者御茶之座ニ參候也、左候て、鑓而各同心にて罷歸候也、

一五日、如常、忠棟より、内衆四本大学助當年上洛候、然者堺にて度々茶湯之座ニ罷出、様子共稽故仕候、就中會席之調等承候由申候間、彼調儀之會たるへく候、

可參之由候間參し候、奈良瓜・干瓢など種々珍物共參候、濃・薄茶共ニ忠棟之御手前也、座過候て、橋普請

地下役人中させられ候、見申候、従夫肝付彈正忠殿宿
 へ、忠棟同心申參し候、今日諸地頭平田殿へ被相揃談
 合之由定候間、条數之談合共申、拙者草案仕候、纏而
 本刑被來候間、書せ候て、税新・新右にて被申出候也、
 終日霜臺会尺共被成候、此日平田殿より税新・新右に
 て、當所御柙御談合肝要候、落書など見せなされ候、
 菟角當所衆之事、繰替なされ候するも、又其俣ニ置せ
 られ候するも、殊之外御隙入たるへく候間、先々堅志
 田口一御行候て、其後御談合可然之由定也、伊野州・
 新武など此由也、此夜忠棟より、明後日御働之御圖帳
 おり候間談合之由候間、兩人參合候て、終夜衆盛等仕
 候、

一六日、如常、早朝より於忠棟御宿、打立之談合共也、
 大雨霰不艶候つれ共、各未之刻計打立候也、小野へ着
 候諸軍衆、豊福・小野・森山・小川・高津賀所へ宿
 也、

一七日、夜を籠打立候也、堅志田町村々破却候て、敵數
 十人被討取候、破口之衆、平田濃州被召烈候、其所々、
 求麻・八代・豊福・世喜・高津賀・高田・比奈古・田
 之浦・久多良木・佐敷・湯之浦・津奈木・羽月・曾木

・平泉・日州高城・帖佐、此衆也、中取ニ拙者罷居候、
 其衆、大口・一山・菱刈本城・福嶋・宮崎・曾井・清
 武・藏岡・眞幸衆・栗野・加治木・横川・飯田・細江
 ・田野・野尻・紙屋・鉄肥・木脇・富吉、右之諸所拙
 者手也、典厩・圖書頭殿・忠棟、是者同処ニ御衆たま
 り也、其衆、清水・串良・高山・鹿屋・鹿兒嶋・伊作
 ・田布施・阿多・加世田・永吉・日置・始良・蓬原・
 穆佐・永峯・下別符・頼娃・知覧・喜入・川邊・踊・
 曾於郡・大崎・伊集院・吉田、此所々也、輒堅志田町
 破却候、蓮生寺之上、陳城ニ可然も哉と存候て、我々
 手より見せニ登せ候、然処ニ、不慮ニ敵四人討取候、
 栗野衆二人・飯野衆一人・宮崎衆勝目但馬守一人被討
 候也、勝吐氣新納右衛門佐被作候、左候て各打歸候也、
 此夜ハ小野へ留候、諸軍衆も此彼ニ留也、

一八日、小野より如八城罷歸候也、肝付彈正忠殿同道申
 候、此晩宇都より隈庄口へ働共候、其見者ニ野村備中
 守被遣候、罷歸、彼方之様子物語也、先朝立、然々村
 など不被破候事を、備中守忝者共見取候間、其分地下
 へ被申候、然処ニ、日下候て談合共被仕、物深く村破
 却之由候間、野備頻無用之由被申候へ共、嘉悦飛彈守

打立候て、隈庄近く指寄、村破却共候、然処ニ、敵手痛懸候間、宇都衆敗軍ニ及、筑麻左近・岩佐兩人を始として、三四十人戦死之由也、笑止之事共也、

一九日、如恒、城一要より使僧預候也、竹宮口之事、北郷（念慮）彈正忠殿當番被成候条、致談合、村少く打破、火色其隠有間敷候、此口無何事御勝利、目自由也、使書并樽二・水鳥一双預候也、相應之返書也、使僧御酒振舞歸候也、從合志も書狀を以、此口之様子尋也、是又有之俣ニ返書申候也、合志口より魚塩三舟へ通候由、城一要より承候間、曲事之由、寄合中より合志へ書狀にて申候也、此日從宇都殿使僧にて、彼口之様子・戦死之衆なと委承候也、使僧見參仕、相應之返事申候也、昨夕、上原長州（尚也）從鹿兒嶋被歸候、然者御返事可承之由也、忠棟ハ被聞せ候、光宗・拙者同前ニ可承之由候へ共、光宗くさ氣にて候間、拙宿にて新武・伊野同心ニ承候、秋月中（種実）媒にて龍造寺と和平之儀被申候欤、去春夏已來度く懸引共候、肥州就傍余之儀堅被仰候間、其後被申絶候欤と被思召候処、又々申出候哉、當者肥州口御弓箭于今一途無之候、殊ニ田尻殿折角之様（蓋禮）ニ聞得候、海路と申、彼方へ御手難届候、彼是御損もなき事

にて候間、先く秋月殿中媒のことく、無事可然被思召候、但各談合次第之由也、兩三人委承候、乍勿論尤之上意候、然者秋月より之使者此方へ被召寄、御返事可然之由定候也、此日北郷彈正忠殿隈本より使預候、趣者、彼口御働御勝利目自由也、

一十日、如常、各平田殿へ被揃、諸堺目之談合也、此晚肝付彈正忠殿より可參之由候間、參し候、茶湯會尺也、拙者・野村備中守・一王雅樂助、御茶極無也、

一十一日、如恒、忠棟於御宿各談合也、圖書頭殿御出也、堅志田口・有馬口之御行御談合也、凡御鬪次第之由定候也、田尻へハ荷籠之儀相定候、然者船盛井上乘衆なと、諸所へ被仰付候、

一十二日、如恒、珠長越之由候て礼儀也、隈本より吉田東安被來候とて礼儀也、新武・伊野、右之衆參會候て、終日暮・將暮にて慰候、夕食振舞候也、此内にも諸境目談合等者聊無緩候、此晚田尻殿へ使者ニ土橋城介殿可被遣候、左候ハ、向後御詫などの儀寄合中被頼成之由、忠棟より承候也、忠棟御一門衆にて候間、御杖量にハ過ましく候、一大事折角之在処ハ被罷通儀候間、我々彼人能候するとハ難申候、向後御詫之事ハ無是非

之由、返事申候也、使野邊將監殿也、

一十三日、如恒、三官かこしまより越候間、脉頼候て取
せ候、従夫朝食振舞候、土橋城介田尻へ可通由候て被
來候間、同參會候也、此日吉利殿・比志嶋殿へ無沙汰
申候間、御礼ニ參し候、成願寺可參之由承候条、伊集
院掃部助殿同心申候て參し候、終日會尺也、此日又太
郎殿御着也、即御酒持せられ、拙宿へ御礼被成候、留
守にて候条無是非候、

一十四日、如恒、忠棟宿にて、田尻へ之諸所之上乗衆被
揃様子共被仰聞候、各今晚船本へ下之儀相定候也、此
晚吉利殿・川上左京亮殿・平田新左衛門尉殿・稻富新
介殿・二階堂安房介殿・福永藤十郎殿、右之衆へめし
振舞申候、閑談共也、此日上津浦殿より使書にて、爰
元逗留辛勞之由承候也、并看兩種預候、有馬殿より使
書にて、彼表之儀、拙者渡海之由かこしまより承被成
候間、万端頼之由候也、有馬右衛門尉一兩日已前指渡、

爰元談合之様子具申入候間、不能重言之由返事申候也、
一十五日、夜内より看經等申候、右馬頭殿へ御礼ニ參候、
御酒御寄合也、従夫忠棟・光宗へ礼申候、肝彈へ礼申
候、彼方にてめし振舞也、此日忠棟同心申、又太郎殿

御宿へ參候、御酒三返也、此歸さに、忠棟拙宿へ可有
入御之由申候、茶湯會尺申候、忠棟・本刑・養田甚丞
・拙者也、深更まで閑談也、

一十六日、如常、忠棟より、珠長越にて候間、一折興行
可有候、一順申せ之由候条、仕候て、珠長宿へ行候て
尋候、可然由候て、即被書付候、彼宿にて御酒にて閑
談申候、従夫税新宿へ礼申、又御酒也、椋山殿・吉利
殿宿へ礼申候、いつれにても御酒也、此日秋月殿より
之兩使之意趣、上原長州・税新被聞候、前刻城殿より
聞せられ候趣ニ無懺變候、一段懇之儀共也、宇都より
隈庄口へ仕役見立ニ遣候衆歸也、伏兵など可成様ニ被
申候、宇都よりへ、彼口之働無領掌之由、見得聞得候
由也、此晚肝彈へ忠棟・拙者・佐多宮内少輔茶湯寄合
也、霜臺手前也、此座過候て歸候ニ、忠棟宿へ參候て
物語申せ之由候間、參し候て雜話共也、謎などにて終
夜戲言也、

一十七日、如恒、典厩於御宿談合也、新右・税新・上長
彼三人使にて候、条數、御神慮之事、有馬渡海之事、
隈庄口之事、秋月御返事之事、此等之儀共也、此朝大
口郡山寺御祈念被成、堅志田口御着陳之御圖申被成、

一ナラハ御陳、二ナラハ御働、今少御思案入へく候ハ、白鬮、如此御申なさる、白鬮おり候也、此晚忠棟より妙見内之祭見物ニ御誘引候間、肝付霜臺・山田新介など同心仕罷出候、等着連歌など承候、漸深更ニ罷歸候也、此夜中より、くさ振付候て散く之鉢也、

一十八日、くさ不醒候て、終日休居候、忠棟祭礼見物ニ御誘引候つれ共、散く之鉢候間無是非候、平田濃州社參被成、如恒例無何事御祭礼成之由、人々物語也、地下・旅衆群集之儀也、所く地頭又ハ一所衆なとより、くさ氣如何候哉とて尋共也、此日宇都殿より使書預候、并御酒樽二荷預也、

一十九日、三官藥共飲候て、漸快氣候而、宇都之返書なと仕候、此日珠長被來、終日閑談也、夕めし振舞候、一廿日、忠棟於御宿百韻興行也、發句珠長、雲の浪遠よる月の水かな、座鉢客居圖書頭殿、御次新武州・吉田洞庵・伊野州・奥野越前守・蓼田紀伊介、主居拙者、次珠長・忠棟・蓼田紹意・税所新介・東四郎左衛門尉也、執筆鮫嶋二郎三郎也、深更ニ各歸候也、

一廿一日、如恒、忠棟談合とて御出候、新右・税新・上長・山新、めし振舞、御酒也、合志殿より使富常安へ

返事、山新・税新にて被仰候、此晚忠棟へ、又太郎殿寄合可被成候、可參之由承候間參候、座鉢主居又太郎殿、御次忠棟・本刑・蓼田信濃守、客居拙者、次新右衛門・市來加賀守也、是者又太郎殿御内衆也、種く御酒共參候て御閑談也、

一廿二日、如常、於忠棟談合也、有馬表渡海之儀者、秋月殿媒介にて龍造寺と和平之儀被仰組上者、無用之由相定候、僮者此等之条、有馬へ被仰越候へてハにて候間、稻富新介使(長尾)ニ可被指渡由被仰付也、堅志田口之事、樽取之御鬮者不下候間、御働近日中可然ニ相定候、談合衆、新武・伊野州・上長州・本刑・税新・稻富新也、此日從鹿兒嶋伊地知雅樂助殿を以被仰候、各寒中在陣、殊ニ度く働辛勞候御礼也、糸く堺目御行等之事被仰候、并圖書頭殿老中役可被仰付之由也、吉日次第爰元にて早く可申入之儀也、此晚肝付彈正忠殿・佐多宮内少輔殿・野村備中守、右之衆へ茶湯會尺仕候也、此夜忠棟御宿へ若衆中同心申候て、終夜閑談申候也、各沈醉にて種く戲言共也、

一廿三日、別而看經共仕候、伊地知雅樂助殿、昨日御意趣者忠棟同前被仰候、猶細く可承之由候て被來候而、

条々其外御物語之儀共多承候也、養田左衛門尉御酒持せ被來候也、又地下人あまた御酒持せ來候也、有馬殿へ稻富新介被指渡由之書狀、連署ニ認候也、忠棟宿之風呂ニ入候、此夜月待申候、伊地知雅樂助殿御酒被持せ、終夜物語也、此外若衆中曆々被來候て、月之肝候まで種々戲言共也、

一廿四日、別而地藏菩薩看經共仕候、圖書頭殿へ老中役御憑之由、伊地知雅樂助を以被仰出候、御異見共被成候する間、喜入式部(久通)太輔殿相添被成候、乍勿論、一二ヶ条之分にて何か御領掌候する、重而御侘被成候する由也、此晚赤星殿・有馬殿(新人也)舎弟・天草殿舎弟へ御酒振舞申候、深更まで酒宴也、幸若与十郎來候て、一曲共申候也、

一廿五日、早朝伊地知雅樂助殿歸宅候間、於忠棟御宿ニ同前ニ御返事申候、秋月殿返事 上意之候ニ申候、兩使納得申、殊之外大慶之氣色見得候、殊田尻へ取着候諸陳も曳せ候する由申候て、既ニ田尻殿へ此等之一通爲引付、我々之連署請取歸候由申上候也、田尻へ荷籠輓事成由申候也、有馬渡海之事、龍造寺へ和平之儀被仰組候て、寄合中罷居候処より人數差渡一働仕候てハ、

覺ニ可惡之由候間、其分稻富新介にて彼方へ申理之由也、堅志田口之事、近陳可取せ談合定候へ共、御鬮事成候、然間、當庄爲ニ罷成候するあしとの楯取、近日可仕之由也、左候て諸軍衆不入候ハ、先々小分限衆ハ次第ニ歸候する談合仕候由也、吾々事者、龍之和平之儀事澄候て已後、上意次第歸陳可仕由申候也、此日新納武州宿にて、珠長會尺二百韻興行也、其座鉢主居忠棟、次珠長・祝新・新武・東四郎左衛門尉・奥野越前守、客居拙者、次吉田洞庵・養田紹意・伊野州・養田紀伊介也、連歌過候ても、種々戲言共にて御酒也、歸宅申候刻肝彈來儀候て、漸久物語共也、

一廿六日、如常、此朝又太郎殿より忠棟・拙者可參之由候間參候、座鉢客居忠棟・左近大夫殿・本刑部、主居又太郎殿・拙者・市來加賀守也、終日酒宴也、幸若与十郎一曲申候、石原など狂言共仕候也、此晚圖書頭殿老中役御當目出由申候て、彼御宿へ參候、其次忠棟より茶湯之座構候、(座鉢)麟臺、此晚御出候へかしと拙者へ傳言被成候、其由申候、入御可有之由也、其後拙者御誘引候間、御供申、忠棟へ參候、聽而四帖半之座にて茶湯御会尺也、麟臺・拙者・亭主三人也、忠棟手前也、

種々珍物共候キ、深更ニ罷歸候也、

一廿七日、早朝より、忠棟御宿にて柁執之打立談合也、

諸所衆盛等事果、未刻計各打立候、忠棟ハ小川ヘ宿也、

吾々ハ小野・守山、爰かしこに諸軍衆此夜ハ一宿也、

一廿八日、早朝各打立、花之山圍執也、圖書頭殿を始、

諸軍衆乘陣候、各盛を以普請也、軍神勸請新納右衛門

佐、歟初山田新介也、此夜諸口外聞・外野伏・外廻等

堅固ニ申調候也、

一廿九日、早朝より普請一返也、諸方より柁取目出之由

申來候、不及記候、

拾一月

一一日、早朝より各互ニ礼儀共申、又普請仕候也、諸口

外聞・外野伏等之事、不及申候、此日税新にて平田殿

へ、(伊集院)忠棟・拙者前より申越候、趣、養生氣于今いかゝ

共候哉、當柁之事大方執認候、可然見得候条目出候、

然者當柁主取之事、専地下衆番たるへく候間、(平田光忠)濃州被

成候て可然候、其下ニ、普請等見廻候する衆ハ被仰付

候する由、談合出合候由申候也、

一二日、早且より各普請也、敵少々道善寺之尾迄來候て、

爰元様子見候欤と見得候、從此方者人數一人も不出、

普請専ニ仕罷居候、此晚税新八城より歸也、平田殿返

事、柁取事成候哉、目出候、就夫主取之事承候、何と

様にも御談合次第に候、乍去、鹿兒嶋へ被伺御意候て

可然おほされ候、其上寄合中今一人御番候へ、領掌

可有之由也、此夜殊之外雪霰也、(新納忠元)新武州拙宿にて閑談

也、然次、柴屋之霰之跡を當座發句ニ申候而、相尋申

候也、さゝ葺のかけも玉敷あられ哉、と申候、鑢而武

州脇なされ候、かり場の月ニ來てとまり山、(伊集院)第三伊野

州、分くらす駒に水さへ野ハかれて、如此共也、

一三日、早朝より忠棟宿にて諸口番盛、又ハ當柁番盛等

談合共申候、光宗へ又々、當所御主取被成候て可然候、

其故者、甲斐頭・小野・守山など格護之爲之柁候、専

爰元人數御番可被仕候間、自余之寄合中ハ似合間敷候

欤、境目役にて候間、菟角濃州御下知之外ハ難有候、

又鹿兒嶋へ御意請られへき由候へ共、是又此柁取之事、

濃州如御存知、爰元談合にてこそ執せ候へ、聊鹿へハ

無御存知儀候、然者主取之事など、御意請候共、御

納得有間敷候、今少御校量なされ、光宗御領掌肝要之

由、(宗忠)平田新左衛門尉殿を以申候也、此日宇都役人本郷

甲斐守、乘陳之祝言として被來候也、忠棟宿にて參會

申候也、吾々宿へも酒肴持せ也、

一四日、普請等無緩候、忠棟先々小川邊まで歸陳候て可然候、一兩日ハ拙者爰元見廻候する由申候条、歸陳也、鹿兒嶋衆其外彼手之衆召烈、歸被成候、當拵番衆・有馬表番衆なと談合を以盛候て、銘々ニ申渡候、此晚平田新左衛門尉八城より被歸候、濃州當拵主取之儀、猶々罷成ましき由也、忠棟へも中途にて被逢候、光宗存分被聞せ、此上談合共可入候間、拙者先々明日も急候て可罷歸之由也、

一五日、普請等無緩候、敵少々道善寺之尾ニ見得候也、無何事候、此日忠棟より野村新七郎を以承候、趣者、各校量次第昨日歸陳候、尤今日も普請見廻ニ登被成候すれ共、指無題目候条不用候、當者我々歸陳いつたるへく候哉、光宗當拵主取之儀無領掌候、然者此一節番大將之儀、又ハ諸口番盛等如何有へく候哉之由也、新武・伊野・上長談合申候て、忠棟へ返事申候、其趣、懇勸之御使祝着候、諸篇御談合可入存事候、然者明日、小野まで右之衆同心ニ可罷下候、乍御辛勞、御出合可目出之由申候也、此晚右之衆なとへ食振舞候、御酒にて閑談共也、此夜新武・伊野・洞庵、拙者發句にて四

吟仕候也、半夜計ニ各歸也、此夜中、忠棟より書狀到來候、趣、出合談合之由野新にて申候へ共、堺目衆下候てハ迷惑ニおほされ候、普請等見廻、彼是忠棟拵へ可被登せ之由也、當者菟も角も御校量次第之由、返事申候也、

一六日、普請等前同し、忠棟拙宿へ來候也、各打合談合共也、當拵之儀、先々此度御出勢ニ遅參之諸所、可召置之由定候、新武之事、五日ハ見合肝要候、吾々も談合共可入候間、先々忠棟同処へ歸陳可然之由定候、其外諸口之番盛等大方被成候、各々へ食振舞会尺共申候、爰かしこより到來之珍酒・珍肴無申計候、宇都・隈本などよりも音信共候、彼是繁多之儀、しるしあへす候、明日隈庄口働之儀相定候へ共、豊福衆之内述者候之条留候也、

一七日、普請等同前、伊野州陳屋へ可參之由候間、新武・上長・山新同心にて參し候、朝食振舞也、從夫種々会尺之中、四吟之連歌共少々仕候也、此日も宇都・隈本又ハ泉なとより、使書多々到來候、しるしあへす候、此晚小野まで歸陳仕候也、此日も忠棟より兩通到來候、番盛等彼是細々之儀候間不及記候、此夜小野之宿ニ稻

富新被來候、有馬表様子一昨日細く承候つれ共、忠棟

会尺、又ハ餘々繁多之条、委承ましく候間、具ニ可語

之由也、彼表之儀、龍造寺と和睦被成候てハ一圓に笑

止之由、有馬殿(晴信)存分之由也、併爰元御校量次第之儀也、

其外此方之番衆中、意分共委物語也、

一八日、藥師へ祈念別而仕也、小川へ忠棟御座候間、彼

方まで打立候也、然処ニ中途まで忠棟使僧預候、宿等

仰置れ候間、早々小川へ可參之由也、此日忠棟宿にて

終日談合也、其衆伊野州・上長(本田正親)・本刑(新納久勝)・新右・税新、

此衆也、此夜忠棟より使ニ而承候、明日拙宿にて談合

之由也、何と様にも御校量次第之返事申候也、

一九日、此日於拙宿御談合也、其衆忠棟・伊野州・上長

・新右・税新・拙者也、終日諸番盛等被成候、各へめ

し振舞申、終日酒宴也、此日花之山へ敵出候由聞得候

て、各若き衆續也、無何事之由聞得候て、臆而續衆歸

也、其後又拙宿へ忠棟入御候て、暮・將暮などにて閑

談也、此夜忠棟宿へ可參由候間參候、今日被成候番盛

等、未事果事等候間、然々盛候て可然之由候間、伊野

・税新・拙者盛候也、從夫拙者ハくさニ振付候間、罷

歸候、

二十日、早朝忠棟より使ニ而、夕くさ之様ニ候つる、如

何候哉、忠棟御事ハ、先々如八城今日御越之由也、尤

可然之由申候、伊野・本刑など各くさ見ニ御出候、又

花之山より二番衆被歸候、諸地頭など暇乞ニ各御座候

也、終日くさ不醒候て、休居候、此夜亭主御酒振舞候、

種々之儀共也、此日花之山へ當番衆へ辛勞之事、又ハ

二三ヶ条御用之事等候間、上原長州被差登候、かこ嶋

へも、梶取事就候、當者番盛被成、各歸陳被申候、忠

棟・拙者事者、上意次第可罷歸之由申上候也、本田野

州・忠棟替ニ御立可然之由也、秋月(種忠)より無事之儀到來

未聞得候、是ハ必此方にて各不承候共不苦候、彼方使

かこ嶋まで參候ても可然候、又本野州・平濃州此方へ

御入候ハ、爰元にて可被聞せ事ハ其分たるへく候間、

菟角忠棟・吾々ハ罷歸候する哉之由、伺御意候也、此

夜亭主夫婦出候て、種々肴にて御酒振舞候、

二十一日、如恒、天氣惡候間、くさ養性申、此日も小川

へ逗留申候、上長州花之山より歸にて候、彼方之衆辛

勞之段、態申候、祝着之由共也、御酒參會、良久閑談

共候、從夫長州者如八城打立也、此日も陳歸之衆多々

被來候也、雨中之間、終日暮・將暮などさせ候て見候、

又ハ石原方へ狂言・物語なとさへ候て、慰候也、

一十二日、薬師へ看經別而仕候、石原へ食寄合候て、種

々戲言共申慰候、城殿(一要)より使也、其後無沙汰之由也、

酒肴送預候也、天草殿よりも使書到來也、各返事即申

候、圖書頭殿(忠長)より御使にて、爰元へ歸着仕候、目出被

思召候、儒者先刻御有増共候(高城)キ、珠長御会尺之一折、

拙者相待せられ候、今日罷歸候間、明日御興行可被成

之由也、忝令存之由申入候、田尻殿(鑑傳)より、山くゝり書

狀持來候、趣、彼境無替儀候、前日荷籠之礼儀也、又

秋月媒介を以龍造寺と御和平之由候、必定其儀ニ候ハ

、彼方之事者同前ニ宜様ニ被頼入之由也、山新より

も、くさ氣之由いかゝ候やの使也、川上(忠盛)左京亮殿、親

父三州(忠盛)よりとて猪一丸持せ御座候、御酒參會申候也、

忠棟・濃州へも使にて歸候由申候て、くさ養性仕候也、

明日連歌之再篇持せられ候間、仕候て、變而忠棟へ進

入申候也、

一十三日、圖書頭殿於御宿御連歌也、其座躰客居忠棟、

次珠長・深水三川守(宗方)・紹意(兼田)・養田紀伊介也、主居麟臺(忠盛)、

次拙者・伊野州・税新・福屋日向守也、此座中從義虎、

忠棟・拙者へ御狀預候、諸堺目之儀共也、又ハ歸宅之

刻、泉へ兩人同心にて可參之由也、御連歌過候て、御

酒なと種々參、戲言共也、各罷歸候也、

一十四日、如恒、忠棟御宿にて談合共也、吉利殿(忠盛)、三城

口より高知尾境計策共被成候、左様之事等出合候也、

此日珠長宿へ行候、會尺ニ、明後日渡、一折興行申度

存候、然者發句所望之由申候也、乍斟酌可被案せ之由

也、此晚伊野州宿へ忠棟御出候間、可參之由候間、其

分に候、種々着にて御酒也、其半ニ誹諧なと候、深更

ニ罷歸候也、此日志岐(親重)兵部太輔殿より使書預候、北絹

一端預候也、

一十五日、看經等別而仕候、平田濃州無沙汰候とて御座

候、御酒參會候也、珠長發句出來候とて被持來候也、

其砌、吉利殿、陳へ御座候暇乞ニとて御出也、珠長同

前ニ御酒參會候、其間ニ脇案し候也、即申候て、圖書

頭殿第三あそはされへき由申候て、本田治部少輔殿へ

持せ申、進入候、變而あそはされ候するとの御返事也、

此日忠棟・濃州へ御礼ニ參し候也、明之一順連衆等申

定候也、此晚田尻殿より山くゝり來候、同書狀預候、

彼堺無替儀之由也、龍造寺より和平之儀、彼方へも蜜

通を以被申懸候、然共鑑種事、爰元御下知次第たるへ

く候、万端頼之由也、

一十六日、於拙宿連歌也、座躰客居圖書頭殿・伊野州・深水三川守・税新・宗珠也、主居忠棟・珠長・拙者・本刑・養田紀伊介也、發句珠長、山柴の枝うつりする殿かな、脇拙者、羽風の音も寒き朝鳥、第三圖書頭殿、瀧津せの浪や氷もあへさらん、如此也、夜入候て成就候、終日御会尺如常、

一十七日、如常、忠棟風呂焼せられ候、可參之由候間、其分候、風呂過候て、碁・將碁などにて慰候、夕食振舞也、此日昨日之懐紙、珠長被來候て再見也、種々沙汰共承候也、田尻殿返書仕持せ候也、此夜佐多宮内少輔殿被來、物語共也、其因肝付彈正忠殿養子ニ忠棟子息懇望之内儀、別而被仰候、使被成候由也、霜臺も拙者へ談合被成たる由、彈もし被仰候由物語也、然者拙者前よりも次に候間、彈之事便にて候俣、近比目出存候通、少輔殿にて申候也、此日新武陳より當処迄歸宅也、

一十八日、如恒、觀音へ別而讀經共申候也、此日伊野州被歸候暇乞承候也、平田濃州より同名駿河守殿にて承候、當所衆御番之儀、於花之山談合共候哉、可然候、

役人衆之事、一人宛へ爰元へ罷居候へて、諸篇御不

知案内之条難成候、然者番番ニ、一人宛者此方へ可召置之由也、三舟・隈庄之質人、是又當所衆番等させられ候事、碁之御番取合難成候、内端などへ可被召置御談合、頼なさる之由也、忠棟より捻を以承候、圖書頭殿風呂へ入御候、其後御茶湯会尺たるへく候、可參之由也、纏而參候、即四帖半之座へ圖書頭殿御案内者仕、はいり候、亭主之御手前也、薄茶者圖書頭殿御手前也、圍爐裏にて、種々御会尺などにて閑談共也、深更ニ罷歸候也、此日深水三川守殿より使也、去春 大守様御養性氣之刻、一萬句之御願忠房被立候、然者成就有度企候、發句一頼之由也、題持せられ候、櫻にて候、乍斟酌思案可仕之由、返答申候也、

一十九日、如恒、忠棟御宿にて碁・將碁にて慰候、従夫茶湯之座ニ而、各たてのきに稽故共申候、左候処に、珠長被來候、明日之連歌一順共仕候也、夜入候て歸宿候、阿多掃部助殿同心申、夕食振舞候、然処、上原長州より酒肴持せられ候、彼御酒各寄合賞翫共仕候、閑談共也、

一廿日、早朝忠棟へ參候、隈本より北郷殿内衆來候、内

空閑(餘閑)下野をからくり候、此方へ御奉公之由被申由也、

僧者近日中此方之人衆指出、於中途談合せせられへき返事也、彼方よりハ菟角御出勢之砌御奉公之由也、從夫忠棟同心申、深水殿宿へ行候、即連歌始候也、座躰客居圖書頭殿・新納武州・拙者・宗郁・宗珠・蓑田紀伊介、主居忠棟・珠長・稅新・奥野越前守・深水三川守也、終日會尺共也、深更ニ各罷歸候、

一廿一日、如恒、大明友賢へ易之占頼候、拙宿へ來候て占候、加判役御侘去夏已來申懸候間、左様之儀也、本卦雷地豫、變卦雷水解也、心靜ニ上意ニ隨候て、次第〳〵ニ御侘申候て可然之由也、深水方昨日之礼ニ被來候、犬童美作入道御酒持せ被來候、即賞翫仕候、愛甲方御酒持せ被來候也、志岐殿(命題)より柎取祝言之使僧預候也、此晚圖書頭殿より忠棟・拙者、御茶湯被成候、可參之通被仰候間、忠棟同心にて參候、御亭主御手前也、閑談共也、夜入候て罷歸候、此夜從鹿兒嶋本野州書狀到來候、忠棟・拙者兩人、柎取彼是辛勞之儀被仰出候、僧者諸口無相替儀候哉、諸番手等被仰調候上(者)□、兩人之事、早々歸宅仕候て可然之由也、

一廿二日、如恒、本刑被來、金吾様(殿)より、伊集院伊与介

役之侘被申候、就夫、平濃州・拙者へ意得被成候へと
の御自筆之御狀、他見有間敷由に候へ共、拙者可見申
之旨候て持來也、披見申候、与州へ濃・拙者異見可申
之由御書載候間、即本刑へ書狀認させ申、濃・拙書狀
にて異見申候也、此日志岐兵部太輔殿返書申候也、深
水三州へ、先日發句之由承候、珠長へ尋候て可申存候
処、与風昨日船本へくたられ候、然者三州劫者之事に
候条、發句ニ申候、いつれにても所好次第、又ハ指合
なとなく候するを定められへき由申候也、櫻之題にて
候間、又やみん月を木の間の櫻かり、みそれする筆か
そゝく山櫻、如此ニ書付遣候也、新武州などへ談合候
て可被定之返答也、麟臺よりも御使預候、御加判役之
儀御當被成候、涯分御侘御申候する間、吾々までも御
頼之由也、此晚忠棟宿へ參候、新武・上長・本刑・蓑
田信濃守など被有合候て、種々着にて御酒宴也、龍造
寺・當邦和平之儀ニ付、先日之使一兩日中罷下由、彦
山伏傳ニ當庄宿処へ申越由、新武被聞付由候、然者各
逗留之事、五日候てか可然候すらんと出合候、就夫
右之承候者被召寄、尋なされ候、不紛急度此方へ可參
之由者傳言申候、必定ハ不存由也、僧者先々明日各歸

宅被成候て可然之由定候、其故者、無事之儀彼方より懇望仕事候、されハ寄合中此方へ待居候てハいかゝたるへく候、猶々懇篤之儀候ハ、秋月之使かこしまへ參候て肝要之由、各被申候也、深更まで閑談共候て、各明日歸宅ニ定、宿々へ罷歸候也、

一廿三日、早朝從義虎御使書也、爰元辛勞之儀、又ハ歸宅之刻、若々鹿兒嶋へ參上之志候ハ、泉へ頻ニ可參之由也、其外御戲言共也、相應之御報申候、此日打立、忠棟同道ニ罷歸候、高田にて芝居にて御酒也、從夫左敷へ着候、殊之外之大雪也、今夜月待申候也、忠棟捻を以承候、今日ひなこの磯にて思ひ出なされ候とて、書付預候、浪立て雪を汁(汁)の嵐かな、馳而、一むらたのむかけの蘆鴨、と脇を申候、其次、長旅中徒然之式共狂歌にて申候、馳而返歌共被成候、大朋友賢其席ニ有合候て、詩共作候とて預候、馳而拙者和韻共仕也、

一廿四日、早朝打立候、山中雪深候て、爰かしこにて酒のミなとし候て、漸久木野々へ着候、圖書頭殿も彼所へ御一宿也、然者彼御宿へ參候、其後拙宿へ被懸御意候、終夜御閑談也、御酒宴共也、

一廿五日、早朝打立候、大口にて、破籠之御酒なとたへ

候、其次、地下衆一兩人御酒共預候、參會候て賞翫申候也、此晚漸般若寺へ着候、門前ニ宿仕候、別當被聞付、自身御出候すれ共當時禁足にて候間、使僧預由候て御酒もたせられ候、其後風呂焼せられ候由候間、馳而入候て慰申候也、

一廿六日、小林にて愚弟次郎左衛門尉処へ着候、於中途鉄放にて鷹一仕候、此夜衆中・忬者などハ三ヶの山まで遣候、拙者ハ二郎左衛門尉処へ留候、終夜会尺閑談共也、

一廿七日、夜を籠打立候、紙屋之町・本庄萬福寺、爰かしこにて御酒なとたへさせられ候間、遅々候て、亥刻計宮崎へ着候也、

一廿八日、寺家衆其外衆中、又者已下之者共まで、歸候とて來候、皆々酒肴持せ候也、(上井兼經)恭安齋一兩日此方へ御逗留候、能仕合拙者歸候、見參被成、此日御歸也、

一廿九日、越より罷歸候源左衛門尉殿、水鳥かけられ候て、我々直ニ振舞也、此日金剛寺御酒持せ上也、參會候て賞翫申候、此晚小鷹仕候、鵠三取せ候、從夫直ニ夕越ニ立候、此夜穂村ニ留候、池田志广拯種々會尺仕候、越之鳥なと賞翫申候、

一卅日、朝食池田志广拯振舞候、種々会尺也、爰かしこ
より酒肴なと到來候、終日碁・將碁にて慰候也、此晚
如城之罷歸候也、從鹿兒嶋清武傳ニ、本野州より書狀
預候、趣者、此間永々旅中辛勞之儀、又ハ殿中作材木
・葺板・針なと、從所々未來候、各出帳留守にて候へ
共、涯分急候て進上可申之由也、